

532

22

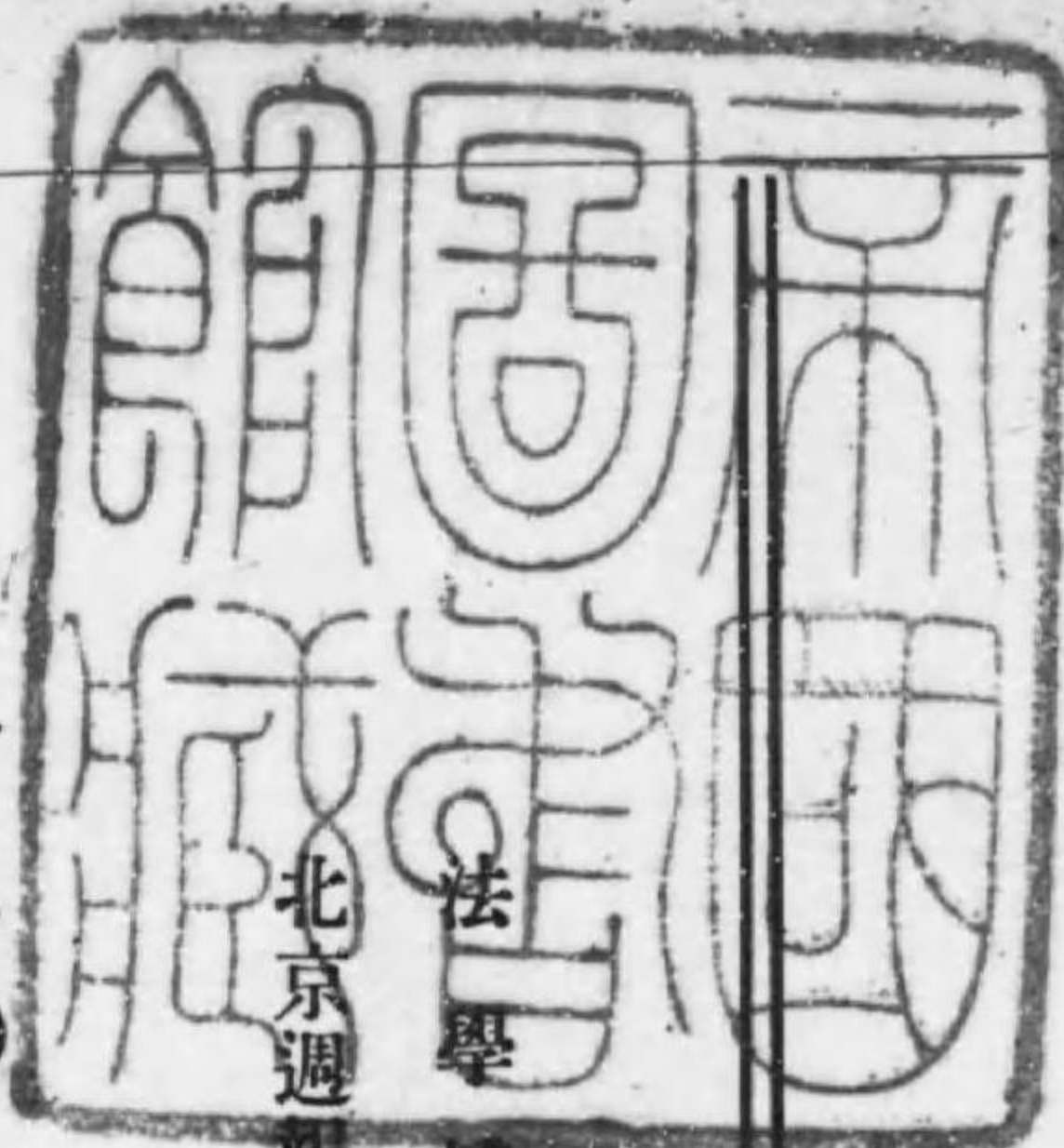
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始



532-22

支那當代新人物



法學博士吉野作造序
北京週報主筆清水安三著

大正
13. 11. 15
内交

東京—大阪屋號—發行





宣 統 帝



曹 錕



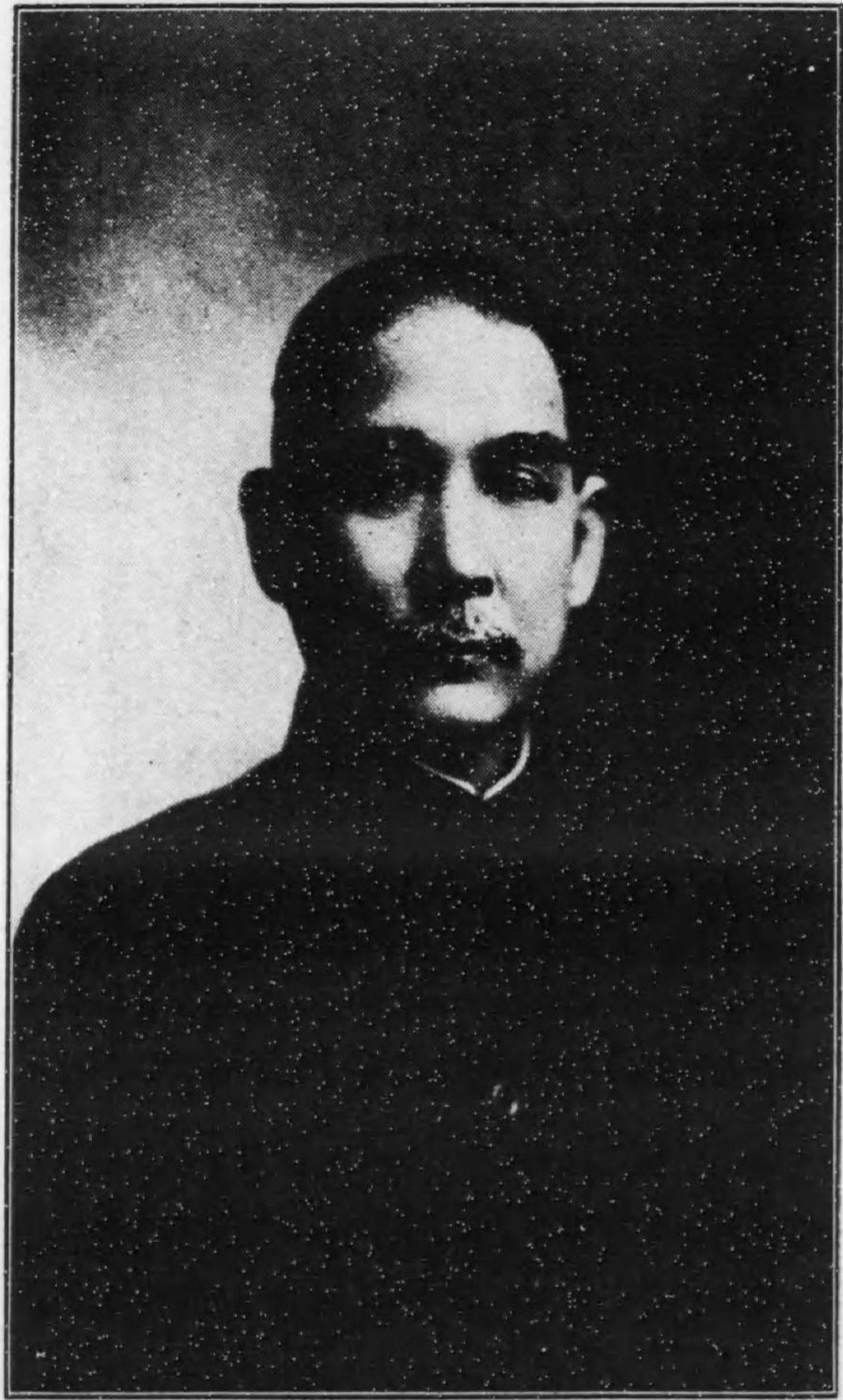
張 作 霖



吳 佩 孚



馮 玉 璋



文 孫



蔡元培

人の書いたものに序文などを書かないと云ふ年來の方針を破つて清水安三君の新著を紹介すべくこゝに筆をとる。斯く云ふと馬鹿に勿態を附ける様だが、少しく考ふる所あり極めて稀な特別の場合の外は書かぬことにして居る。それを清水君の本に限つて書く氣になつたには理由がある。之をならべて序文に代へる。

第一に清水君の本は非常にいゝ本だ。清水君は支那の事物に對して極めて公平な見識をもつて居る。今日は親友の交りを爲して居るが、予が氏を識るに至つたのは、實は大正九年の春同氏が某新聞に寄せた論文に感激してわれから教を乞ふたのに始る。爾來同氏はいろ／＼の雑誌新聞に意見を公にされて居るが、一として吾人を啓發せぬものはない。最も正しい見解の抱持者として今日の支那通中蓋し君の

右に出るものはあるまいと信ずる。

第二に清水君の論説する所は悉く種を第一の源泉から汲んで居る。書いたものに依て其人の思想を説くのではない。直接に氏の書中に描かれた人々と永年親しく付き合つて居るのである。斯の如きは清水君でなくては出来ぬ藝當だ。何となれば支那の新人と接觸して能くその腹心を披かしむるまでに信頼を博するは、殊に今日に於て我が同胞に殆んど不可能だからである。清水君はこの不可能を能くし得た唯一の人である。

従て第三に同君の本書に論じて居る題目は、同君に取て他人の仕事ではない、我が仕事同様の同情と興味とを以て取扱つて居る。茲にまた限りなき味ひがある。

第四に清水君はまた其の好む所に偏して宜い加減の事を云ふ人ではない。悪い事は悪いと憚りなく云ふ丈の勇氣と聰明とを有つて居る。此點に於て同君の書いたものは當になる。從來同氏の言説を當にして嘗て私にしまつたと後悔したことはない。

第五に清水は無名の士である。本の値打は本自身が語れば足りる。序文などは無用といふはこゝだ。併し日本では不幸にして良いものが必しも通用しない。矢張り紹介者がいる。厄介な國だ。賣れなくたつて構はぬといへば夫れまでだが、それでは清水君が困る。困るからと頼まれたとて良くないものを良いとは決して云はぬ性分だが、清水君の書いたものに間違のあらう筈はなし、私の様なものの紹介でも少しは役に立つならと喜んでこの駄文を送つた次第である。

餘談はさておき、此種の研究として信頼すべき纏つた本は、恐らく清水君の外には出来まい。良くも悪くも之が唯一の本である。況んや同君の造詣と聰明と同情とは此種著述の作者として十分信頼するの價值あるに於てをや。是非同君の此書を座右に備へられんことを冀望する。

大正十三年九月二十日

吉野作造識

四

532-22

自序

徳富蘇峰先生の「支那漫遊記」に

「惟ふに我邦の各宗教家にして、果して一生の歳月を支那傳道のために投没する決心ある者ある乎。予は英米其他の宣教師の隨喜者にあらざるも、彼等の中に此の如き献身的努力あるの事實は、縱令曉天の星の如く少きも、猶曉天の星として其光を認めざるを得ざる也」

とあつた。當時京都同志社大學の一學生たりし著者は、この一文を読み、殆んど惑はざるもの如くに、この文の虜となつた。

校門を出でて茲に七年、この間恰もこの一文を反證せむ爲めに生けるが如くに、支那に傳道して今日に至つた。未だ小さい事業乍らも支那人教育の發足を爲し、飢饉の折には七百の災童を救出して、飢渴を免れしめた。時の大總統から勳五等の嘉禾章を贈られた。蘇峰學人には未だお目に懸る機會を持たないが、我が同志社の先輩であることを知つて居る。必らず他日「我邦の各宗

「教家」の爲めに萬丈の氣焰を吐きて、蘇峰學人の前に曉天の一星たらざるべからずと決心して居る。

文學博士桑原隲藏氏が、大正六年雜誌太陽に「支那學研究者の任務」といふ論文の中に述べて居られる。

「歐米人で支那に來て居る者は、外交官でも、税關吏でも、將た宣教師でも、その本職の暇に種々の不便を忍び乍ら眞面目に支那を研究することを怠らぬ。例へば一昨年十一月に袁世凱の顧問に招聘せられ、支那渡航の途中、布哇で病死した、米國のロツクヒルの如きも、その一人である。彼は一八八四年（明治十七年）に始めて、在北京の米國公使館に赴任し、爾後或は書記官として、或は全權公使として、前後を通じて十五年間、支那に駐劄した。かねて梵語とチベット語の素養ある彼は、最初支那在職中、主としてチベット佛教の研究に身を委ねた。かくて彼は公務の傍一八八八年（明治二十一年）乃至一八八九年（明治廿二年）と一八九一年（明治廿四年）乃至一八九二年（明治廿五年）の二度、蒙古チベット方面を探險して、英國の地理學會から賞牌を授與されて居る。一九〇〇年（明治卅三年）に彼は英國のハクルイト會から、有名な「ルブル

クの紀行」——ルブルクは西曆十三世紀の半頃に、蒙古へ旅行した耶蘇教の僧侶である——に精細な註釋を加へて出版して居るが、これは彼の囊の探險と、尠からざる因縁の存することゝ想像される。彼がこの紀行を出版する際に、幾多の支那の史籍を涉獵したことが、やがて彼をして支那學研究に、一層の興味を起さしめ、此くして、彼は遂に米國第一流の支那學者となつた。その晩年に、彼は宋代の「諸蕃志」と元代の「島夷志略」等を研究して、中世紀に於ける支那と諸外國との海上交通の狀況に、多大の光明を寄與して居る。

今より十五六年前に死んだ英國のフイリツプスの如きも、亦かゝる種類の支那研究者の一人に擧げて差支あるまい。彼は一八五七年（安政四年）に香港に來て、こゝで始めて支那語を稽古して通譯となつた。後に副領事又は領事として、南支那の各地に駐在したが、彼は到る處で、土地に相應な題目を捉へて研究した。例へば臺灣では、國性帝（鄭成功）とか、臺灣占領時代の商人とかを研究して居た。併し彼の尤も精力を注いだので、福建地方の貿易港の沿革と、明代に於ける支那と南洋との交通——明の馬歡の「瀛涯勝覽」を中心とした——の研究であつた。此等の問題に關する幾多の論文は「英國亞細亞學會雜誌」や通報や、その他の雜誌に掲載されて居るが、一

★紹介することができぬ。

十數年前から米國のロンピア大學に招聘せられ、今も同大學の支那部の主任として、世界に知られた支那學者に獨逸のヒルトがある。彼は一八七〇年（明治三年）に始めて、支那税關に聘用され、爾來約二十五年の間、主として南支那で奉職した。この間に彼は熱心に支那を研究した彼の出世作は一八八五年（明治十八年）に公にした「大秦國全錄」である。彼はこの著者によつて一躍に第一流の支那學者に列することとなつた。その以後に於けるヒルト氏の學業は、多く我國人に知られて居る故に、特に紹介するに及ばぬと思ふ。

一九〇一年（明治卅四年）に死んだ露國のプレットシュナイデルや、一九〇八年（明治四十一年）に死んだ英國のプセルは、何れも北京公使館の醫員として、在職中に、支那學を研究して妙からざる効果を奏して居る。前者は一八六六年（慶應二年）乃至一八八三年（明治十六年）の間支那に駐在したが、彼の「支那植物學」や「中世紀（金として蒙古時代）の探究」等は、今猶ほ學界に重用されて居る。前者は一八六八年（明治元年）以來、三十餘年間支那に滞在し主として支那美術殊に陶磁器の研究に手を着け、「支那藝術」と題する著書の外、幾多の著者や論文を發表

した。彼は又その滞在中に銅器、貨幣金石拓本、骨董類を無數に蒐集して歐洲に齎らした。

かゝる例證を擧げなば、殆んど際限がない。之に對比するとわが日本人で、支那人で支那の使館や、税關其他に奉職せる人は、種々の便宜を有するに拘らず、何等注意すべき研究を發表して居らぬは甚だ遺憾の至りである。併し翻つて考へて見ると、何事も研究心の缺乏して居るのは、日本人の通弊であつて、必らずしも支那在留の日本人のみを、咎めることが出来ぬと思ふ……」

この一文位、當時支那に來たばかりの著者を、刺戟し教ふる文章は無かつたであらう。支那智識の皆無なりし著者を孫逸仙を知れども孫文を知らざりし程の著者を熱烈なる支那研究者と爲したるものは、實にこの一文であつたのである。

西洋から支那に來てゐる宣教師には七年目に、一年の休暇を與へられることになつてゐる。その休みの一年をサバテカル、イヤー安息年と稱してゐる。彼等はこの安息年に、歸國して漸くオールドファッションになれる洋服を脱いて、新流行の洋服を仕入れる。時勢に遅れた頭腦も、久振に洗濯されるといふ物である。著者もまた七年を一期として、支那で働く決心であつたものであるから、支那研究も成るべく七年間に一切り着けられ相なものを選んだ。

支那現代思潮と支那現代人物を調べて見やうと、決心したのが七年前の初志であつた。無論同じ研究するなら、もつと外によい題目がありそうなものだと、思ひ迷ふたのも、實のところ一再ではなかつたのである。けれども思立つたことであるから、兎も角も角もこの七年間にはやつてのける事にした。その收穫が「支那新人と黎明運動」「支那當代新人物」の二卷である。無論學究的なものではない。興味中心の讀物に外ならない。今度支那に歸ればそれこそ地味な研究に没頭する心算である。

今や七年目のサバテカル、イヤーを靜養せずして活養する爲めに、米國留學の途に上ることになつた。その洋行の費用をこの七年間の收穫が手傳ふことにならうとは全く豫期せざる所であつた。この上はこの兩卷が、讀者に面白く讀まれ行く中に、讀者をして支那に興味を抱かせるに至らば、著者は本懐の極みである。

終に當つて、過ぐる七年間思ひ存分に働かせ、勉強させて下さつた高木貞壽老台、校正の煩勞を厭はざりし畏友鈴木長治郎君、出版を快諾されし大阪屋號書店主に滿腔の感謝を獻ぐ、

(一九二四、八、五) 留米の途上太平洋丸にて 清水安三

支那當代新人物 目次

自序……………一

在支宣教師の獻身的努力——在支外人の支那研究……………一

宣統帝……………一

帝王の悲哀——大傳の病を訪ふ——微行のシヨンピング——胡適に師事す——帝の犬趣味——未だ見ぬ慕守が娘……………一

黎元洪……………一二

再度大總統となる——公俸の外に盜まず——之で支那では民衆の國——撥督裁兵——廉潔無策……………一七

曹錕……………一七

馬の字——ネクタイの洋服姿——雄偉なる馬丁——政界の話種……………一七

張作霖……………二〇

ありふれた傳記——脈を投出した話——末恐ろしい子——我鬼大將——熊と相撲——馮麟閣は……………二〇

兄弟分——馬賊の紅雲——義和團の變——段芝貴を追拂ふ——危く爆彈を免る——朝鮮人參の威力——中央の槍舞臺

吳佩孚……………三七

親切なる兄と嫂——吳佩孚の先輩——日探として——戦ふ毎に名をなす——排日と愛國——董廉と高恩洪——日本に對する態度

吳佩孚を洛陽に訪ふ……………四七

奉直再戦の噂——ゆかしき挿話——大總統袁世凱之墓——陣營の規模——仁者樂山智者好水——竹盞く人

吳子玉……………六六

食卓を圍みて——支那流の人物——廳下に人物なし——悠々閑日月——痛快なる逸話

馮玉祥……………七四

其友を見よ——淪落の女——酒と女は敵——俸夫に教を受く——クリスチャン將軍——善良なる暴君

顔と王と願……………八一

顏惠慶——王正廷——顧維鈞——顔は排外——王はリフィンセントルマン——ちよこ着く願

——思つたよりもやる男

王寵惠……………八五

華府會議——北大教授——外交は登龍門——兩棲動物——外國病院へ入る

汪榮寶……………九〇

南に太炎北に袁甫——國旗の創案——難關は登龍門

辜鴻銘……………九五

岡鹿門と辜鴻銘——張之洞の引見——辯論と思想——胃の腑は洋食——東は東、西は西——ダゴールと辜鴻銘——妻君は日本人——國學の力量——狂ひ辜——蠻人||浪人||狂人

柯劭忞……………一一六

有觸れたタイプ——新元使と二十四史——純然たる支那人物——二種の學者タイプ——唯一の博士

康有爲……………一二一

日本の流行は支那の流行——支那は過激思想の免疫國——康有爲の大同論——康有爲小傳——民主思想と大同孔教——尊孔案と反孔運動——最左翼と最右翼

梁啓超……………一三一

彼の小傳——飲米室文集——今文運動——先秦政治思想史——彼の歐米觀——彼の中國觀——彼の日本觀——彼の著書——思想界のパロメーター

胡適……………一六四

何處に行く——彼の學歷——文學改良芻議——文學革命の大旗——建設國語文學論——支那のルナイサンス——支那哲學史大綱——無後主義

周三人……………一九二

周樹人、周作人、周建人——魯迅と其小説——白話詩人仲蜜——支那の武者小路

陳獨秀……………二〇一

政治革命——思想革命——文化運動——反宗教運動——マルキスト

李大釗……………二二三

胡適より李大釗に——彼も留日學生——陳獨秀去つて後の北大——反宗教運動——露國承認運動

李石曾……………二一九

サンヂカリスト——亟相の子——袁世凱暗殺——豆腐博士——生物學者——反宗教運動——婦人解放運動

江亢虎……………二二六

日支の關係を論ず——女子教育の先驅——社會黨解放——南方大學の建設——彼の主義學說——人物と風貌

孫文……………二三七

孫文小傳——孫文學說——三民主義——五權憲法——建國方略——孫文の人氣

蔡元培……………二八三

支那國民性——迷信打破——後妻募集廣告——仁は人格といふ意義——美學と專攻

支那の人物……………二八九

一萬好人黨——人物何處にある——支那の國民性——章炳麟の學問——支那の學者型——支那に支那流を許るせ——支那人は複雑——支那人を御する方法

支那當代新人物 清水安三著

——舊人と新人——



宣統帝



中華民國の地圖を擴げて、溥儀——皇帝の實名——はひひと笑うた。お側に待つてゐた清の舊臣某氏は怪しう思つて、畏々たづねた『皇上陛下、何か可怪之事が御座いました』いや、この廣い中國が、みんな朕の領土ぢやと思へば愉快だと思つて、をかしうなつたのだ』
某氏はほろりとして、臉を閉せて、暗然として黙した。涙がとどめもなく、頬を傳ふのであつた。

「汝は何か思ひ出でたのだらう、大層顔が蒼い。多分朕が、この地圖を眺めて、朕の領土だと思へば等といったから、そうした蒼い顔をしてをるのであらう、別に朕は何とも思つては居らない。爪の垢程も悲しうは思つて居らぬ。がしかし、今の世の皇帝の身の上を、ちよつとでも考へて見るがよい。朕が中華民國の地圖を擴げて、「朕が領土は」等といふのと、どれだけの差があらう。皇帝は人に非ずして、名である。名であつて力ではない。お前が泣くならば、その時代錯誤の涙

を、全世界の皇帝の爲に注げ』

某氏はその意味を解することができなかつた、けれどもこの頃傭聘せられた英人教師が、色んな新知識を宮室に注入することを思ひ至つて困つたものだと思つた。或日師傅——講進者の陳寶琛が何時ものやうに白髯をしごき乍ら、胡麻白の髻髪を垂れ、一品の清服を穿つて、皇帝の爲めに跪座した。

『先生……………』

皇帝は陳氏を師と呼んで見た。

『あいやあ、！』

師傅は額を床土に、すりつけて先生と呼ばれた言葉を、遮へ切つた、恐惶堪へ得ざる旨を述べて、感泣した。

皇帝は不快な心持になつたのをもう一度考へ直して、から／＼と笑つた。そのことであつてから陳師傅は、病と稱して出仕しなかつた。ある日の午後、師傅の門前に馬車が止まつた。師傅の家は構へこそ宏壯ではあるが、何年か修理せぬこととて、朱油があせて、雨風に荒されてゐた。

近年は門前雀羅を張る有様で、寂寥家に満ちてゐる折柄、やんごとなき人々の馬車らしいものも止つたのであるから、看門的は名刺も受取らないで主人に告ぐるに馬車の來訪を以てした。

兎に角客廳に通せとのことで、馬車の客は招ぜられた。堂奥からちらつと盗み見たる師傅は一見して、その皇帝の溥儀たることを知つた。師傅等一族は、このことを知つてそつと院子に出で、額を土に着けて、皇帝の徳を讃嘆した。

『子弟が師の病を問ふそれをしも徳と稱せば、世の徳なるものは、極めて雑作なきものである！』
皇帝は師傅の病輕きを知つて、非常に喜んだ。師傅は皇帝には皇帝たる道がある。今後斷じて民間に玉座を求め給ふなど勸言しつゝ感泣した。

『朕にも、せめて人間らしい情緒の發露、知恩の行動を許して呉れ。誰が世に在つて師の病を憂へざるものあらんやだ』

皇帝は師傅の涙に、誘はれて自らも泣いて居られた。

『あゝ、朕は今日始めて、虚なる皇帝から逃れた、そうして、先生の病を問ひえた』

皇帝の聲は、殆んど叫びと謂はるべき程に大きかつた。このことであつてから、宣統帝に對す

る世評は二つに分れた。清朝の舊臣達は憂ふべきこの頃の帝が振舞、如何にかして皇帝を諫め、王者の威儀をととのへさせ給ふやうに、と心を碎いた。又別の世評は帝の皇室の新人たることを知つて、心からその心持に同情を表した。

二

ある秋の日の午後、帝はそつと宮居を拔出して馬車を琉璃廠に驅り、骨董店を冷やかした。『これは宋の磁器、あれは漢の銅器、呂紀の花鳥仇英の山水、徽明の書畫』それからそれへと、見せかけられた帝は考へて見た。これらの骨董は、何れも自分の所有物だと謂はれてる帝室の博物館に有る。さうしてこの店頭に在る何れもは、その最も劣れる品物よりも、優れてはるぬやうだ。

『掌櫃的——番頭さん——この呂紀の老鴿は幾らだね』

帝はふと尋ねて見る氣になつた。

『百八十圓頂きませう、剛まりつめたまごころ纒』

『さうか。ぢや買つて行くことにする』

帝は、鱗皮の墓口を開いて、何枚かの札を並べた。

掌櫃的は全くのこと變な顔してゐる。

『ぢや、百八十圓？』

掌櫃的は左の掌で、頬の皮を摩り乍ら、いひ憎さうに、口を開いた。

『あのでは百五十圓におまけして置きませう』

帝は生れてから始めての驚きに出喰した上に、十圓札三枚を引つこめねばならなかつた。

さうして自分が、値切らなかつたことを悔ゐたといふよりか、金を使つて見たことのなかつた、自分、世間知らずの自らを恥ぢた、百五十圓の呂紀の老鴿を、小脇に抱いて悠々と店舗を出むとするや、恰も道行く年老いた旗人、滿洲士族が帝の帝たるを見出して道に跪坐して叩頭した、骨董屋の番頭達は無論のこと、そこら一帶の人々は道に、恐縮して皇帝を拜まざるを得なかつた。一體そのあたりは漢籍とか骨董とか、古いものに縁故の多い町のことゝて、恐縮すべき筈の人間が特に多く生き残つてゐた。

帝はこの光景を見るや否や、馬車の中に飛び込んで、大急ぎで歸路に就いた。さうしてこつそ

リシヨツピングをやつて、一種こそぐつたいやうな感興を抱いてゐた所を、滅茶々に興破られたことを腹立たしく思はれた。

馬車の中で、呂紀を廣げて見て、それからそれへと考へ込まれた。

——清室に有る凡ての貴い寶、骨董はみんな清室のものだといふけれども、實は一つとして清室の買つたものではない。無論自ら作つたものでもない。謂はゞ献上されたもの掠奪したものなのだ。だから、時代が變れば凡ては、自分のものでなくなる。一切のものを我物とせる皇帝は、一切を我物と爲し能はぬ、有即無、あゝ、俺は呂紀の老鴿一軸にて足る。これ丈は少くも俺のものだ。が、しかしこれとても、また我手から取上げられる時が来るかも知れぬ。

帝は若い考へ方に、大きい不安を感じると共に、何となく解つたやうな心持がするのであつた。

帝はこの日の微行の後に、出御の護衛兵を止めた。侍従との同乗を廢した。

三

また或る日の朝、帝は電話を東局二四二九にかけた。東局二四二九は北大教授胡適の電話であ

る。

——私は溥儀です、あの宣統です。……………

胡適には何の何だか、陳羹乾羹譯が解らぬ、溥儀、誰のことか知らぬ、まさか宣統帝から電話がかからう等とは、爪の垢程も考へたことがない。

——……………若しもお暇があつたら私ところへ一度、来て下さるまいか、……………

少年の聲である、はてな學生かなあ、この忙しい——忙しく生きてるといふことは、つまり偉い人間として生きてゐるといふ意味に考へ易い、近來の人物は——我輩に出張を申出るのがあらうとは、寝耳に水である、そちらから出張して、門を敲いても三度に二度乃至三度は、不在家をつかはさるべき筈である。然るところを一度出駕せよとは、世にも稀れな厚顔の士である。さて——どうも、思つてると自動車を迎へに來た。溥儀とは、何者ぞと問ふと、それはその愛親覺羅は第何代の孫宣統皇上とは申す、てな話である。そこで胡適は宮室に召されて、帝と相談し相語る段取とはなつた。

胡適は帝を呼ぶに、皇上を以てし帝は胡適を稱して先生先生を以てしたさうである。十七歳の

少年宣統帝は、これより支那新人胡適の弟子入と相成つた。

『胡先生、豫ね／＼からお尋ねしたい、したいと思つてゐたのです。朕があゝの自分の先生の病を訪ふことが、何ぞ悪いんでせう。先達朕は師の病めると聞いて、自らその病床に病を慰めたのですが、それを皆のものが、没常識だとか、皇帝たるの徳を持合せぬとか、批評するんです。先生は支那新人として朕の夙に慕ふところの人、どうか御教示願ひたい』

胡適は前なる椅子に腰かけてゐる。曾つて外人と王家のものに非ずして、腰掛けたまゝ帝にまみえたものがない。胡適は可憐なる少年、末帝の顔をぢつと見つめ乍ら、一種の哀愁に打たれた。今までは『皇帝』この言葉を、時として憎ましげに思うたことも、屢々であつた。しかるにかうして相對し、相面して見ると、それは憎むべきものに非ずして氣の毒なものであつた。人間らしい生活。自由な人間を味はずして、何とかかとか環周に祭り上げられて生きねばならぬ、世にこれ程に不遇なる生活があらうか、可憐だ。犠牲だ。思ふと己にもう涙組ましろなつて來た。

『いゝでせうとも、人情で遊ばさるゝことですから』

やつと之丈けを答へた、帝は只これ丈けの言葉を聞いただけで、ほんとうの人間に觸れて見た

やうな心持がして、嬉しかつたさうである。

胡適と逢つた折から、帝は周圍の臣共を心から嫌つた、——つべこべとお上手のみをいふ、それは何といふ巧言だ。ほんとうに朕を至上と思つてゐるのか、馬鹿、——。

帝は周圍の人間を一人々々解職した。さうして半年も経ぬうちに百人からを免職した。さうして帝は犬を飼ひ始めた。一匹何百圓といふ外犬、人を食ふといふ蒙古犬、狎、狼犬、白駒、種のある丈けを集めて見た。

『犬の尾振るは、心から振つてるのだ。正味だ。犬は俺をあたりまへの人間として見て呉れる。』

帝室は今、犬の動物園になつてる。丸で徳川五代將軍綱吉犬公方の如うである。十一月には結婚するといふが、蒙古王の娘は輿入早々、犬趣味に當てられ給ふことであらうととり／＼の噂である。

四

その結婚も實は一もめであつた帝が一日西陵の墓守の娘の物語を聞いて、どうしてもそれを貰

らはねば置かぬといひ張つたのである。何でも西陵の墓守を爲せる一族人は、清の官を奉じてゐたものであるが、革命來娑婆を厭うて、民國の粟を喰はずとか何とか、言つて西陵に入籠り、清帝代々の靈を祀つて、墓守を爲してゐる。その娘に評判の別嬪があつて、頗るの親孝行者だといふのである。この話を冬の長夜の徒然に、女官から聞いたものであるから、帝はたまらなく、いとしくなり、その娘こそ朕が、ペターハルフなれと、のたまふこと切なるものがあつた。さはれ彼は墓守の娘、これはやんごとなき至上の御身、いかばかりお望ませ給ふとも、いかでそのやうなることの成り得べき、終には未だ見ぬ戀とやらに、日ねもす夜もすがら帝が口に上り、孝女の話さへすれば、いとゞ御機嫌うるはしく、打興じ給へども……といつたやうな有様であつた。

そのやうに望まれるならばお妃にといふ御母醇親王妃のお勧めにて、やつと御納得相成つて、蒙古王の王女と來る月の二十三日目出度御結婚遊ばさるゝことと相成つた。

『自分は一平民になり度いけれども、朕が一平民になることによつて、何百人かの人々が生活に困ると聞いて、實はまだ決心が着かぬのです』

と胡適に言ひ放つたさうである漸々年も取つて來る、そのうちに新人が平凡になるであらう、

一平民にはなれもすまいが、寄る年波で一平凡人位には爲れやうから、旗人達御安心遊ばせ。

黎元洪

黎元洪が再度大總統に据えられた譯を考察する丈で、彼の人物評は澤山である。つまり彼の人物特長が、總統に推載された理由と同一なのである。

彼は徐世昌が追はれたる結果、迎へられたのである。徐世昌は安福派に推された總統であつたにも拘らず、安福派を押へる爲に直隸派を利用し、直隸派の擡頭を恐れて、奉天勢力を誘き出し奉天派が一敗地に塗れた後は、もう直隸派が憎くつて／＼堪らなくなり、何とかして奉天派を踏止まらせて直隸派を牽制しようと思つてゐると、保定から電話がかかつて。遂々天津落を餘儀なくせられた。直隸派としては斯る權謀術數に長けた總統に操られてゐては堪らなかつたのである。黎元洪は殆ど無能だと稱せられる位に、徐世昌の策術を持つて居らぬ。確に彼は策略の人ではない。その策を弄せぬ處が吳佩孚其他を安心せしめるのである。

吳佩孚は董康を財政總長に推薦した董康は司法に明るい人であるかも知れぬが、財政にかけては全くの素人である。而も猶且つ吳佩孚が信頼した所以は、只彼が金錢に潔白であるが故である。

果してさうであるかは兎も角として、梁内閣の張孤をあつぱれ弾劾したのであるから、さう圖圖しくはやれぬ筈である。そこを吳佩孚が見込んだのである。さて沃丘の仲子が名人傳に『黎は公俸の外に盜まざる廉潔の士也』とある。世界中の官吏が公俸を盜んで平然たる如く、支那中の官吏が公俸の外に盜んで平然としてゐる。つまり支那の官吏は世界の官吏よりも盜むことに於て、筆頭一步を進めてゐる譯である然るところを黎元洪は『公俸の外に』慾張らない、支那流を發揮せぬ人物なのである。それは當前のことであるのだが、支那に在つては當り前のことをやる人物が有徳の士、稀れに見る政治家なのである、それが吳佩孚に氣に入つた譯である。

支那は之でなかなか民衆に力量のある國なのである。民衆の勢力などは、微塵もないやうであるが案外さうでない。支那が民衆の國であることは、史的支那が割合に豊富なる材料を以て、裏書する筈である、だが支那程の古い國は怎んなことでも裏書能きる丈けの史實がどつさり文献中に用意されてる譯であるから、今更らことごとしく例證して見たからつて、何程の手柄でもあるまいで、古い話は止すとして、極く新しい處で論證して見る、張作霖と吳佩孚が喧嘩する時に、双方が出帥の名目を戰鬪行爲以上に争うてゐる。張作霖は『一彊吏が中央に容喙する……』何

とか言つて、結局鎮威軍と稱して出動する吳佩孚の方では梁内閣の媚外的態度がどうしたとか言つて、救國軍を起す。鎮威軍と救國軍が戦ひ乍らも、お互に名目理否の争ひを忘れぬ、北京が張の勢力圏内に在る間は、辻々隅々に吳の罪狀が貼付けてあつた。吳が北京を勢力圏内に入るれば、叮嚀にそれ等の貼紙が剥ぎ取られて、こん度は張の罪狀が貼出される。勝敗の將に決する最も忙しき時にも拘らず、宣傳を怠らぬ。此の如き事實は、嘗に張吳の喧嘩の時のみに限らず、凡ての場合さうなのである。勝てば官軍負くれば賊なのであつて、力は正義なりといふ状況にあり乍ら、どうしてまたかう宣傳の必要があるのだらう。日本の軍閥ですら、無名の帥を西伯利亞に野晒したのであるから、もつと圖々しく黙つた儘で喧嘩してもよかりさうなものである。然るに斯くまで正直に出師起軍の名目を拵え上げようとする。之はまた怎ういふ心理なのであらふ。一言を以て之を解説すれば支那人は之程に名義を重んずるのである。支那人がノミナリストであることは世に定評のある所である。支那人は假令負けるとも名を得たいのである。現實よりも名目を重んずる。であるから支那位民望人心興望とかいふものが、氣にせられてる國はまたとあるまい。孫文が南下する、そこに名目がある。北伐する、それに理窟がある、張が出兵する、それにすら意義が

ある。こゝで見逃してならぬ事は、動機が別な理由にあるにもせよ、少くも其、さるゝ名目、理窟は必ず民衆の輿論に據られてゐる。民衆の聲を利用して、自らの行動に名目を着けるこれが支那英傑の殆ど定つた型なのである。一見民衆勢力てなものは微塵も無いやうである、が、何時の間にか民衆の聲が英傑の政見となり政策となつてゐる。であるから支那の民衆輿論は馬鹿に能きないのである。つまり支那民衆は自ら何等纏つた力量がなくつて、英傑の利用するのを待つて充分に實現し得る譯である。さうして民衆の聲がこの英傑に利用せられることは、民衆自らが實行するよりも遙に迅速に實行せられるのである。この意味に於て吳佩孚が『統一』の爲めに、黎元洪を迎へたことは、即ち民衆の力量が實現された譯である。吳佩孚を通じて、民衆の力量が動いた譯である。支那には可也前から南北統一、全國統一といふ標語が現れてゐた。換言すれば民衆は統一を願つてゐたのである。張作霖すらも統一の爲めに戦ふといふを忘れない。吳佩孚はまだ直隸派丈けをすらしつくりと纏め切れぬ。そこで全國の誰もが安心する様な人物を引張り出す必要が生じた、そつだ全國の誰もが恐れるやうな人物で、この大國を纏めることはなか／＼骨である。そこで誰もが安心する人物を拉し來つたのである。支那を統一する器としての型の裡には、

黎元洪の如き人物型もあることを忘れてはならぬ。自分の力量で、敵を倒して遮二無二天下を取る型もあるが、推戴され、安心されて据られる型もある。黎はその役者である。

支那では新らしく擡頭する時に、出慮する場合に、必らず新しき民衆の聲を提げて立つ癖がある。黎元洪は廢督裁兵の問題を振翳さして立つたのである。黎元洪は武昌起義の際には排滿興漢を提げて立つた。こん度はまた現支那の最大問題を提げて立つてゐる。奇妙にも十年前、十年後、何れも民衆を熱狂せしむる大題目である。

廢督裁兵は武昌起義にも増して、民衆の同情共鳴がある。何時かは誰かゞ解決すべき問題である。黎元洪は廉潔、無策の外に福々しく太つてること、眉間に黒子コクシがある丈けのとりえである。廢督裁兵等の大問題が彼の手腕に依つて解決されやうとは思はぬ。が、言つて見た丈けでも偉らい。曹錕が總統に成り度くなるまでは、地位も生命も安全であらうから、勝手な熱を吐いて民衆の輿論を堅めるがよい。

曹 錕

曹錕と張作霖は、半分だけは同じである。が、また半分だけは異つてゐるさうだ。といふ譯は、曹錕の出身が馬丁で、張作霖は馬賊であるから、馬丁の馬と馬賊の馬とが同じである。出身が馬丁であることが不名譽にあらざる如く、馬賊であつたことが名譽でもあるまい。また彼達に共通して居る馬の字が馬鹿の馬に通じて居る譯でもあるまい。

彼達二人が揃ひも揃つて、無學文盲であることが、馬鹿であるといふならば成吉思汗も、秦始皇帝も愛親覺羅も豊臣秀吉も、馬鹿であるべき筈である。成程、横文字は讀めまい、サイエンスの端片も知るまい、だけれど處世學と支那政治道は、下手な支那通よりは解つてゐるらしい。

論より證據、張勳の復辟の際、天津から攻め寄せた段琪瑞軍の鼻息を見て、西路攻撃軍を出動した所など、馬鹿の藝當ではない、又張作霖が天下の形勢に據つて、五色の旗と黃龍旗とを、擧げたり下げたりしてゐるところなどは、なかなか機宜を得てる。

孫文やら、徐世昌やら、吳佩孚、陳炯明達は、字が讀めたり理想があつたり兎や角やで、可成煩

悶だの、藻掻だの何だのかだのがある、が曹錕、張作霖は無學のお蔭で、随分呑氣に、ぼつ／＼地盤を固め行くことができる。わけて張作霖の如きは、時代に超越し、勝手氣儘に、無學振を發揮して居る。それがまた滿洲邊には、大層適當して此上もなく、甘く行つて居る。とは言ふものゝ惜しむらくは、時代が違ふ。無學にして秦天王、保定王たるを得んも、到底天下の總統たるを容易に許さぬ張作霖が、今一息と云ふときに、追ひ込められて一寸屁古垂れた。今度は曹錕が大總統に選ばれやうとして居る。北京前門外の或る照像館の前に曹錕の寫眞が懸つて居る。どうしたものでかネクタイ無しに、フロックコートを着てらあね、あれで大總統ぢやから面白い。『盧君平和』が支那向きといふから、曹錕あたりが大總統にふさはしい男かも知れぬ。

曹錕と張作霖の、相通する馬の字の方面は右の如しである。今度は相異なる丁と賊に關して、一言なきを得ない。馬丁は駿馬を御せばよいのである。賊は自ら盜らねばならぬ。曹錕は吳佩孚、王承斌達を、追ふことさへ出来れば出世も出来る。成功も出来よう。が張作霖は臣の誰よりも、自らが、一生懸命であらねばならぬ。

曹錕にはよい一軍の將が集まり易く張作霖にはそのことがない、張作霖を操る策士——譬へば

徐樹錚、梁士詒が現はれるけれども、曹錕を弄ぶ者は少い。曹錕は雄偉なる馬丁であるから、之を寵遇する主人、袁世凱があつた。馬賊は操られるかも知れぬ。が寵遇せられることが少いのである。

馬丁は時としては、駿馬の一に跟いて奔ればよい。それで事足るのである。曹錕は吳佩孚に跟いて疾驅すれば、それで吳佩孚の風上に据り乍ら吳佩孚の名聲の上ると共に自らも天下の第一者に推される、然るに馬丁は時としては、兩馬を馭せねばならぬ。その兩馬を二つ並べて、走らせる場合、一つの鞭で二つを同方向に同じ調子にかけらせる、必要がある兩馬がちよつとでも、相離れ相反して走るとせば、愈々疾驅せば益々亂調となり馬車は覆へり、一切は破滅を齎せる、曹錕には二つの氣のきいた馬が居る。一つは吳佩孚で他は王承斌である。曹錕たるもの、曾ては袁世凱の馬丁として令名を四海に馳せたるもの、何うすればこの兩馬を相争はせることが出来やう。まあ、しつかりやるがよい。

張作霖は、賊の出身丈けに、敵の隙が睨み所なのである。ちつと機會を待つて居る。曹錕は六十一張作霖は四十八。彼は直隸天津の人、これは奉天海城の産、共に馬丁振を發揮して、こゝ暫らく支那政界話の種である。

張作霖

一

作霖、雨亭と號す。奉天關外の人。幼にして剛毅、長じて綠林に出沒す、總督趙爾巽に歸順、匪賊を剿滅して巡防統領に任ぜられ、民國に到つて中將、師長に改職。五年四月盛武軍奉天軍務巡按使となり、七月督軍兼省長に改任、三次段内閣成立するや三省巡閱使となる。今年四月、吳佩孚の爲に敗れて位階剝奪。和成るや六月鎮威將軍の稱を賜つて、東三省保安總司令に任ぜらる。ありふれた傳記は、之位で勘辨してもらはう。

張作霖と聞けば、誰しも鬼面の偉丈夫を想像する。少くとも天鬼薄益三位の圖體なり、面相をしてる筈である、が實際は、案外きやしやな可愛い肉體の持主である。つまり物的張作霖は、平凡なる柔和なる穩健なる人間なのである。面相ばかりではない。からだ全體がそう頑丈に出来てゐない常住不斷餘程の朝鮮人參を仕込まねば、陽氣が第八夫人に迄、行渡り兼ねる代物であることから、判斷しても解るのである。兎に角、平凡なる體驅の所有者であることだけは確かだ。

張作霖の少年逸話がなか／＼振つてる。父を失つてから只さへ貧乏であるに、母が床に就いて藥を獲むも資なく食ふに物なしといふ破目に陥つた。その頃隣家にシハン坊が住んでゐた。「死なれた父つあんが、何ぼかの銀を貸して置いたに、こんなに貧乏して、困り切つてるのを見乍ら返さうかとも言はぬ」母親はぶろ／＼呟いてゐた。十歳になつたばかりの彼は、母の歎を聞いて、隣家の方へ出て行つた。すると黒いふくれた豚が母親と同じやうに、ぶろ／＼呟き乍ら遊んでゐた。彼は豚をちツと見詰め乍ら小首を傾げてゐた。

『そうだ』

思はず彼は叫ぶのであつた。ぐるりを見廻した所、誰もゐぬ、見てるのはお日様と自分丈けである。彼は棒を振上げて、豚を追ひまくし立てた。豚は東奔西走、ちたばたと逃げ廻つた。豚が河のへりに追込まれた時に、彼は平べつたい豚の腹を、ぐいと押した。すると豚はぢやぶんと音を立て、川にはまつた。くろ／＼言つて、蓮根の機断面見たいな鼻と口を、水の上に突出して、頻りと藻掻き騒いでゐる。

『豚が溺れるよ。早く來なさい。誰かあ——』

隣家のシハン坊のおぢさんは、一番に飛んで来た。向のおばさんもやつて来た。彼も負けずに裸になつて衆と一所に豚を救ひ上げたのである。向のおばさんがいふことには。「若しか、作さんが見つけなかつたら、この豚は死んだものを。死んだ豚は誰も買ひはせぬ。よし、買手があつても二束三文ぢやよつて。作さんの手柄はえらいものぢや」

隣家の澁いおぢさんも、この場合吝つく譯にも行かず、二百文のお禮やら、借りたお金の勘定やらを、綺麗薩張と濟ませたさうである。彼は家に歸つて雀躍し乍ら、

『お母ア、見たか喃。作坊の智慧を』

『末、恐ろしいことぢ、や。お前といふことが』

でも母と子は、相抱いて別々な思ひではあつたが、共に暫し泣いたさうである。

他家の息子は皆師匠に就いて、読み書きするに、貧しきが爲に彼丈けは手習ひ一つする機會も無かつた。それでゐて村中の子供は、彼によく服従したものである。木や竹の棒を擔いで、隊伍嚴めしく兵隊ごつこする時には、何時も彼が指揮者であつた。竹に跨つて、木片を刀となし、一二と言へば、子供達は步調高く踏むのであつた。この我鬼大將の下に、肯じて服従するを欲せぬ

一腕白があつた。

『何んだつて、手前、俺らの號令を聞かんのだい』

『わしか、わしは今日先生に宿題の、とてつもない六ヶ敷い奴を出されたんぢや、遂それを考へてるぢやが』

『嘘、吐くない。手前、俺らの部下になるのが、氣に喰はんのぢやろ』

『ちがふ。そんなこと思つてやせぬ』

『さうか。それぢや。俺らがよい智慧を貸してやる。俺ら、學校に行かんけれど、智慧にかけたら誰にだつて負けやせぬ。』

『明日、先生にかう言へ。そんな六ヶ敷い問題は出来んて。そんなのが解る位なら、月謝出して教はりに來やせんと言つてやれ。そうすると先生は怒るに決つてらあ。怒つたらもう皆で學校を罷めちまへ。』

『賛成』

『賛成やつたれ』

その翌日であつた、先生と生徒の間に衝突があつた。豫定の如くストライキが實現せられた。四日間ストライキが続いた後に先生の方が折れて出た。罷校の間我鬼統領作兵衛指導の下に愉快なる兵隊ごつこが舉行されたそうである。

梅檀は二葉より、こゝらからが曲に入る筈である。浪花節であれば。

一一

彼是する裡に、先生、十六歳になつた頃姓を余といふ人に身を寄せてゐた。つまり奉公をしてゐたのである。一日、余氏は獵から眞蒼な顔して歸つて來た。

『どうしたのですか。大層お顔が蒼い』

『いや、どうも。すつてのことで、命をとられる所。いやはや。道で。どえらい黒熊に出逢つてからに。まあよかつた』

てな話である。家族の誰も聞いた丈けで、よい加減に參つてゐるのである。

『熊がですか。もつと詳しい話を聞かせて頂きますせう。どこの山で。どの邊で』

作霖丈けは、びつくり所か甚だ以て興に乗つてゐる。その日はもう晩い。それで寝ました。翌

日は明けるのが遅い。馬鹿に遅い作霖の腕はむづ／＼と疼く。東の漸く白むを待つて飛び出した彼、手には草切庖刀只一つ。谷を涉り山に入つた。ガサツ／＼葉摺の音に氣を配り乍ら、身丈程延びた叢を、掻き分け／＼登つて行く、道の小一里も行つた頃、果して一匹の大熊がのそり／＼と下りて來た。

熊も身構へる。作霖もきつと睨む。まだ／＼ヨンヤ、ハツキヨと立上れば熊と作霖は、四つに組んだ。作霖が引裂かるゝか、熊が倒れるか際どい所である。天晴、熊の腹に突立てられたる草切庖丁、ぐいと捻れば兎も角も、血みどろの百尋、五臟六腑、とん／＼投出され、さしもに荒ぶる熊の奴、どつたりと地響き立て、打倒れ、續いて打込む作霖の一刀、所謂止を刺して勝負は嗚呼勇敢なる作霖に歸した。何あんだ、田舎廻の講談武勇傳をつくりである。

少年作霖の膽力は、愈々界限に認められた。が、奉公勤めの方は薩張評判が悪い。その方の評判の悪いことが、膽力の勝れてる證據になるかのやうに、喋ることは講談師に與へられた特權である。余姓の家を斷られたる彼は、馮の家に食客した、食客とは居候の義である。

『何んか、面白いことが起らんかなあ』

思つてるとその夜、丑三つの頃裏の土塀に物音がする。ふいと目醒めたる彼、傍の馮を揺り起し、囁く如く、

『あの音、あれは何んぢや』

『泥棒ぢやぞ。どうやらさうらしい。ちつとしとれ』

二人は鎌首立て、耳聳てる。それでも多少、胸がどきつく。

『てつきり、泥棒ぢや。兎も角、ちつとしとれ』片唾を飲んでゐる。泥棒は五人連れである。馮は抵抗すまいといふ。張は腕が鳴つて溜らぬ。それでも馮のいふが如くに両手を挙げ、ハンドアツプをやつて見せたり、合掌して哀れを乞ふて見たりした。

五人の賊共は取るだけのものは皆盗んで、大きな風呂敷に詰め込んで、さあ逃げやうとした。その折、張作霖は逃げむとして背後を向けたる泥棒を、一喝

『待て』

と嗷鳴つて、空砲のピストルをドント一發。放つたからたまらぬ、空砲は音ばかりではあつたが逃げ仕度となると追の泥的もビク／＼であると見え、忽に腰を抜かすもの、鴨居に頭をぶつ

けるもの、折角持逃げむと持出したる臍物も、謂ゆる取るものも取りあえず逃げ出した。

『どうだ馮君』

馮君といふのが、後の馮麟閣である。そのことあつて後半月ばかりして、馮の家は焼かれて仕舞つた。つけ火だといふから、多分その泥棒達の所作だらうとの噂であつた。

三

焼出されたる彼は没法子、前の余姓の家に歸つて行つた。これは又何うしたものか余姓澁面顔に迎へると思へば、思ひきや、一見又驚又喜なのである。

『よく歸つて呉れた。實はこの頃匪賊に襲はれどほしで、こんな時にお前さんが居て呉れたらと噂してたところなのだ』

『匪賊がですつて。こりや面白い』

『何が面白いもんか。びく／＼じやが』

彼是してゐると、余姓の兄息子が馬を盗られて歸つて來た。余家に取つて何よりも大切な馬を盗られてぼかんとして歸つて來た。

『無茶や。薩張なツとらん。わしが馬に乗つてゐるのを叩き落して、さつと騎り逃げちやつた。馬奪られた上に、どやされて、ほんとにつまらん』

こんなことである。張作霖このあつけない話を聞くが速いか、兄息子の言ふまゝに、駆け出したから溜らぬ。韋駄天走である。高粱畑を驀進である。間もなく馬に跨る大入道が、蹄聲荒々しうやつて来た。

『待て、盗人、止め、泥助』

賊は紅髯のオロスである。早速ピストルをぐつと突きつけて、馬を止めた。作霖如何で溜るべき、早速馬の腹下に隠れたものだ。賊は馬上から長い手を延はして、ピストルを猶も突きつけやうとする。こゝとばかりに作霖ピストル握る手首を、いやと言ふ程ぐいと引張ばる。なか得堪へ得べき。賊は、馬上から引摺おろされた。序にピストルをもぎ取つて、馬に飛び乗り、

『よま見やがれ』

一言を後に残して駆け出した。

曾て自ら飼餌やつた馬である。馬はくん／＼鼻を鳴らせて喜び駆ける。家に着けば兄息子喜んだ

の喜ばぬつて、そら無茶苦茶の表情をやつたものである。余家に寄居数年或日、偶々馮麟閣に邂逅、馮の誘ふまゝに、余家に名残を惜しまれつゝ、吉林に向つて旅立ち、彼の地にて馮等と共に馬賊となつた。間もなく張作霖は一方の首領と仰がるゝに至つた。

馬賊と謂ふも、日本人達には易くは解るまい。只の泥棒ぢやないのである。富めるものを襲ふて貧しきに與へ、益々人心を收攬して、酋長見たいな王さまの様な者に成るのである。馬賊が極樂に行き、良民が地獄に行くとは、無論決まつては居らぬ。けれども馬賊々々つてさう輕蔑して貰はんでもいゝさうである。

麟閣、雨亭といへば、吉林界隈誰知らぬ者もない。偉い勢である。二人の勢力範囲は日々に廣がり行く、折柄義和團の運動があつた。馮、張は忽ちにして二俠士となり、滿洲吉林一帯に出娑婆るオロスを滅多無性にぶち殺した。紅髯と云ふ紅髯は手當り次第である。遂に張と聞けば、馮と知れば、流石のオロスもぞつとしたさうである。

團匪の崇りでおつびらに露西亞の侵入となり、南滿鐵道の布設馮、張は齒切して、悔しがつたが大露の勢如何とも出来なかつた。さう恚うする裡に、日露戦争が起つて、小倭と大鼻が戦つた。ど

つちかを助けて一儲けすることに決心した二人は、弱きを援け、強きを挫くは、男子の本分とある。かてゝ加へて、オロスの跋扈は豫ねてからの癩の種、同じ助けるなら日本軍をと云ふことに一決。或時は露軍の後方部隊を襲ふて黒麵麩、彈藥、何やらかやらを捲き上げて、日本軍からも少からぬ褒美をせしめることにした。一舉兩得とはこの事である。後路を断たれた露軍は怎うにも慙うにもならぬ。また之からも、若干を頂戴に及んで、退却を許す。合せて一舉三得である。謂へば之も戦時成金であつたのである。

四

趙爾巽の三省總督の任に就くや馮、張の歸順を促し、遇するに巡防隊統領の位置を以てした。辛亥革命には東三省の保安秩序を双肩に負ひ、民國成立後陸軍中將、第二十七師長に任ぜられ頓々拍子の出世である。續いて段芝貴督軍の下に、師長を勤めてゐたのであるが、もうそこ／＼師長ぢや、餘り芳しくないといふので、或日使を断芝貴の督軍衙門に遣はして、

「今、もう、直ぐ、張作霖將軍が、閣下を殺しに参ります。彼是、手兵を動員する筈です。」
あわただしく注進に及ばせた。

「うん。そら本當か。俺は悪夢に襲はれてるのでは無いか知らあ。夢であるにもせよ、たとへ夢裡にだつて殺されたくはない。おいそれぞれの衙門中にあるお金をすつくり、取纏めて呉れ。銀行の通帳も。」

眞蒼になつて漸くのことに、便服穿つて逃げ出し、北京に着くまでは、唇の色が土色であつた。まさかそれ程でもあるまいが、まあそうとでも言はねば面白くならう。兎に角張作霖逸話はそれう物語つてゐる。

お手際は至つて穢なかつたが、小段は驅逐された。北京の方ではどういふ手違ひであつたか、老段は彼をして督軍たらしめた、小段を追拂つたはまあ、暫且それはそれでいゝとする。が綠林來の兄弟分たる馮麟閣を陥れたは、夫はまた怎ういふ譯であるか。張の陞官に嫉妬する馮は、彼の險陰なる遣口を非難して、とかく面白く言はぬ、それがちよい／＼顔に讀める。折柄、張勳の復辟の擧があつた。張は三日二晩黄龍旗を掲げたきりで、後は五色旗を翻へらせた。馮はちよつと許り長く黄龍旗を掲げ過ぎた爲に、張と段の計略にまんまと引懸つた、湯玉麟は豫て張に含む所ある者、馮と謀つて復辟に加擔した。間も無く討伐されて湯は蒙古に奔り、馮は天津に幽閉され、

漸く罪を免れたれども、全然不如意の位置に蹴落されたのである。一人を出世せしむる爲には、何人も的人身御供が要るものであるらしい。

或る頃或る國の陸軍は張作霖をやつつける對支政策を採つた、蒙古から紅い幟、紫の旗を立て、攻め寄する。張の肉體は爆裂彈で始末つける。段取が甘く進んだ。福島といふ將軍を見送る爲め張は奉天新市街の停車場に出張する。新市街から城内衙門までは、一里何町、その間が張の爲には冥途の旅道。こう話が定つた。

『ちりん／＼若し／＼。奴、今、歸途に就いた。前から二つ目の馬車が奴のですからね、まあちや、首尾よく、さやうなら』

新市街の張番から電話が懸つたさあ来い二つ目の馬車。待つてゐると城内の入口、奉天小邊門を入つたところで、二つ目の馬車の上に、ダイナマイトがパーンと響いた、馬の首は屋根の上に宙返りする。轍は血の海と化し。幌は微塵に壊れる、キャーもクーもない。やられて仕舞うた。

流石張作霖である。虫が知らしたのである。虫の知らせを聞き得る程に、緑林に修養が積んである。彼は新市街と城内の中間十間房で馬車を後先に取替へて、三番目の馬車に乗り、馬車の二

番目と三番目を、一町離らせたのである。そのこと知らずに電話通りに、バクンとやつつたか
らたまらぬ。張はニツと莞爾んで、三番目の馬車から爆音を聞き、飛降りるが、早いか馬車から馬
を引離し、直に跨つて、鞭打ち、途を小路に採つて衙門に向つて逃げ込んだ、馬上軍服の肩章を
引拂り單騎疾驅する様、彼でなくつては出来ぬ藝當である。又電話である。

『奴馬に乗つて逃げた今直ぐ衙門に達する筈ぢや、こん度は鎗滑り逃がすな』

督軍衙門附近にあつた圖書館の三階に張つてゐた男は、此電話を聞くが速いか、窓際に出て、固
唾を飲んでちつと待つて居た。案の如く、單騎馬を驅るそれらしい男がやつて來た。何喰はぬ顔
して、ハンカチに包んで携へたる爆裂彈を、眞上から落した。ちようど張の頭上に當るらしく、
すうと落下したる爆裂彈は、今といふところで、電信の針金に引懸つて、ぶらぶらしてゐる。子
供の凧と同一運命に、首吊れる爆裂彈に向つて『糞と叫び』、べつと唾吐いて、件の男は人群中
に消えて仕舞うた。

運の強い男は大したものである邊門でやられた馬と馭者とはよい馬鹿を見た譯である。横に見
物してゐた日本少年の一人が、股に負傷して、六百圓か八百圓かを貰つた外に、日本とは無關係

であつたそうである。六百や八百の金で一命拾つたと思へば、張たるものよい拾ひ物である。

五

張作霖のお通りとあると、二時間前から通行止である。一間置に兵隊が立つてゐる。人垣はこの義である。かくまで鹵簿厳めしく通行するかと思ふとこつそり、巡査一人配列せぬ街道を採つて、馬車を走らせることもあるさうである。

彼には何人かの妾がある。それは朝鮮人參の作用であるさうだが、また一説に各家に置いとく必要があるからだとも噂する。其譯はかうである。三百六十五日、彼はどの家に寝てゐるか解らぬやうにする仕組であるさうだ。

今宵はこの屋根の下に、明夜はあの廂房の中といふ具合に、所在地を暗くすると同時に、そのどれもに侍者が用意されてあるべき筈である。何とでも謂へ、噂は巷間に口さがないものと決まつてゐるから。

××の對支政策は一變して張作霖をして滿洲を統べさせて置くことに決定された。之で彼たるものもやれ／＼である。秦皇島では澤山の鐵砲費へるし其代金は北京本店拂であるから猶都合が

よい。然し徐樹錚を段祺瑞の周圍から追拂うて愈々中央に權力を發揮し始めたのもほんの束の間であつた。策士梁業に操られたり、操つたり、してゐる裡に吳佩孚と衝突しあへこべに關外に驅逐されちやつた。

でも一時は、飛ぶ鳥をも落とす勢ちやつた。今でも滿洲では、びりつともせぬ權勢であらう。しかし去年から今年の春にかけて北京でも、偉いものであつた。何しろ英國公使の前に於てすら嚇つと怒つて、席を蹴つて立ち上り所謂、傳統的怒り方をやつたものである。

思はず長談に失した。では、張の今後はどうであるか。それは何とも言へぬ。けれども彼が支那民衆に、思慕せられるやうな人物に成りえぬことだけは確かである。彼が支那に在ることが、支那のインスピレーションであるといつた風の所は、幾ら修養してもそれは出来そうもない、只、少し面白い所は、彼に張學良といふ息子のある所である、之はまた恐ろしい未成品で、悪くいへば馬鹿である。よく言へばどえらい器であるかも知らぬと評し得る、張作霖としては、寧ろ閩錫山に範を求めてせつせと東三省の内治に勉め、倅學良の指導を謬たすば、再び前轍を踏まざる可しと言ひ得る。然らばまた時も機も、到來するであらう。

緑林氣質と謂へば、それまで、ある。が、凡そ中央の檜舞臺に乗込まむと欲する程の者、今少しゼントルマンに成つて来る必要がある。支那は大きいのであるから、之でなか／＼面倒である。總統だの副總統だのといふからには相等の君子でなければ、どうも行かぬ。ものらしい力だけでは行かぬ督軍どころは力丈けでも取れるかも知れぬ。けれども全國に輿望を持つ丈けの力は、希世の雄に非ざる限り、容易に得られぬ。矢張、曹錕にもせよ張作霖にもせよ、力の上に徳を養ふを要するそれが面倒なれば、うんともつと大きい、成吉思汗のそのやうな力量を持つて来い。

吳佩孚

貧しい八卦見が山東は鄒州、蓬萊の町に住んでゐました。毎朝早くから廟の門前に、ボロ机を据ゑて破れた車布の上に筆立を置いて、筮竹の幾つかを挿して、ぼつねんと坐つてゐます。二人の男の子が机の周りで遊んでゐます。兄は子瞻、弟は子玉と號せしめて、お父ちんの易者大層彼等を可愛がりました。

『とつちやん、あんちやと、わいとどつちが、えらいもんになるか見ておくれ、』
弟の子玉がいひました。

『そらわいの方が、えらいもんになる。わいが兄やもの、』兄の子瞻も負けては居らぬ。

八卦見のをちさんは筮竹をがちやく／＼言はせて、二人の子供の行手を眺めました。何度か首を振つた後、ボンと机を打ちました、すると「周易」とへばりつけた卓布の文字が、小さい波を打たせ震ふのでした。

『子玉、われ頓でもない偉いものになるよ、出世する。劉邦と同じ卦ちやが』

『わいは何になる、とつちやん』

『貴様は一生貧乏で暮らす。どうも仕様がな。弟をよく助けてせつせと勉強させるのが何よりだ天命なれば』

『嘘だ。出鱈目ばかり言つてからに、この間も劉家の旦那が死ぬつて言つたのに、快つたもの、ちやんの八卦は當にならないらしい』

こんなことを言つて、親子は嗤つたり喜んだりしてゐました。間もなく八卦見は死んで二人の子供は遺されました。弟思ひの兄は父の八卦を遺言であるかの如くに思つて、八卦通りにせつせと働いて弟を勉強させました。兄嫁がまた大層心掛のよい方でしたから、貧しい中から小姑を勉強させました。兄と嫂の力で子玉は私塾に學んで遂々『秀才』の試験にも通つて、後の吳佩孚になつたのであります。今も將軍吳佩孚は馬賊すら恐れない癖に、兄さんと嫂を思出すと、眼に涙を一ぱい溜めるそうです。坊ちゃん嬢ちゃん、支那の豪傑吳佩孚を思出すときに、親切な兄さんと嫂の話を出して下さい。幸か不幸か吳佩孚に子供がひとりも有りません。今日將軍の息子として皆

にちやほや謂はれる青年(中學生)は、兄子瞻が遺したる忘形見なそうな。將軍が寵愛するのも由縁があります。

二

吳佩孚にも所謂、先輩がある。彼は保定武備學堂に學んだのである。その頃靳雲鵬は教官の職に在つた。雙方が山東の出身である所から、教官と學生は特別に相近づいた。靳から言へば認めたのであるが、吳から言ふと甘く取入つたのである。靳は衆の裡によく韓信を抜いた譯であるが、吳は群を抜いて諸葛を以て遇せられた。何アに七面倒臭い手早く謂ふならば、教官靳にもてる學生吳生があつたことなのである。靳にもてたことは彼の運命をどんなにか、切り拓いたか知れない卒業の日靳は吳の脊を叩いて

『前途茫々だ、無有限量ぢや、大にやつて呉れろ。俺あ貴様に嚮望するところ大んだからなあ』

吳生は感激に涙をすゝつて、努力を契つたそうである。實際また吳生の成績もよかつた、本文の記者は當時靳雲鵬と同僚の教官たりし李成霖將軍に、吳生の成績表を見せて貰つた。九十何點の平均點をとりて屢々第一名に在つた。

後年王士珍が靳雲鵬を伴ふて江北提督に赴任せんと欲するや、靳は自ら固辭して吳佩孚を推薦した。吳佩孚は更に再び元老王士珍に接近するの機會を得た。其後吳佩孚は張敬堯の部下として、石家莊に營長を勤めたのであるが、敬堯とどうしても合はず辭職するに到つた。敬堯の方が一枚役者が下なれば、佩孚の従ひ得さりしは全く無理ないことであつた。

この情を見て靳は更に吳佩孚を曹錕に旅長の位置を得せしめた、世に持つべきものは先輩である哉である。間もなく師長に進み所謂成功の緒に就いたのである。若しか吳が靳に廻り合はなかつたら、王士珍に引合して貰へなかつたら曹錕に紹介して貰はなかつたら、假令吳に手腕があつても、彼の今日は無かつたかも知れぬ。よしんば識り知らるゝ機會があつたとしても、彼の成功なくんば吳の今日は十年、十五年遅れたるやも、保し難い、兎に角も吳佩孚の成功はよい先輩を、選り擲へたところに起因してゐる。

日露の役に陸軍少將守田利遠は、——今も猶生きて居らるるやうであるが——支那人有志を募つて、露軍の後方に向つて間諜斥候行動をやらせたものであるやうな。當時守田將軍の採用した幾多の支那青年の裡に、姓を吳と呼び、名を佩孚と稱し、子玉と號する一青年があつて、最もよく働

き最も多く功を立て最も勇敢に活動したやうである。假りにこの青年が、今日の吳佩孚であるとするならば、彼は外人將軍にすら、群を抜いて認められる程の男であつたことが解る。若き青年達よ記者は第一項に於て少年少女の爲めに、吳佩孚が兄、嫂の親切を物語つた。今また青年諸君の爲めに告ぐるであらう、吳佩孚が先輩の引きに依つて出世したことは事實である。けれども引かれれば、やれる丈けの手腕を有せしことを、見落してはならぬ。人生は他力五分、自力五分ぢやけん喃。

斷つて置くが、吳佩孚が日露戦役に働いて呉れたからつて、彼を親日だと早合點して呉れては困る。當時に於てこれそ國を愛する程の支那青年は、露西亞の侵略的行動を憎むの餘、奮つて日本軍援助を志願したものである。さればそれ等の青年達は今日では日本の滿洲占領に憤つて、露西亞に好意を有するかも知れぬ。現に吳佩孚は顧維鈞を叱咤して、露支交渉を成功せしめたではないか、日露已に地を代えて居る。只、今も昔も變らぬのは、吳佩孚の愛國的態度であるやうな。その愛國的態度が氣に喰はぬと謂ふのが、日本の愛國者達であるのだから滑稽である。支那の親日家と日本の愛國家とが、大層氣が合つて、支那の愛國家と日本の愛國家とが提携能きぬ様な東

聖の形勢では、まだ〳〵吳佩孚は日本の苦手であるかも知れん。

三

吳佩孚は戦に依つて進み行く。恰も日本が十年の役で日本全國を一纏めにし、日清の役で東洋に覇となり、日露の役で世に認められた如く、吳佩孚もまた戦ふ毎に認められ行く。黎總統が辭職し、段祺瑞が征南軍を派遣した時に、彼は師長として前線を承らされた。思ふに安福派は彼を前線に戦死せしめむ計略であつたらう。彼は直隸派の面子を双肩に脊負つて湖北に殺到した。さうして悪戦苦闘遂に長沙を陥れ岳州を手に入れた。人は往々にして難關に登龍の門を見出す。この一戦に依つて、彼は直隸派に認められたのである。

吳佩孚を見殺さうとせる安福派は、彼の勝利を聞いて反つて驚き且つ喜ばなかつた。而して張敬堯を湖北に督軍ならしめた。彼はこの安福派の人を無視せる處置に憤慨して、南方と和を講じ、矛を倒にして北上したのである。その頃段琪瑞四天王の間に歪合ひが始つて、靳雲鵬、張志潭、等は徐樹錚を甚だ面白く思はぬ。段琪瑞には阿片の中毒と徐樹錚病とがあつて、何かと言ふと、徐樹錚を用ゐて他を願みぬ。そこで靳張から吳佩孚に手紙が行き、吳佩孚が戦備成るまでには、靳

張甘く張奉天を誘き出して挾撃の仕組に膳立する。斯くて老段小徐の没落の戦が演ぜられ、この戦に依つて吳佩孚は北方支那に認められたのである。

張作霖を關外に驅逐し、梁士詒葉恭綽の策士達を追ふを得たる所謂安直戦争に依つて、彼が南支に認められたることを忘れてはならぬ。四川を得蒙古を略し、今日は先づ吳佩孚の天下である。

四

何といつても彼は排日者である。排日者であるといふことに誤弊あらば、彼は愛國者である。張敬堯が長沙の學生排日運動を拒止禁阻した時に、吳佩孚は學生の味方になつて敬堯に食つてかゝつた。五四運動を遙か北京に聲援して陸、曹、章、の親日派を弾劾した。彼は對日借款を以て段琪瑞を攻撃するの面目となした。梁内閣に容喙したことが、張作霖と戦ふ原因となつたのであるが、それも山東問題直接交渉いふ問題を捕へて干渉したに過ぎない。

兎も角も過去の彼は排日者である。少くも排日問題を巧に利用して、敵を撃つことの好きな男である。近來穴勝彼が排日者に非ざることを吹聴する者が多い。併し私がかく健忘症に罹るべく餘りに彼の過去が手近い。さうだ彼は確に排日者である。けれども排日者でいゝぢやないか、

彼が愛國者である限り、排日もせねばならぬだらうではないか、彼が愛國者であることに何の怨があらう。地を替へて考へて見よ。日本人にして非愛國者にして親米者であつたら、他が何と言は、

日本等は最近世界主義、プロジヤバンてなことをだいで分解るやうになつて來た。それだけ日本人の頭に餘裕が能きて來たのである。だが支那人は今の處もつとナシヨナリズムで堅まらねばならぬ境遇に居る。少々偏狹であらうとも、愛國的精神に燃えて居らぬと、この國何時になつたら纏まるんだらう等と嗤笑さるる。で、彼の排日的精神を理解してやつてもよからうではないか。而して如何ばかり排日者であつてもイエストいはねばならぬ事柄をのみ支那に仕向けたらよいではないか。怨むべくは吳佩孚の如き眞面目の人を排日者とせねばならぬ自國の政策であつて、決して排日支那人の行動ではないされば彼が愛支那者排日者であればこそ、話相手になり手答へある人物である。

五

彼は朝早く起きて練兵場に出で、軍人らしい仕事を忠實にやつてるそうである。このことを只

彼が手兵を練る野心の發露とのみ見るは謬つてゐる。兵力統一の國家急務を思へばこそである。兵力統一の善惡に拘らず着々やる所に彼の偉大がある。彼は自らの俸給だけは懐に入れるけれども斷じて軍費を私することはない。之を自ら遇するに薄くし麾下に分つを吝まず、兵卒を賑すを樂しむ等と解すれば、ありふれた形容であるが、どうせ倒れたら凡てを捲上げられるものと覺悟せねばならぬ。彼は賢いのである。解つてゐるのであると解した方が面白い。

彼は董康を財政總長に推舉したことがある。董康は財政部の冗員と冗費を根こそぎに廢して仕舞ふた。支那では官吏の半數は役所に出頭せず事務を採らずして、俸給だけを取るのであるが、董康はそれ等を残らず首切つたのである。毎朝八時に登廳して、それ迄に出廳執務せざる官吏を、片端から免職する。とても叶はぬ荒料理である。董康はぶん殴られても斷行したから偉らい。

吳佩孚はまた高恩洪を交通總長に推舉した。高恩洪は數月前に免職された硬骨の交通部役人である。人もあらうに其人を引張出したから堪らぬ。之また大斧である。局長どころでも容赦なく首切る。月給日文け出頭するやうな手合は、何時の間にか自分の職名が剝れてるのに驚くといふ具合である。之を都下の新聞といふ新聞は悉く攻撃する。蓋し新聞社の補助費を冗費として全廢

したからである。

この状況を遙に洛陽から見そなはせ給ふ吳將軍閣下、莞爾として御座る、董康の頭に瘡が張り上がらうがそれには何等痛痒を感ずることなく

「やれ／＼構ふものか、中國は荒料理を要する」

頻にけしを掛けて居る。あれで吳佩孚の用ふる人が中々變つて居る。吳佩孚はもう一度張作霖に一雨降らせる氣でゐた。が前線を頼んだ王承斌が薩張りてきばきと動かぬ。王承斌は吳佩孚に我は直隸派の長子也てな口吻であるので、兎角心持よく思へぬ。頻りに平和風を吹かせて一戦交へやうとはせぬ。止むなく吳佩孚は張作霖を怒らせた丈けで生殺の儘突放した形である。これが吳佩孚の今猶氣を緩め得ぬ因を爲してゐる。

南京の齊燮元は吳佩孚の偉らくなるのを怎う思つて居るか。曹錕は糞食へと思つて居りはせぬか。王承斌は時の來るを待つてゐるやうである。只彼の曹錕があれで中々吳佩孚を重んじて居る。吳佩孚のあればこそ直隸派の天下となつた過去を忘れない。屢々曹吳の反目等いふ噂が持上る。けれどもおやぢあれで中々吳佩孚を知つて居るから、そう輕卒に尻を上げない。

六

一體、今迄の直隸派の吳佩孚は日本の同情等怎うでもよかつたのである。だが之からは支那の吳佩孚として、押も押されもせぬ立場にある。さうあると少し位はインターナショナルな襟度も要る。さうでない支那を反つて危くさせる。東洋の平和の爲めによくはない。世界文化の爲めに面白くない。

彼とても無論馬鹿でないから、近來少し感ぜられる様である。舊知岡野少將を顧問に聘して見たり、末次政太郎氏を諮議に遇したり色々やつてる。ちよつとでも恚ういふ心持の芽生が彼にある限り、日本は之を踏躐ないで、期待して眺めねばならぬ、何も別に日本人は段琪瑞一人を基の相手にせねばならぬ義務も約束もないんだから。

吳佩孚を洛陽に訪ふ

一、奉直再戦の噂

北京天安門外に合歡の咲き匂ふ頃は、屹度戦争が起る、それはもう迷信といふには餘りに何遍

も繰返へされたことなのである。噫！もう間もなく今年も、合歡の花咲く頃になつた。井戸の邊、茶館の隅寄ると觸ると戦争の話で持切つて居る。

それは五月七日國耻日の朝、北京の南方程遠からぬところに、ドーン、ドドーンと巨砲の響が聞えた。何んだらう、小首を傾けてゐる裡に、またしてもドーンと響く。てつきり戦争が始まつたものらしい、九つばかり音してそれ切り響かぬ。雷だらうか、雷公にしては音が重い。彼は噂してゐると何のことはない、それはクリスチャン、ゼネラル馮玉祥先生の放つたる國耻紀念祝砲だつたのである。祝砲といふのが差支へるならば弔砲とでも申すか。兎も角國耻紀念の爲めに地雷火を九發ばかり爆發させたのであるさうな。

國耻弔砲を聞いてすらも、人心はびくつとする。合歡の花が咲いた限り何時戦争が起らぬとも限らぬ。今年起ればやつぱり奉直戦争である。奉天の張作霖に取つては將に雪辱戦である。あの負けぬ氣の張雨亭、臥薪嘗膽の三年は、外目も涙含ましまでに、切齒扼腕の日月だつた。兵器を手に入るだけ買込んだ。頭のありさうな軍人士官を狩集め、飛行機までも購ふた。倅張學良は若干見所のある人物だけに、遮二無二兵を練り自らも鍛えた。聞けば奉天には夙に戦雲が黓いて

居るさうである。

『新華門裡に、諸君と共に大盃を上げる日も遠くはないであらう』

雨亭三年の心事は正にこの一句に盡きて居る。新華門とは北京大總統府の赤いさうして大きな表門である。

『再び戦つて一敗血にまみれむか雨亭は再び綠林に入つて、昔日の馬賊となるのみ』

涙自ら兩眼に溢れ、侍る者をして共に袂をしぼらせた、とも傳へて居る。

犇々と戦氣迫るてふ奉天の情報に、北京の人心は甚だ落着かない。馮玉祥の西北邊防督軍任命を見る。ははあ、直軍は銳鋒を蒙古に向けて、奉天を北より突かうとするんだな。直軍は攻勢に轉じた。うんさうだらうと思つてゐた。といつた様な具合に知つた者顔になかなか噂する。わけが天津方面に於ける謠言は最も激しい。

奉天の兵工廠がこの秋にならぬと、彈藥が出来ぬ。或る國の商人から紡績機械と稱して、製彈機を輸入してゐる。その或國の商人では賣れ損なつたランプの口金だのそれからセミヨノフに賣る爲めに拵へた兵器製造機械を、丁度持て餘してゐた所を張作霖に押着けたのである。雙方が喜ん

なのであるから世話はないが、馬鹿を見るのは中國々民である。兵器は賣らぬと協定したら最後、是が非でも賣らぬがよい。今更興奮して見た所で後の祭であるが、其兵工廠が秋にならぬと弾丸が出来ぬとある。

戦雲が奉天の太空にたなびいてから、已に數旬を経て、今に直きパリ／＼やり出さぬ所以は、つまり兵工廠の都合にあるといふのである。

それはどんより曇つた五月十三日の朝だつた。兎に角洛陽の吳佩孚を訪ふ前に天安門外に遊んで合歡の葉蔭に已に花の咲けるか、見てから後にしよう。

——おゝもう咲き初めた！。張勳の復辟戦も、安直戦も、それから直奉戦もみんなこの花の咲く頃だつた。わしはもうぢつとして居れぬ。行かう……

その日の夜十一時の汽車でわたしは洛陽に向つた。

ゆかしき挿話

北京を去れば汽車は、間も無く長辛店に着く。車窓に凭れば、白つぼい月が雲間に懸つて居る。薄暗い中に低いしかし長い丘が起伏して居る。

「こゝが、先年の戰場でしたね」

傍らなる支那紳士に話かけた。

「えい、さうです」

ふと口利いたこの言葉が皮切になつて、その支那人紳士と四方山の話に興じて、思はず夜を更かせた。

「どちらへ、入らしゃいます……………」

「洛陽まで……………」

「あなたは」

「保定まで……………」

山東の人らしい。喋る支那語がとげ／＼しく響く。去年のことをきゆいねんと發言する。多分山東の人だらうと思つてゐたら。果して山東の德州だと云つてゐた。いろ／＼話してゐる裡にその紳士が、吳佩孚と大層な知合であることが解つた。切りに吳佩孚のことを讚めよる。この人が天下を背負つて立たずんば、中國廣しと雖、他の人物あらずといつたやうな口吻である。恰も汽

車が賓店に着いた。

『ごらんなさい。日本の先生。こゝは奉直戦争の折、主力のあつたところでしたよ』

『あゝさうですか……………』

『こゝで、吳將軍に關する面白い話をせねばならぬ……………』

支那人紳士は、私といふ相手の興味を置き去りにして自分ひとり先へ／＼話を進めて行く。白っぽい唾液の泡を、ぶつ／＼厚ぼい唇に湧かせ乍ら、引き切りなしに話續けて行く。

それは明日長辛店襲撃といふ戦ひの前夜でした。何でも二人の間諜がとツつかまつたのです。鐵鎖につながれた二人は、愈々奉天軍のスパイであることを白状しました。

『殺氣立つた直隸の陣營ですもの、一も二もなく虐殺することに決まりました、刀で殺さうか彈で打たうか、若い參謀連はとり／＼に評定してゐました。それを聞いた吳佩孚はちよつと考へた揚句——自分のところへ連れて來い——と命じました、怒れる將軍自らの手打だ！と合點したる若い參謀連は互に見合つて、につと冷たい笑ひを取りかはした』

支那人紳士は身振り手振りして物語つてゐる。最初はわたしひとりが聽手であつたにも拘らず

今は隣左右、向ひ後ろ車中の視線が彼に集つてゐる。こくり／＼眠つてゐた連中も、何時の間にか起き上つてふんあいよてな調子で以て支那人一流の返答をなして居る。

『追がは孚威將軍である。間諜を足の先から頭のでつぺんまで、じろりと眺めてから、徐に口を開きました。』

二人の間諜の奴、もう覺悟はしてゐますが、わな／＼震へてならぬ。將軍を前後に取り圍む將校士官各々固唾を飲んで將軍の言葉を待つてゐる。

『——間諜、お前は果して奉天軍の廻し者に相違ない喃、何時來て何をした、凡て語れ、隠し立することは身の爲にならぬぞ——』

今が今までわな／＼震へてゐた奉天の間諜、度胸を決めたといふか、平然として口を緘して喋らぬ。曰く、殺我就得了——殺して呉れたらもうそれでいゝ。將軍が何を語つても殺我就得了を繰返すのみである。

『——行く俺は。お前達を許してやる。奉天に歸れ、お前達にも親も子もあらうから——』

將軍は銀貨二塊づゝを呉れて放つてやつたさうです。間諜は鞠躬として去つた。どうですゆか、

しいエピソードでは御座いませんか。

此話は日本人のある方からも、何時だつたか聞いた挿話であるから、さまで私に耳新しいことではなかつたでも何度聞かされてもゆかしいと思ふ。

二、大總統袁世凱の墓

吳佩孚最良の支那人紳士は、未明保定に下車した。寢臺車を儉約したものであるから無暗に疲勞を感じる疲勞してるとちよつとしたことで馬鹿に癢に觸る。直隸軍の師長胡某が乗つてゐるといふので、汽車は停車場毎に十分から二十分間位停車する。多分師長が驛毎に下車して部下の軍隊を閲兵するのであらう。驛毎に大きい圖體の立派な男が、何十名かの護衛兵に取巻れ乍ら下車する喇叭が響く馬が嘶く十數分すると下車した立派な男が乗る。さうすると汽車が動くのである驛夫に詰ると

『何あに機關車の水の補充する爲めにでも、十分や五分は待つのですもの、師長の用務があると聞けば當然待つべきですよ……………』

斯ういふ手合に懸ると到底も叶はぬ。まあさう腹立てないで、吞氣に考へるとせう。支那の

ことは何んでもこの調子で行かねばなるまい。勝手に癢に觸つて、自ら慰め乍ら、その日一日を車中に暮した。ふと車窓から眺めれば、鐵路の側らに『大總統袁世凱之墓』と刻んだ石碑が立つて居る。日は已に傾いて西の大空は眞赤に焦げて居る。その赤い光線が墓碑にキラ／＼輝いて居る。

奸傑袁世凱といふものゝ、何といつても偉らかつた。彼程の人物が今の支那に居るであらうか。自分達が洛陽を訪ふのも、支那の人物を見度いからである。支那を統一する程の人物であるか、支那人の人傑とはどんな人間だらう。寸暇を盗んで遙々洛陽に遊ぶのもそれが究めたいからに外ならぬ。今この目的の首途偶袁項城の墓を展するは、必ずしも意義のないことではない。

彼是する裡に彰徳の驛に着いた下車しやうか。邪魔くもある。もう發車といふ間際になつて。決然として飛び降りた。ネクタイもカラーも手に搦んだ儘、倉皇として下車したものであるから手拭一筋車中に取残した。まあ手拭位いい、さあこれから生ける人傑を訪ふ前に、死せる英雄を訪ねるとせう。

彰徳は袁項城の故郷である。墓は彰徳から一里といふ郊外にある人力車を走らせ得る道がある

路側には楊柳が植えられてる。墓に近く汽車からよく見える様に『大總統袁世凱之墓』と刻める石碑が立つてゐる。追がに『洪憲皇帝之塋』とは書いてない。琉璃瓦の青い屋根が幾つか建ち並んでゐる。規模は思つたよりも宏大ではないが、平民の墓地とは見えない。どちらかと謂へば、項城の墓として、ふさはしいものであると思つた。

正房には白耳義の畫伯氏の手になつた項城の畫像が祭られて居る。軍服の油畫なか／＼立派である、正房の後側小高く土を盛れるが即ち彼れの墳墓である、『あゝ袁項城、こゝに眠れるか』思はず口ずさまざるを得なかつた、『地下に眠る彼は鐵路の響を耳にしながら、吳佩孚、王占元達が北上南下せるを知れるか』くだらぬ獨語を喋つてゐると、人が馬鹿にするからよい加減に墓詣でを切り上げて去ることにした。

『それにしても袁克定さんは、どうしてゐるのだらう』

訊けば袁世凱の息二十六人の中十七名は死し、娘卅二人中の十六名は逝き十名の女房中二名は、既に亡く、今は貞操を全うする爲に、妾達が墓地近く新居を設けて餘命を暮して居るさうである。一番若い妾は當年二十四歳で、美しいのは二十七歳になる八番目の太々であると。何れも阿片が

好きで、昔の色香も失せて、只もう生きて居るといふ丈のことであるさうな。

三、陣營の規模

鄭州から隴海鐵道に乗換へて、洛陽に向へば車窓の風景はまた格別である。南方遙に秦嶺を望めば、淡くかすかに高く低く——北京にあつて久しく山を見なかつた私達には、何とも得いへぬ景色だ。白く帯のやうに平原を縫へるは汜水である『見たことのあるやうな風景だ』想ひ出さうとあせるが想ひ着かぬ。『あの村この橋どつかで見覚えがある』いろ／＼考へて見た揚句、これは皆日本で幼少から見慣れた南畫の景色である。むかし唐宋に遊んだ日本の沙門達はこの風景を見たであらう。笈を負つて遙々唐土に遊んだ人達は、何んな心持であの谷この村を過ぎて行つたであらうと思へば、涙ぐましい心持がする。

間もなく穴居の村を汽車が過ぎ行く。村全體が山の麓に穴居して居るのである。それも車窓に映る奇景の一つである。穴の村に目立つて洋館が建つてゐる。赤い煉瓦の立派なものである。何だらう、訊けばそれが鞏縣の兵工廠なのである。直隸軍の銃器彈藥を製造する工場である。洛陽に着いたのは正午、日はかん／＼照つて居る。これでは溜らぬ待合室で一睡する裡に漸く涼しく

なつた。

陣營から派遣して貰つた自動車で洛陽の町を突き貫け、西關外一里半に在る陣營に駆けつけた。洛陽の町は日本の京都によく似て居つたらしい。洛河は加茂川の様子に都の東側を流れてゐた。蒲團着て眠れる如き低い平べつたい山がある。香山といふ愛宕に似た山もあるが。今の洛陽は山科よりか幾らか大きい田舎町である。人家も小さく古寺も荒れてゐる。

自動車は護衛の兵士が二三人乗つて呉れた、ブウツと走る裡に人力車、荷車があはてふためいて道をよけて呉れる。狭い田舎道であるから荷車の一輪を道路の外へはみ出させねば、自動車を避けることが能きぬ。牛に挽かせる荷車が來た。車を除けやうとあせるが牛が頑として動かぬ。嚇つとなつた護衛兵だつたか、運轉手だつたか、飛び降りて馱者をぶん擲つた、乗つてゐる者は氣の毒で溜らぬ。

『之れが馮玉祥の兵隊だつたらなあ』と想はざるを得なかつた。馮玉祥の兵隊は決して喧嘩せぬ。車の只乗りもやらぬ、吳佩孚の兵隊にはまだ、其躰が無いらしい。間隙を切らずして、銀二圓を與へて放つ、孚威將軍の精神は、決してこの運轉手護衛兵の行動に存せぬ。洛陽の人民はびく／＼

してゐるやうである。三萬の兵にこの調子でやられたら溜るまいと、思はざるを得なかつた、大層氣になつたものであるから、その後町民の何人かに、兵士の行動を聞いたのであるが、甚だ評判がよい。飲食店等にも悪評はないやうである。

『わるいことはやりませんが、少々威張りますね』と。
夕暮陣營の客となつた。

四、仁者樂山智者好水

『兩湖巡閱使署』 『直魯豫副巡閱使』と赤地に白く染め抜いた旗が、空高く翻つてゐる。嚴かしめい洋門には衛兵が立哨してゐる。門には『第三師本部』と刻んだ板が掛けられてあつた。なかく役目の多い人である。兩湖巡閱使兼直魯豫副巡閱使、兼第三師長孚威將軍吳佩孚、字は子玉、當年取つて五十歳。ちよいと名乗る丈けでも骨である。

洋門を過れば哨兵立ちどころに捧銃をして歓迎して呉れる。徐に脱帽して會釋すれば哨兵甚だ満足さうである、幾つか支那のらしい家を横切れば、一つの應接間に至つた、軍聖關羽の畫像を中央に岳飛の肉筆が掛つてゐる。岳飛の筆蹟は石摺では屢々接したのであるが、本物は初めて

ある。實に立派なものだ。思はず足を止めて近く寄り遠く離れて魅せられつゝあつた。

案内の衛兵が頻に促して奥に招する。まだ奥に客廳があるらしい。作はれて行けば廣い應接室があつた。康有爲の對聯が掛けられてある。康南海は支那當代一流の書家である。その大同論が嗤はれるにしても、その復辟事業が徒勞に歸しても彼の書だけは已に定評あるものである。岳飛に比すべくもないが、しかし實に旨いものである。が、こゝに康有爲の書を見出さうとは思はなかつた。屢々南海のものを見た、けれども此處にあるものは亦特別によく出来て居る。縦横自在に書きなぐられた文字、何と謂はふか雄大なものである。

『將軍は天心橋に、水を眺めに行かれましたから今日の會見は思ひ止りを願度い。明朝ゆつくり御面會あるやうに。然らばこの陣營の裡にお宿り下さるやうに、陣營のことであるから御饗應優待致しやうもございません』

康有爲の文字に心を奪はれつゝあつた私は、もう吳將軍のことは忘れて仕舞つてゐた。

『あゝさうですか』

といつたきり、猶も續けて康有爲の書を眺めてゐた、文字を美術品とすることは悪いことだと

思ふ。文字は實用品であるべきだ文字を美術品とするものであるから、支那の學校は毎日習字ばかりしてゐねばならぬ、良くないことである。がしかし、岳飛、康有爲の文字を見て、平日の議論を省みて大いに心迷ふ感がある。

ぼつねんと彼是考へてゐると其處へ李成霖といふ方が來られた。日本語が解る。聞けば李先生は日本士官學校出身で、山東福山の人、陰棠と號し、教育長として吳佩孚の片腕を爲して居る。この吳佩孚よりも數歳若く、反つて吳佩孚の師である。保定陸軍學堂に於て吳佩孚に教へたことがある。吳佩孚は禮を厚うして李成霖を迎へ、陸軍中將に推して居る。李將軍は自らが世界中の郵便切手を集めること、それが道樂であること、今秋の大演習に日本に行くなど、それからそれへと語り續けた。

『吳將軍は天心橋へ行かれたさうですね』

『毎日一度は屹度、天心橋に至つて水の流れるのを眺めねば置かぬ人です、それから山に行くことも好きです』

天心橋は陣營から二支里、洛水の上流である。そこに將軍の築いた橋がある。論語に『仁者は

山を楽しみ、知者は水を好む』とあるから、吳將軍は知徳兩備の人格を養はむと欲するの意か。毎夕必ず杖を天心橋に曳くさうである、では今宵は陣營の客となり。久し振に兵營氣分を味はふことゝなつた。

五、竹畫く人

副使室の片隅にはベットが備はつてゐる。將軍はこゝで午睡を取るのである。朝五時起床、六時登營、七時より練兵、植樹、接客、一時晝寢、三時より事務、夕方天心橋に水を眺め、八時歸邸、これが將軍の日課である。夕飯も亦御馳走になつた。參謀長李中將、教育長李少將等と共に宴席に就た將軍は秀才である丈に少々本を讀んで居る。康有爲の大同論から近文運動を論じ、董氏春秋を推賞するところ、武人として甚だ稀らしい。

『毎夕天心橋に至つて、水を眺められるは『樂山好水』のわけでせう。仁智共に兼備せられて甚だ結構である。』

『貴君は、甚だ應酬が旨い。豈敢々々』

『將軍の應接室には竹の畫がなか／＼多くかけてありますが、餘程竹がお好きと見えますね』

將軍が竹を好んで畫くことも聞き傳へて居る。

『竹はいゝものですよ。先づ心が空虚でね。心中何物も在らざれば蕩々平々。實に廉潔なものです』

『また竹は雪が降れば、雨が大きければ、頭をさげて曲れる丈け曲り、忍従して決して逆らはぬでせう。ですから萬樹の折れて竹林の害せられざるは、甚だ感すべきでせう。風吹けば風の動くがまゝに、動いて決して破れることはない。自分は竹に教へられるところ實に多い』

『忍従の域を越えて、一度立上ればびんと反し猛然として闘ふではありませんか。一度怒ればその爆竹の音天下に響く。實に立派なものです。ひとつ後で、竹の畫を書いて進ぜやう……』

宴終つて將軍は竹を畫いて『竹雨蒼生』と題して、呉れた外に一二枚字も書いた。筆蹟甚だ珍しい。その夜はまた兵營に宿りて、翌朝早々龍門に遊んだ。龍門は大魏の靈源寺沙門神敬の作つた石佛のあるところである。大同を見たものは必ず共に、此の龍門に遊ぶべきである。私は先年金崎賢、長谷川如是閑兩氏に伴はれて大同に到つた。その時大した藝術に接した、爾來龍門にも行き度いと思つてゐた。有態に言へば吳佩孚に會見する以上に、龍門の石佛を見たくて遙々や

つて来たのである。

將軍は昨夜二十幾名の土匪が、龍門を襲うたさうであるから護衛の騎兵を派遣して置くから、自動車で行けといつてゐた。その時は將軍に對して、暖かい心持を抱かざるを得なかつた。翌朝行つて見れば、成程途中の村々には二騎づゝの哨兵が配附してあつた。村の入口に立つて、私達の自動車に向つて、捧げ銃の敬禮をして呉れた時には、嬉しいやうな恥しいやうな心持がしてな
らなかつた。

龍門の石佛は大同程に、大袈裟ではなかつたが、大同よりも熟達した藝術であると思つた。半壊れた石佛にすら、人間の最も高いあるものを感じしめられた。吳佩孚は木を植えたり、水を眺めたり、山を樂しまうと努めたり竹を畫いたり、漢書を漁つたりして努めて修養して居る。修養してゐることだけは認める、けれどもこの石佛の一つだにも及ばない。この石佛からは目に見えぬ光りが、流れ出て居るやうだ。渴いたものであるから、石佛洞の麓から湧き流るゝ溪水を一掬して喉をうるほした。

龍門から歸途關羽の廟に詣でた。關羽の死して猶生けるが如き首がこゝに葬られて居るのであ

る午後陣營を去つて。教育長李成霖將軍に見送られて洛陽を去つた。

『洛陽はゆつたりしてゐますね。戦争氣分など、こればかりもありませんね。まだ北京の合歡の花は咲き揃ひませんか。』

この言葉は北京の人達に訪はれた時に、答ふべき挨拶なのである。

吳子玉

一

近頃知人某氏に通辯を頼れて洛陽に行けり。無論吳佩孚見物にも色氣あり、されど吳佩孚見物だけなら數日を費すの勇もとより無し、龍門の石佛を想へばこの機會を逸すべきに非らず、ロハの旅行は滅多に能きるものに非らず、『ではお伴しませう』鶴の一聲にて引承け五月十二日夜行、十五、十六兩日洛陽郊外吳將軍陣營に宿泊、十八日歸京一週間に足らざる旅行なり、往復に費した時間徒に長くして、將軍と交りし時間甚だ少し、食卓を圍みしこと兩回、緩々會談意見を交換せしのみにて、自身の言論を以て見えたるに非らず況んや一度や二度會つた丈けで人物は解るものに非らず、筆を採つたものの怎う書いてよいやら見當さえ着かず、筆は進まず心は迷ふのみなり。

さんく御馳走になり厄介を懸けて置いて、くさす譯にも行かず、ふかの諸位にて買収された

るに非れど、義理といふものに筆鋒鈍ぶる譯なり。只管讀者のお察しを望むのみ。

二

吳佩孚は漢學で拵上つた人物なり。腦袋には角い文字が一ぱいに詰つてゐる。京漢鐵路罷工に對する態度も彼としては當然かくありしなるべしと思考せらる。共和民主といふことすらもどれ丈け賛成なのか、無論聞けば答ふるであらうが、腹の底を叩けば『虛君平和』も康聖人南海の學も飛出さぬとも限らぬ。

康南海の書が客廳に居室に門牌に掲げてあるから斯く言ふに非ず。元來彼の修養は漢學から來て居る。毎夕天心橋畔に遊んで、洛水を眺め興趣の湧くが儘に詩を吟ずる。日曜の休暇は香山に登つて必らず清遊を爲す『仁者樂山知者好水』文字通りの修養を爲せるなり。

能く竹を畫く、甚だ植樹を好む、彼の道樂一つとして近代的なものなし。支那流なり、型が古い。その古い所に東洋人は必ず魅せらるべし、『樹を植える、練兵を見たら必ずその足で、植樹園を見廻る。樹木は十年五十年の業だ、噫、えらい……………これだけ見ても其ひとゝなりを知り得て餘あり……………』感心するものは獨り誰彼のみに非ざるべし、東亞に覇を稱せんと欲せばこ

の修養法で以て、人を感服せしむるに限る。

三

彼の麾下に人物なし、李教育長、李參謀長、の兩者あれど何れも、軍務上股肱たるに適する人物、吳佩孚自ら『軍務是我事也、政治是非我事也』と稱す。斯くいふ彼は天下を論ずる素養を有せんも、部下は全くの軍事専門家にして政治その他には全然他事なるが如し。

吳佩孚自らが善且つ忠なる番頭なり。自ら練兵し自ら事務を執り、朝は六時より夜は十時迄みづちり仕事をする。忠實なる番頭として稱揚し得んも、頭領の器は斯るものに非るべし。これにては人物がその麾下に聚らざるべし。模範聯隊長たらむも天下を取ること艱難なるべし。自ら言ふ我は『大山巖、東郷平八郎たらば足る。政治は薩張解らず、今より勉強せむも己に遅し』無論何處まで眞實を吐露せるか疑しと雖反つて自己を知れるの言たるをあやまたず。洛陽の陣營は軍營として模範的なものなり、斷じて容喙的通電の發信處として其人物あるところに非ざる也。

四

彼と共に練兵を參觀す。二十頃の大練兵場に三萬の兵士悉く出でて操兵す。將軍自ら出でて監

督す。毎朝のことなり一日も缺かさずと謂ふ。

練兵は各個教練、分隊教練、機械體操なりき。奉天の昨今は怎うだ、盲目の賣卜者を招いて再戦をトせしめ、飛行機を西伯利亞から買ひ込む、製彈機をどつかから購入する、盛京時報を彈壓する。その焦慮の具合非常識極まれり。然るに吳佩孚は植樹をする。米國から白楊の苗を取寄せ佛國から槐樹を買入れ、日本に梧桐を注文する。練兵は各個教練を専ら行つて、散兵演習、陣中勤務は秋にならぬとやらぬといふ。その閑々悠々たる、全くあきれ果てたものなり。

焦慮せる張奉天が正直者か、呑氣なる吳洛陽が度胸か、人物は張作霖に於ける王永江、干仲漢を洛陽に出見さすと雖、この悠々閑々とせる所より見れば張は吳に一枚輪すべき男振なるか。

五

吳の取り得は『天下統一』の野心ある所あり。愛國の赤誠燃上れる所に在り。

そは夕宴の時なりき、彼は乾杯に乾盃を重ねて痛飲せり。酒氣の腫にちらつくの頃、彼はそろ／＼本音を吐き出したり、彼は武力統一を確信してありき。『天下統一、我に第三師團一萬の手兵あれば足る』思はず笑めり。

彼の熱烈なる練兵、軍規ある教練に見て、また普通支那兵の弱さを知つて、吳將軍の確信また必らずしも空想に非らざるを思へり。而も支那統一の遠きに非らずして、少くもこの數年の裡に、實現せむ意氣込なりき。

近來彼は少年を召集して、根本的に軍事教育を施せり。凡て十五六の子供なり、五年待つて大に戦はむと爲せるなるべし已に眼中張作霖は非ざりき、幾ら製弾機が弾丸を製造しても兵士に訓練が無かつたら駄目だ戦争は銃後に在る、彼はよく日露戦争の實驗を知つて居る。奉天の烏合の勢何者ぞといふ元氣殆んど確信の域に入れり。

六

通辯として行きしに相違は無けれど、我もまた一家言を有する者なりと、うぬぼれ出して終に一言せり。人の壯語を聞けば自ら大言を吐くに到る。それもまた人情也。

『將軍は政治を談せずと稱す。談ぜざるも通電を發す。異る所は談ずると發する言葉の差異にあるのみ、寧ろ正直に我もステーツマンたらむと心竊に願ふと言はれよ、米利堅國も最初はゼネラルが中々はばをきかせたるもの也、日本の維新時も然り、今も猶首相加藤は軍人たらずや、將軍も

また天下の爲めに乗出すことあるべし、必らずしも軍人なるが故に卑下するに及ばず。大に打出すべし。武力統一に搦て、加えて、中國改造の大業を爲すべし。

されどそれを爲すにも或は時期尙早からむ。今は、今暫し兵を練つて時を待たるゝも、或は可ならむ、然らばその裡に政治的手腕を有する人才も、麾下に集つて來らむ。時機も熟すべし』

將軍果してブローケン支那語が聞取れしや『我天分没、年歳已經多、不能不能』と答ふるのみ、『太謙々々』で我輩も語るを止め話頭を轉じたり。

『貴君は支那に於て、何人を面白い人物と思ふや』將軍のこの問ひに對して、『閣下はその人物なり』と答ふべき筈なりしならむも、我輩は北の胡適君を稱せり。而して 將軍よ胡適君は閣下の顧問たるに最も面白き人物たらむ、將軍も思切つてこれ位の人物に、天下の大事を語るの勇なかるべからず、陳炯明は陳獨秀を聘せしに非ずや。胡適君は穩健にして卓論を有する人物なり』將軍黙しつゝ聞けり。

七

將軍の自動車を驅つて龍門に遊べり、作夜土匪二十騎襲へりとかにて將軍は騎兵一隊を派して、

道中の警戒と爲せり、自動車の村に至れば哨兵捧銃す、恐縮といはんよりも氣まり悪るし。

龍門の石佛を見る。年來の志願を果せり。大同よりもこの方が圓熟せる藝術なる如し。鼻かけたる石像、雨露に洒らされたる石佛一つとして、人間至高を現はさざるなし、やつぱり來て見てよかつたと思へり。

何分ゆつくり見る暇の無かりしは残念なり。後日また無錢旅行の機を待つて、再び石佛を禮讃せむことを誓つて去れり。

歸路車中同坐の一支那人に聞けり。近頃耳よりの話なれば附記すべし。先頃張敬堯が洛陽を訪ひ段琪瑞の爲に何事をか謀れり。張敬堯と言へば吳佩孚の湖南に於ける戦功を横取りして、督軍となり。安福の威勢を着たる人物なり謂へば安直戦争の因を作り、火蓋を切るに至らしめる發頭人たり。彼洛陽の軍營に入りて、一夕盛宴に招かる宴將に、酣なるに及んで、ふと電燈消ゆ。すはと立上りたる敬堯と其護身兵は、微醉忽にして醒めたればこそ、掌銃を擬し眼尻を吊上げて、顔色蒼然身構へたり。一瞬の後電燈ばつと點ぜらる。蓋し不意の故障なりし成る可し。電燈輝けば佩孚は依然として暗中手酌して紹興酒を飲み陶然たり。敬堯今更の如く赤顔、うろたふるも淺ま

しかりしと。未だ眞偽を正さざれども吳佩孚ならば朝飯前なる可く、また支那式修養を積みりと稱せし、余が觀察を裏書せる佳話ならずや。勿論面白き人物也と評して違はざる可し。

歸京すれば直に吳佩孚論を強請せらる。未だ想の練れざるに發表するは我意に非らざれども止むなく綴りて假に吳子玉論を書けり。

馮玉祥

一

其人を知らざれば、其友を見よと謂ふが、その論法で行くと、吳佩孚を知らざれば、馮玉祥を見よといふことになる譯である。馮玉祥は吳佩孚と同列の人物であつて、決して後輩でもなければまた部下でもない。にも拘らず馮は吳の後援を爲すに、飽迄忠實である。抑々だ、共に悲しむは反つて易く、共に喜ぶは極めて難いものである。馮の吳と共に憂ふる元よりうるはしいことであるに相違ない。がそれは王承斌と雖も、能ふところである、馮の吳と共に戦捷を祝し、吳の中央に於ける聲譽を賀し、毫も嫉まざるは吳の人物の偉なるが故であるか、それとも馮の節操の堅なるが爲であるか。吳が徐樹錚と戦ふ場合、馮が先んじて之に加はるは、舊師陸建章が爲に弔ひ合戦なれば、然ある可きの行動であるが、何の恩仇なき張奉天を討つの日、馮は未だ物騒なる陝西、危険なる河南を腹背に備へて克く是をして後顧なからしめたるは、到底常人の爲し得る所ではない。如何に知友なればとて、誰が之丈の大任を吳の爲に引受けるものがあらうか。而も

戦ひ止むに及んで、馮は河南一省を貰へば、之に甘んじて貧弱ではあるが。あり丈けの腦味噌を搾つてゐる。誰か之をしも水魚の交りといはざらんやと謂へば、だい分形容が古るいやうだが、まあそこらに近い話である。

二

馮玉祥の督軍振を紹介する。陝西に行つた時も、河南を占領しても、彼が先づ實行したことは、廢娼なのである、藝者、娼妓、夜鷹、妾、一切の臭い婦人が馮の省から追放せられるのである。町々の夜から紅燈が除かれ、村々の宵から笑聲が絶え、ひつそりと沈んだ平凡な夜々が續くのみである。

『追出す趙倜に、未練がないが、班子の姑娘と別れが惜しい』

胡弓を後生大事とかき抱いて、小さい足に腰振りく、前の宵可愛男と泣き明かした赤い眼蓋を氣にし乍ら、或は山東、或は蘇州へと、逃げ行く淪落の女の群を見て、馮玉祥は、惡魔拂を仕出かしたつもりでほゝゑんでゐる。

馮玉祥の宴會の凡ては、酒抜きである。何のことはないサイダーを飲んで拳でも打つて『全來

到四季財、哥兒倆好』とでも云つて騒いで居ればよいのである。酒屋の前に兵隊が立つてる。買ひに来る人々の名を帳面に書く。『筥棒目督軍様ですら、酒氣なしぢや、おめい等が、酒屋の暖簾がくゞれて堪まるものかい。馬鹿かうなると一分の下戸は我黨の世界である。この春であつたかと思ふが、吳佩孚の誕生祝ひに、サイダアを幾ダースか贈つたさうである。

酒と女は敵と知る可しと謂ふから、河南の善政と稱せられるものも無理はない。『何だ、人生はたつた五十年ぢやないか、若い時は二度無いと謂ふぢやないか、何のその女氣なしで、へん、野暮の骨頂ぢや』まあさう、くさして貰ふまい。馮はまだくこんなこともするんぢやから。或日のこと馮は、道傍に賣る饅頭屋を攫へて、

『こら、賣饅頭的、貴様の賣る饅頭は、えらい高いぢやないか』

『へえ、あの兵隊さん、この間うち戦争が続きましたよつて、一寸位あげんと嗤はれます。へえまあ、一寸した戦争成金でござんすわ』

『馬鹿、戦争の時こそ、人民が困窮するんぢや成金にならう等とはけしからん』

『へえ……………おそろしい權幕の兵隊さんぢやこと、どうぞ命ばかりはどうぞ』

『相許さぬ、死刑ぢや』

おすといふ、けつたいな音がしたかと思ふと、饅頭屋の首は血みどろになつて、地面の上にとろんでゐた。恚う謂ふ善政であるから河南は火の消えたやうに不景氣であるさうな。景氣のよいのは實に督馮玉祥だけである。

三

或る夜、馮は人力車を驅つて、町を歩いた、涼しい風が汗を静めて、この上もなく氣持がいゝ。人力車のドライブは夜に限る。あゝ欠伸が出る。車屋と話してやるか。

『おい、仲夫、此頃は儲かるかい』

『へえ、軍人さん、可哀相なものですぞ、三十文より入らんこともあります』

『三十文とは、恐ろしく少いぢやないか』

『以前はこんなぢやなかつた。馮督軍の河南入この方、俵に乗るものが、半分になりました、肝腎の馮さんが馬車にも自動車に乗らないで拾ひ車に乗るのですから、部下の人々は皆遠慮して、徒歩で済ませるものすからね』

『そうか、馮といふ奴は悪い奴ぢや喃』

『いや、親切で、正しいで、それから乞食を救つたり、不具者や年寄の家を拵へたり、なか／＼氣の届く人ですがね、俺等には何しろへえ』

『どうぢや、馮が自動車に乗つてぶら／＼乗廻るがいゝと思ふか』

『それは、あなた我々共にや、何の関係もありません、が、せめて夜の十二時まで、町の通行を許されたいものです。そうすれば俵屋も助かりますから。夜の収入が増えて』

馮玉祥を乗せてるやうとは、夢にも思はないで、車夫はさつさと走つて、顧みやうともせぬ。

『旦那、こゝは督軍衙門ですぜ、お前さんの家ですかね』『わしが、馮玉祥ぢや』

『へえ——ん、へえん』

一元の銀貨を握らせて、馮は哨兵の捧銃厳めしく入つて行つた。俵夫は車の敷布圍をかいで見たり銀貨をかちんと音させて見たり、暫し呆然としてゐたさうな。翌朝早く、夜間十二時通行の布令があつた。

『どうだ、馮玉祥の善政振はこんなものだ』と言はんばかりに、何でもかでも變更され改良され

て行く。

四

こゝまで書いたら、讀者は多分馮が何者であるか解るであらう。彼はアーメン黨なのである彼の軍隊は軍歌の代りに、讚美歌を呶鳴る。點呼の喇叭で禮拜が始まる。日曜日は説教を、金曜日は祈禱會が開かる。そして何百人かの、兵隊が洗禮を受ける。玄冬、北京の劉芳牧師が長安で、一大洗禮をやつた。

朝から始めた洗禮式が、とつぶり暮れても終らなかつた位、長引いたさうである。

馮の好きな政治家は、クロムウエルであるさうな。彼は支那のクロムウエルであるかも知れぬ。馮の話聞いて『支那なればこそ』と言ふ人が多い。その通りである。如何に督軍なればとて勝手氣儘に、自らの理想通にやれよう筈がない。全くのこと支那なればこそである。無論、馮がどれだけ耶蘇を理解してゐるか、それは大きい疑問であるに相違ない。少くもトルストイ等の基督教とは、だいぶ距離のあるものである。だがクロムウエルを崇拜してゐるからには馮もまたおめでたいクリスチャンであり得よう。

馮はかういふ善良なる暴君であるのだが、彼が中央に乗出して、滿天下を河南化するところがあるか。大總統となつて全支那の檜舞臺に上る時が来るであらうか。それは一寸返答に困るのだが、假りに彼が全支那の督軍となることがあるならば、彼は多分、黎元洪よりも袁世凱に、宋の大祖よりも、秦の始皇に似たる統一者になるであらう。支那のことだから先のこととは解らん。があの耶蘇きちがひの馮玉祥が、半年位北京に納まつても、穴勝悪くはあるまい。

吳佩孚の好く男は、皆この通りの政治家である。交通部總長の高恩洪、財政部總長の董康河南督軍の馮玉祥、總ては就任早々、やつてやつてやりまくる政治家である。

顔と王と顧

一

顔惠慶は同文書院、中西書院、聖約翰大學に學んで米國に留學し、バージニア大學を卒業した。これが顔惠慶の學歴である。王正廷は北洋大學に學ぶこと六年、日本に留學し更に米國に渡りエール大學を卒業した。これが王正廷の學歴である。顧維鈞は中西學院、王氏育學塾聖約翰大學を卒業、米國に留學コロンビア大學を卒業したこれが顧維鈞の學歴である。

何れも略々學歴を同じうして居る。獨り王正廷のみは日本に學んで居る。それ丈けに日本語が喋れる。日本語が喋れる丈けに日本をより多く理解してゐる。年齢は四十六、四十二、三十六の順序である。

二

顔惠慶は聖約翰大學教員、留米學務處總辦駐獨公使丁抹兼瑞典公使を歴任、外務總長を輕て國務總理に現任してゐる。大部分は外交官生活である。王正廷は在米留學生會長、湖北軍政府外交

部長、工商部次長、參議院副議長、廣東非常國會副議長、基督教青年會總主事、ヴェルサイユ講和會議使節、山東交渉全權代表、日露交渉代表に歴任してゐる。外交界に活躍して名を世界に馳せた。顧維鈞は國務院秘書、外交部秘書、墨西哥公使、米國公使、ヴェルサイユ講和會議使節に歴任して、外交部總長に現任してゐる。外交界に活動して名を爲せる點に於て、三者同様である。

三

顔はアンチフロン思想に強い男である。わけて日本に對してはきつと引締めて懸る。彼が國民に安心せられ、吳佩孚に棄てられぬ譯は、彼の腹底に、排外愛國の一物が、ぐつと納まつてゐるからである。王正廷は米國に行けば、屹度やるだらう處の政治家である。支那は正直なオープンハートのやり手を遇するに、餘りに複雑すぎる。誰もが本當のことを喋らず、言はず、裏切りたくらみ、ちよつとやそつとでは怎うにも恚うにもならぬやうである。王正廷は支那には勿體ない程の政治家である。顧維鈞はあれでなか／＼やれる男らしい。多くの米國仕込のちやき／＼がおつちよちよいに飛び廻る時に支那人のぐるりは馬鹿にする。聞くに米國歸りの技師は四五年は役に立たぬやうである。役人としてはほんのセクレタリイとしてしか使へぬやうである。教授

としても留日學生に比べて、字を知らぬのみか、無暗にちよ／＼してゐて、學生に馬鹿にされ易い。が、それ等が歸つてから數年の苦勞を嘗め、東洋風の骨を飲み込むとらんと伸び上り據頭するやうな。顧維鈞がやうである。一見ちよ／＼してゐる様で、あれで中々やる様である。

四

顔惠慶、王正廷、顧維鈞等ば、常に競争者として、嫉視し努力し奮闘してゐる様、恰も鎬を割れるが如くに見ゆる。王正廷が露支國交恢復を成功せしめむとするや、顧維鈞王正廷の全權を否認し、一旦露支國交を破綻せしめて、自分の手に依つて、露支國交を恢復した。見え透いてはゐるが随分激烈な鹽梅である。その見え透ける辣腕を制裁せむ目的の爲にか爆彈を以て見舞れた。顔、王、顧三外交政治家の共有せるモットーは、利權回收である。今日支那國民にして、利權回收の思想を抱かぬものは殆んどあるまいと言ふことであるが、この三外交家はその國民輿論に立脚して、着々利權回收に取懸つて居る。

五

今日の支那に在つて、最も成功し易い者は軍人である。次が外交官である。支那は君主國では

ないが、軍主國であるから、軍人でなくては夜も日も明けぬ。大總統總理、總長悉く軍人にあらざば、軍人の傀儡である。軍人の次に外交官が成功し易いといふことは、支那が如何に外交問題に興味を有せるかを考へれば解る。國力に依らずして、外交的技巧に依つて、利權を少しでも回収しやうといふのが現支那の輿論である。故にその輿望に添ふて多少でも成功せしものは、忽ちに名譽を擧げることが出来る。顔、王、顧共にそれ／＼利權回収に若干の成功を爲したるが故に遂に今日の名譽と地位を勝ち得たのである。

六

顔惠慶、王正廷、顧維鈞、何れも基督教信者である。日曜日の午後北京は方功巷の劉芳牧師邸に行くと、馮玉祥、顔惠慶、王正廷等相集ふて凡そ二十名ばかりの集會が開かれる。何れも前か現の總長連である。北京に大臣級の基督教者が二十四名ある。顔惠慶の如きは長い間北京基督教青年會長であつた。

王正廷は仲睦しく小幡公使と交渉し得たが顧維鈞は芳澤公使と小競合をやつたやうである。彼は今は已に亡いけれど、曾て唐紹儀の女を嫁つてゐた。この男馬鹿に女縁のある男で、今は大金持の女婿になつて、お金を湯水の如くに使つて居る。

王 寵 惠

王内閣が出来るの出来ぬのと大分久しい問題であつたが、夫れが唐紹儀内閣の死産の爲めに、とう／＼此世の物となつた、が成立すると間もなく辭表を出した、如露又如電、果敢ない生滅であると哀んだが何の事、夫は表面で内實は腰を据ゑたとある。何れは得體の知れぬ支那政界の事、成るやうにしか成らぬであらうから、チョット此處らで王總理其人を秤に懸けて見ようか。ワシントンコンフェランスが開かれる、誰を代表したら宜からう。いろ／＼と物色せられた時に王寵惠が目にとまつた。南北の分裂せる際でもあるから、成るべくは南北に人望ある人物を物色せんければならぬ。でないとい異郷で打つ藝當が膝許の南方に認められぬやうな具合では、面目ないことである。

王寵惠ならば今こそ北大のプロフェサーであるが廣東生え抜きであるし、第一革命には南方を代表して外交總長に擧げられたのであるから、もてこいの人物である。早速お鉢は廻つた。香港のラインスコレツヂを擧へて天津の北洋大學に入つたことすら南北に兩棲してゐる。日本で政治

をやつて米國で法律を勉強した、東西の呼吸に通じてゐる。民國元年には南京政府の外交總長、北京政府の司法總長になつた。元來が兩股かけるやうに出來上つてゐる。これならば分裂せる支那の代表として申分ないだらうといふに在つた。

本人も自らはエール大學でドクトル・オヴ・フィロソヒイを貰つた學究なのであるが、何となくプロフェサーを以て終止すべく餘りに尻がふか／＼してならぬ。近來の支那は兎角、外交を人材の登龍門とするの觀がある。さうだ、折角廻つて來たお鉢だ、やつて見るとせう。古い洋服にアイロンかけて別に新調のも一着二着拵へて、ワシントンへ旅立つのは、去年十月のことだつた。

先づ無難なところをやつてのけて、而も無駄口利くと思ひ乍らも、本國の有象無象を喜ばせる爲に、色んな勝手な熱を吐いて、一通り原則丈けでも認めさせて歸つて來たのである。民國四年反袁運動をやつたを最後として、出づべくして出です、或は學究として、或はまた中華編輯局創立等して、ステイツマンとして寧ろ失意であつた彼は、ワシントンコンフェランスからの妙な行掛で、ぬく／＼と頭を擧げ來つたのである。

今日では何のことはない、國會復活第一次國務總理である。南北合併せられたる國會をバツス

する爲には、彼の如き南北兩棲動物が必要なのである。唐紹儀をとのことであつたが、唐ではあまりに經歷があり過ぎた。偉なる過去があればある程、何れかの派黨に、何等かの蹟を與へてゐる。人間に限定が附せられてゐる。色彩がはつきりと着けられてゐる。で王寵惠の如きヤングボーイが引張り出されることになつたのである。無論そこにその複雑な黒幕があるであらう。しかし、そのごた／＼した細い理窟よりも、彼が見出されたる二つの大きい理由は、彼の兩棲動物であること、ヤングボーイであるところにはなかつたか。

彼は今年數へ歳の四十一である支那人は子供だと思つてると、何時の間にかちやんと、總理大臣だへエヘエ……などと笑ひ給ふな。若い者がどん／＼繰出されるのが可笑しくはない。貫目だの經歷だの、年齢だのいふもので、有難がられる國の方が駄目なのである。

王正廷、王寵惠、余日章、徐謙皆若い者が仕事することになつた。顧維鈞と來ちやまだ子供である。それがほ／＼する罌丸の滋味に乗じて大支那を料理しやうといふのであるから全く元氣なきを得ない。

彼はよく英語が出来る。頭が割合クリヤーである。人物もリファイン・ゼントルマンである。

いふこと喋ることがあれで、きりつと論旨立つ。前途有望なる人物である。

が、しかし幾ら會話の點數が五點でも、學問が優等であらうともだ、ない袖は振れまいぢやないか。兎角世の中は金である。僅しかないお金を督軍だの巡閱使だの、何だのかだのいふ手合が嚇半分に取つて行く。教育家は索薪運動を起して、呉れ〜いふ、役人官吏までが腹が減つては仕事ができぬといふ。鐵道の切符から上るお金すらは最寄りの軍人が失敬する。失敬した上にまだ軍費を呉れといふ、呉れ〜いふものは乞食の子だといふけれども、薩張泣きねぢる様子がない。外國は借さぬ呉れぬ同盟をしてゐる。

かういふ世帯をやりくる爲には英語も法律も、何の役に立たぬのである。こんな時に總理杯になるのは、全く眼先きがきかない。眼がどうかしとるんぢやらう。一つ診て貰ふといふので、ロツクフェラーの病院に入つた。一日銀十四弗也の入院料を拂つても、てんで癒らぬ。面會謝絶といふに、矢張引出しに来る。一層のこと國家そのものを、外國の病院に入院せしめて、金缺病を直すとせうかと、思はぬでもないが、それ程の勇氣もなし。具圖々々してると自分の懐までが怪しくなる、退院々々。さうして朝陽門裡の自宅に歸つた。

さうかうしてゐると、曹錕が幾らか寄附することになつて、官吏教員は一先づ落着くことになつた。まあ〜誰が總理になつたからとて、別に大した思案があるではなし、まあそんなら慚うして居らうか。その裡に何とかなるであらう。てなところである。

汪榮寶

一

十二年十二月十五日下午離京、汪駐日公使は參事張元節、書記錢穉孫、隨員耽續之、領事補陳銀、學務員陳延齡、沈秘書官等を隨へて赴日の途に上つた。彼は拔貢の出身で、其官歴古く曾て清朝臨部史書たりしことがある。後笈を負ふて東遊、早稻田大學に學び、歸朝して外交官となり、白耳義、瑞西の公使を歴任した。齡未だ四十五、前途多望の人である。

二

彼は袁甫と稱し、幼にして文名を天下に馳せ、神童の稱があつた。清朝の爲に勅語を起草したること一再ならず、南に章太炎、北に汪袁甫ありと並稱されたものである。彼の詩は誠に上品にして雅味豊か、書もまた甚だ立派である。

彼が此くの如く、國文に達して居るが故に、知らざる者は外文は怎うかと危ぶむであらうが、日本語は勿論、佛語に通じて少しも不自由を感じない所の外交官である。わけて日本には、まだ

く支那人と見れば、詩を談じ書を望み、文を選せしむるハマが少くない。かゝる國に赴任すべく、最も適當なる公使であると謂はれて居る。

三

彼は國旗の考案者として知られて居る。紅、黄、藍、白、黒の五色旗を考出したのは彼であつた、彼の名はこの事だけを以ても、民國の續く限り、思出されるであらう。

あの國旗は漢滿藏蒙回の王族の共和を象徴してゐるのであるが、簡單にして甚だ要領を得た國旗である。少くも黃龍旗よりも、あつさりしてゐて、よく思想を表はしてゐる、或人は黃龍旗の方がチャイニイス、カラーを表現してゐて、風雅であると謂ふであらうが、そは外人のいふことで、共和の思想を植ゑ付ける爲には對内的によく考出されて居る。

四

東京は赤坂、溜池の支那公使館は長い間、老爺没在家であつた。學資支給を要求して止まぬ債鬼達を追拂ふ爲めには、現在老爺没在家の方がやりよかつたであらう。

學資の見込が着かねば駐日公使の成手が無かつたのである。然るに今度、日本には御大典が行

はせられる。それには老爺不在家では、萬事不行届とあつて、愈々赴日すべく首を縦に振り兼ねた汪公使も遂にやをら尻を持上げた次第である。而も焦都は今秋以來、喧しい留學生もめつきり減つて、それも案外、騒々しくもないかも知れぬとの豫想もあらう。

五

彼の赴日抱負を叩けば「經濟だの政治だのを以てせば利あれば親み、利あらざれば排することになる。故に日支關係は常に動搖を免れない、されば文化を以て、精神的に相親善せむことを劃さねばならぬ。聊かこの邊のところを盡力して見たい。庚子賠款の使途に關し、對支文化事業、留日學生問題、凡てこの方面に對して、日本のよき相談相手たらむことを期して居る。」と

六

さて彼を送るに當つて我等も、まさに一言なかるべからずである。日本は今や、かなり強い内閣を持合せて居る。

閣班に列する者何れ、當代日本の有する大政治家たらざるはない。謂ふ所の看板級の人物をどつさり首を並べて居る。後藤のやり手、清節四十年の犬養、陸軍での田中、女婿の財部、學界の

人物岡野、總ぶるに鐵腕首相權兵衛あり。やれば何んでもやれる内閣である。政黨と元老を屁とも思はぬ程でもないが、割合に何とも考へぬ連中である。かゝる内閣であれば、日支の仕事もやる氣なら何でも日本にやらせ得る。駐日公使たるもの、平凡なる親善に調を止めて大に劃し大に爲す所ありて然るべしであらう。

七

汪公使は餘に人物が過ぎる。彼の前半生は平和にして坦途の上を歩み來つた。

今や駐日公使は少々やり手を要する。日本民衆に向つて兩國共存を理解せしめ日本人民をして支那を愛せしめるの思想を、もつと廣く深く植ゑ付けねばならぬ。幸に最近支那青年民衆は排日運動を以て日本人を反省せしめ、憂慮せしめ改悔せしめ來つた。それもよかつた。そればかりで日本を反省せしめて居ることは危険である我等はむしろ支那の爲にとらぬ所である、非常手段として排日運動を以てすることもよい。が、餘にそのみに依つてると、何時の間にか日支兩國國民の感情は乖離して仕舞ふ。それは恐しいことだ。故に、日本民衆をして支那を愛せしむる努力も必らず必要である。

従来東京の留學生達は、排日の低氣壓の中心となつた、それには何か原因するところがあらう。その依つて来る所以を研究し彼達の思想を訓育し、開拓し指導する偉大なる人物が要る。實に汪公使は留日學生の先輩である。

而も同時に世界の氣勢も知つてゐる筈である。留日學生をしてよく理解せしめ、日本のブライトサイドを注目せしめて、留日學生らしい感情を養成せしめて貰ひ度い。人氣取りは誰でも出来る。しかし偉大なる人傑は、決して時代にのみ持囃されるものでなく、必ず時代以上に出でて、展望大觀することを忘れない、どうせ貧乏くじの駐日公使である。が、やり方に依つては、腕一つ振ひ甲斐ある席であると思ふ。難關は往々にして登龍の門となる。自重自愛して大にやつて貰ひ度う。

共管の聲、近來徒に喧しい。この際、日本を中國の味方たらしむべく行く者に、實に佛國に渡りたるフランクリンの使命非らざるなきか。

辜鴻銘

一

日本、仙臺の碩儒に岡千仞先生といふがあつて、號を鹿門と稱した。明治十七年五月二十九日(光緒十年五月五日)出發して、上海に渡り、蘇州、杭州に遊び、北京にも至り、更に引返へして廣東に行き、遊歴すること約一年、光緒十一年三月三日(明治十八年四月十八日)東京に歸つた。明治十九年七月の出版になる觀光紀游なる遊記がある。當時己に名著として世の視聽を集めたものである。

數年前のことであるが。吉野作造博士から

「支那に辜鴻明いふ人は居ないか。知らないか、心當りがあつたら一報願ひたい」

いふ意味の書面が來た。殆んど私は無意識的に辜鴻銘先生を思浮べたものであるから

「北京に辜鴻銘といふ老いたる洋學者があります。銘と明とは同音ですから、多分おたづねの人物でありませう。未だ寡聞の故か辜鴻明といふ人を知りませぬ猶よく調らべて見ませう。」

「日本の仙臺の人で、名を千仞といひました。」

「、、、、、、」

辜翁は瞑つて考へて見たが、薩張思出せぬ様子である。

「その岡いふ儒者は今から四十年ばかり以前に、支那に來たことがあるのです。そうして辜鴻明といふ青年學者に會つた筈です。辜鴻明と辜鴻銘この二つの名前は大層似てゐますから、若しやと思つて訊ねに參りました」

暫らく考へ込んでゐた辜老は、桌を打つて立ち上り、莞爾として往年を思ひ出で、うたた今昔に耐えない様子であつた。

「覺えて居る。上海の三井洋行であつたか。支那の學者思想家が、招ぜられて一夕の會話を爲したことがある。席上張之洞と岡鹿門とは筆頭を以て、最も多く相談したのであるが、私はその折容喙する毎に、歐化、西洋文明の輸入を語つたものである」

「、、、、、、」

「そうです。確かに自分は洋服を着てゐた。西洋カブレであつた。」

辜老は「西洋カブレ」の一語に至つて、日本語を用ゐることを忘れなかつた。辜老は皮肉と警句とは必らず日本語でいふのである。

「その折、岡鹿門は羽織袴の日本服だつた。今更の如く當時の若き自らを顧みて、實に感慨無量である。」

「ではやつぱり、私のお尋ねしてゐる辜鴻明氏が、あなたのことですな。驚きましたね。」

辜老はわたくしが何を喋つても黙し、且つ瞑してゐる。日東の儒者を彷彿として眼前に浮べ、同時に當年の自らを記憶より呼び起して、本當に今昔の感に堪え得ないのであらう。辜老にもそんな若い時代があつたのである。人間の一生といふものは決して、單純なものではないと思つた。

二

獨逸で工學を、英國で文學を勉強して歸朝したのが、二十一歳であつた。當時の洋行戻りは實に珍らしかつた。珍らしかつたと言ふよりか皆無であつた。恰も中村敬宇、新島襄、津田梅子等の先進が、明治初年に持囃されたと同然であつたらう。

辜鴻銘は早速張之洞に引見せらるゝことになつた。當時の張之洞は李鴻章、劉坤一と共に、勢

望天下を壓するの人物であつた。幾ら洋行歸りの青年でも、張之洞自身のお目通りで、採用になる等とは到底何人も想到できぬところであつた。張之洞は道德は中國國有の聖賢に據り科學技術は歐米の文化を輸入しやうといふ方針であつたものであるから、辜鴻銘の如き人物を要すると甚だ切實であつた。それやこれやで人才拔適の興味にそゝられて、張之洞自らが破格の接見を許した。

張之洞が門番に案内せられて應接室に招ぜられ行く青年辜鴻銘を、窓間からちらつと見れば、辮髪を垂れる代りに帽子を被り、洋服を穿ち、獸の皮を以て作れる靴をはいて居る。而も靴音を立て兩手を振つて堂々として客廳に這入つて行くのである。

張之洞が客廳に至れば鞠躬如として平蜘蛛の如く、恐惶頓首するかと思へば、またして何の不思議も無い筈であるが、辜青年は極めて平氣である。桌上的西瓜の種を張之洞がすると同じやうに、掴んでは食べ食べては掴む。張之洞の方では數多接見する人間共とは丸で違つた態度をとるところが、氣に入つたやうでもあるが又小癩にもさはる。むしやくしや食つた西瓜の種の皮を捨てやうと思つたが、床板が餘にびか／＼してゐるので、甚だ躊躇せざるを得ない。遺の辜青年もは

たと困つた。止むなく左の掌に入れて、持ち歸ることにした。歐洲の情況をそれからそれへと訊ねられたのであるが、若者辜は即答即妙に喋つて、漸く引見を終つた。さて愈々辭するに當つて左の掌にある西瓜の皮をそこらにばら撒いてさつさと引上げて行つた。

張之洞は何だか馬鹿にされた様でもあるし、面白い奴にぶつつかつた様な氣もした。兎に角辜鴻銘は一躍、張之洞の秘書に擧げられることになつた。辜鴻銘のやり兼ね間敷じき藝當である。

三

彼はペナン（彼南）に生れた。南國の産れである。幼年の彼は椰子を攀じ、海中に泳ぎ、砂まみれになつて終日遊び廻つた。この土民の子をホルプス、スコットといふ一英人が伴ふて英國に歸つた。ホルプス、スコットはサー、ウオタースコットの親戚であつた。彼がサウザンプトンのホテルに着いた折、女中が彼を、娘にして仕舞ふた。彼が男便所に至るところを捕へて、「お前さん、そこは殿方の行く所だ、こつちへお出でよ」

いつた。彼は女の便所に伴はれて、其處で躡んで小用を足すべく餘儀なくされた。無論辮髪が

結はれてあつた爲めである。

一辮髪といふものがあるから、女子にせられるんだ、切つちまへ」

何の愛惜もなく、何の躊躇もなく斷髪して仕舞ふた。彼の髮位不可思議なものはない。昔猶太にサムソンといふ豪傑が居つて、髪が長くなるにつれて勇氣と腕力が加つて行つた。敵はサムソン一人あるが爲めに猶太を侵すことが能きなかつた。そこで美しい女間牒を遣つてサムソンを欺し、その髪をぶつり根こ切りにして仕舞ふた。するとサムソンの腕からは曾ては山を動す程に強かつた力が、失せて路傍の童輩すらも馬鹿にされた。敵は力失せたるサムソンの眼玉をえぐり、盲目にして仕舞ふた。然るに髪は人の知らざる間に廻びて、何時しかサムソンは力量と勇氣を恢復して、馬の骨を振上げて何千といふ敵をめくら滅法に打ち殺したのである。

このサムソンの物語は、太陽のことを象徴したものであるとのことである。太陽の髪といふのは日光である。太陽は日光の長く射られてる間は萬象を生殺する力を有する。けれども夜に近いて之を失ふと盲目の自轉になる。辜鴻銘の髪はサムソンのとは少く違ふが、甚だ相似て居る。辮髪が切られると、進取歐化の先驅である。が辮髪が垂らされやうものなら、國粹保守の權化と

なる。彼の辮髪は力の泉ではないが、氣の源であるかも知れぬ。

岡鹿門の渡支を迎へて、東洋文化をあざ笑つたる洋行歸りのハイカラ青年は辮髪を持つてゐなかつた。今は岡鹿門が紋付羽織でやつて來た如くに、支那服を穿つて、支那家屋に住んでゐる。

サウザンプトンの宿屋で、女中にとがめられたる辮髪は、彼を婦人の便所に躡ませた。そのしやがみ方と同じ躡み方を以て、今では廢帝溥儀陛下の前に辮髪が物をいふて居る。

四

彼を保守學者の凝りかたまりであるかの如く謂ふ者がある。けれどもそれは彼を知らないものといふことである。

噓と思つたら辜老が何を食つてゐるかを老へて見るがよい。彼は大陸飯店だの、京漢食堂で何時でも、ひとり考へ乍ら食つて居る。つまり胃の腑は洋食で満たされて居るのである。腹のどん底は洋物で一ぱいなのである。わたくしは一再ならず、辜老が落ちこけた頬を西洋料理にふくらせて、僅かな齒をもぐつかせ乍ら食つて居らるゝを見た。大陸飯店は露西亞料理といふので冷菜が實に多い。けれども辜老はあれを抜きにして、直にスープから始める。

讀者は彼が、洋食を鷄呑にせざる光景を思出さねばならぬ。彼の胃の腑は何人の胃の腑にも増して、洋食を消化し得る丈けの力量を有する。洋食を食つてその營養から辮髪を引延ばす丈けの胃腸なのであるから大丈夫である。彼の辮髪のみを見ると保守のこりくゝの如くに見へもするが、腸は西食を常食として居るのであるから、平々凡々たる保守主義ではない。我が辜老に於ては、グレイキ、ラテンの古いところは最も得意、英語、獨逸、佛蘭西、博言多識なのであるから、食はず嫌ひの頑固爺ではない。

その辮彼は英國では、グランマーを學んだ外、何も勉強せぬといつて居る。エデンバラ大學を卒業したあの、獨逸で工學博士になつた等とはおくびにも出さぬ。「俺は外國でグランマーを學んだのである」といふに至つては、人を食つたやうな言ひ方ではあるが、しかしそれは辜老の本當の告白なのであらう。かう言ひ得る程に、彼は西洋文化を高所から眺め得る人である。彼はよくテニソンの詩を引いていふ。「テニソンの歌に、

「東は東、西は西

東を西とするは混亂である

東西 二つの文化を

融合する爲めには

東と西を混亂せしめぬところにある。」

とある。東方文化の國は西の文化を丸呑みするを止め、入るべきを入れ、排すべきを斥くべきである。「と説いて居る。馬の靴を人間にはけよといつたつてはけるものではない。」

「獸の道德を人間の道德にせよといつたつて、守れるものもあるまい。」

等といつて辜老は西洋文化をぼろ糞にいつて居る。けれども科學だの技術だのの輸入に對しては、少しも批難をせぬ。この思想は張之洞が採用したる西洋文化に對する態度なのである。今猶辜老はこの考を曾て變へたことがない。旨い物は食ふべし、便利なものは入るべし、されど道は變ふべからずといふにある。

道理で辜老はその好かないYMCAの風呂へは、よく行く、そうして體を洋風の湯ぶねに横へて、陶然として楽しんで居る。

凡そ世間の流行といふものは怪體なものである。流行の帽子を買つても翌年は、己にもう流行

遅れである。その次の年には馬鹿らしくつて着て歩けぬ程に遅れて居る。五年六年目にはもう骨董品に近い帽子となる。ところが十年も経つとその骨董が、最も斬新なる流行となる。その如くに流行とお金とは廻り持ちである。辜老のこの態度に於てもそうである。張之洞の時めける時は、辜老の西洋文化に對する態度が、最も妥當なる新らしい考方であつた。然るにその後猫も杓子も西洋かぶれとなり、辜老の辮髪は留英前同様に長くなり、時代遅れの骨董學者となつた。しかるに世移り星變つて今日では、この辜老の態度が再び世に持囃されさうになつて來た。當年の西洋かぶれの梁啓超は今は辜老の思想にまで近づき來つてゐる。貧乏金持まわり持、流行はぐる／＼廻りと決まつて居る。であるから、ちつと忍耐してあせらんで居たら、また辜老の時代が來ぬとも限らぬ。

五

梁啓超の話が出たが、梁啓超と辜鴻銘とはまるで違ふ。同日に論ぜられぬばかりか、同年に談ぜられぬ。二人の人間である。彼は賢く世を渡る人、これは世渡下手の人である。

梁啓超タゴールを迎へて、恰も支那文明の母胎が印度であるかの如くに吹聴して、遠來の客を

喜ばせた。タゴールを歓迎したばかりではない。ラッセルでもモンローでも誰でも來いである。來たら誰れでも迎へて賞めるのである。梁啓超が此の如くに誰とでも、調子を合はすことが能きるに反して、辜鴻銘は誰が來ても之を冷評して止まぬ。

ラピンドラナス・タゴールが來支すると聞いて、わたくし達は印度の辜鴻銘が來たと思つた。タゴールも英文が旨い、辜鴻銘も上手である。英語國民の間に知れてゐる點に於て同じである。その思想傾向も大層相似て居る。自國の文化を説いて、西洋文明の缺陷を説くところ餘程相似てる。果せる哉タゴールが來支して、辜鴻銘と會見するや、世人は老孔二聖に比して、彼等を對稱するのであつた。いふまでもなくタゴールが老子で、辜鴻銘は孔子に比せられたのである。老子も生れて白髪であつたといふから、支那に入つたのは老齡であつたであらう。耳が大きかつたといふから、域外緬甸の人だつたとも謂はれてゐる。緬甸のどこかには耳の大きい人種があるそうなる。タゴールが老子であると謂ふからには、差詰め孔子が辜子なのである。嗚ぞ肝膽相照らすことであらうと思つて、彼等の共鳴を祝福しやうと望んだ。にも拘らず辜鴻銘は、タゴールをひどく論難して、その哲學その主張その宗教を攻撃して止まなかつた。

「タゴール博士の文章は餘に、華やか過ぎる。文章が華やか過ぎる時には、反つて文章は力を失ひ……………」

といつて冷かした。

「東方文明の提唱といはるゝが、印度文明と支那文明はまるで違ふ。支那文明は古來學問的であつた。然るに之を思索的な瞑想的なものにした、のは印度文明である。支那文明を墮落せしめたものは印度文明である」

ともいつてゐる。

「タゴール博士は最終の究極は一つにあるといふ。その一つとは何か、Mr oneそのone先生がどんな者であるか見せて呉れる」

と野次つてゐる

「タゴールは直光劇場で、演説してゐる。あれでは梅蘭芳と同じではないか」と批評して居る。

「タゴール博士は支那等へ來ないで、印度で歌つてゐらつしやう」

忠告して居る。私達は豫想の全然裏切られたのに驚かさざるを得なかつた。定めし面白からう、共鳴するだらうと思つたに慘々であつた。そうかと言つて何等癢に觸つたことがあるのでも何でもない。只梁啓超が誰でも受け容れられる性質であるに反して、辜鴻銘は誰にでもちよつと、やつて見たい氣質なのである。わけて世に持囃され居るものには、反動的に出て見る人であるらしう。

六

辜鴻銘には令息二名あつて、可愛い孫娘もある。老博士は今はやもめ暮であるが、壯年の頃日本人、吉田貞子を妻としてゐた。令息はその方を實母として居る。お貞さんは大阪の娘で、香港で辜鴻銘を知つて之に嫁いだ。餘程賢い正しい婦人であつたと見えて、辜翁は今猶亡き女房を歎稱するに人の前を分別しない。

「貞吉田、彼女は日本のサムライの娘であつた。日本女は世界一である。世界に日本の婦人程の賢婦はない。」

これは辜翁が今猶語つて疑はぬ信念である。この婦人が辜鴻銘の日本觀を築き上げる爲めに、

若干の貢獻を爲したであらう。

「中夏の精神は夷狄に侵されて後、日本に去り、日本に中國文化の道德が遺つて居る。日本の武士道がそれである。露國の侵略を防いで、中國の滅亡を免れしめたのは日本である。日本をミリタリズムといふが、日本をミリタリズムたらしめたものは歐米ではないか」

辜博士の日本觀は實に、最もよく日本を理解したるものである。或る日彼が日本外史を耽讀せるを見て、

「今頃の世に日本外史でもありませんまい」

いふと彼は口角泡を飛ばせて

「日本外史の精神が、東亞を支持し、東方文明を維持したのではないか。明治維新は日本外史の精神の上に立てられて居る。中國の革命が反つて前情にも劣るといふはこの日本外史が支那に無いからである」

と氣焰を上げられた。西洋のレイディ達の居る前で、支那饅頭をむしやくしややる程に、街氣のある辜翁が日本人には極めて肌觸りがよい。かくまでに彼を日本の理解者たらしむるまでには、

西洋人の傲慢なる態度が、最も露骨であつたことを忘れてはならない。兎角魂までもバタ咲くにつて歸る歐米留學生に讀ませる爲めに彼はパンフレットを書いて、鋭く西洋文化を批判して居る。今日の支那に在つて斯くまでに日本を理解し、斯くまでに西洋文明を非難する人は珍らしい。而も日本人すらその議論を聞いて、感心するのみならず、願みて大に考へさせられるところ少くない。寧ろ攻撃され、非難されて忠告せられるよりも、讚美せられ激賞せられて、反つて自ら戒め慎むに至ることがある。盲目なる親日と非常識なる排日は我等に何等教ゆるところない。同時に辜鴻銘博士の如き日本觀は反つて、日本人を反省せしめ、その欺稱の言葉通りに在らむことを覺悟せしむる。

同時にお貞さんの凡ならざりしことを思ふ。辜博士の著述の至る所に、夫人の美德が散見できるではないか。少くも一人のよき日本人は、一人の日本の知己を作る。私達は亡き吉田夫人を偲んで止まない。

七

某といふ眞面目な陶淵明研究者がいつた。

「辜鴻銘の支那學はあやしいものですな。この間も僕のところへやつて来て、これは怎うい意味か、このところは怎う解釋すべきか……質しに來ましたよ。あれでは經學も、詩人もよく読んで居らんと見えますよ。」

わたくしは即坐に答へた。

「それ程に出來ぬとも思はなかつたが、あなたが驚きなさる程には驚きませんよ」

「世間はだいぶ買ひかぶつてゐるのでね」

「いや、僕は失望しませんよ」

辜鴻銘の國學の力量は右の短い會話で、略々見當がつくと思ふ。先達つてのこと、支那では今を時めく北大の教授に問ふて見た。

「タゴールの英語と辜鴻銘の英語と、どつちが立派でせう？」

「那不用説。泰戈爾的完全好」

「船文呢」

「英文……英文……英文還是好」

いつて居つた。辜博士の英語はタゴールに及ばないものと見える。然らば辜鴻銘のとりえは何處にある！。

辜鴻銘の支那學の力量は支那の文化、支那の思想を鳥瞰し理解し批判し、その眼目とするところ、眞髓その特徴、偉大卓越せるところを探究し、看破し摘手する爲めに甚だ充分である。西洋文化、思想との比較、對稱するに何等事缺かぬ彼が支那學者と立てるものではない限り、支那文化を理解し批判、西洋文化に比較對稱出來る丈けの實力さえあれば、それで何の不自由もない筈である。之れ以上は餘計な研究である筈である。

彼はタゴールの如くに英文の詩を賣つて、ノーベル賞金を得る程に、英文なり英語が旨くないかも知れぬ。けれども彼のグランマーは洋書を讀破し、西洋文化を鳥瞰し批判するには、充分である、充分であり過ぎる位である。

而も彼は支那思想を最も巧みに、英語に翻譯する。時としては漢字の示す思想よりも、より深遠にして含蓄ある英文となる。彼の持てる長所は其處にある。漢字で讀むよりも辜鴻銘の英文で讀む方が、孔子の新生命に觸れる氣がして、面白ろく物語が讀める。勿論彼はウイットに富める

學者である。皮肉に表現するところ最も痛快である。其八ツ當るところ眼中に人がない。傲慢なる歐米人、優越を感じる毛唐人も彼にかけたら二束三文である。それはタゴールの如きなめらかな、そうして華から英文は綴れぬかも知れぬ。また綴れても綴らぬかも知れぬ。けれどもそのウイットと富める、八ツ當る、痛快なる英文は到底天下一品たるを失はぬのである。

八

辜鴻銘先生を訪れて正午頃になると、あの椿樹胡同なる寄廬の門前に、一群の乞食がうよよとせる光景を見るであらう。皮肉なる老學者は一掴みの銅錢を掌にして、門に到り一人一個づゝを呉れてやる。そうしてあの喘息みたいな咳をしつゝ大陸飯店に出掛け行く。そこで自分は洋食にありつき、乞食達は一枚の銅錢を焼餅に代えて食するのである。うしろから眺ると辮髪の時代遅れの老頭であるが前より見ると、そのフォクの使ひ方、音なくすゝるスープの吸ひ方、實にリファインゼンツルマンである。

爲すこといふことが全く意想外である。人の意表に出ず。されば自ら *Crazy* と稱して居る。「氣狂の辜」と自稱するところから見ると、自らが歐米人に如何に映じ居るかゞ解つて居るのであ

る。日本語では彼は「浪人」と自稱してゐる。「われは浪人で足れり」と叫んで悔みない。*Crazy*——浪人そこに怎ういふ關係があるか知らないけれども、兎に角「浪人」を以て自任してゐる。浪人を氣狂ひと翻譯したつもりならば、日本の偉大なる、否偉大と自稱せる浪人達に異存があるに相違ない。彼はまた支那語では「蠻人」と自稱して居る。支那人には「我是蠻人」で行き、日本人には「われは浪人なり」で、歐米人には *I am a crazy man* で通らうとする。

蠻人——浪人——*Crazy man* この二つの言葉に何等か相通するところがあるのかも知れぬ。こゝまで書き來つてわたくしは、思はず辜老が「浪人」いふ日本語を餘に皮肉に使ひ過ぎてゐることに氣附かざるを得ぬ。

以上述ぶるところに依つて、辜鴻銘を充分に紹介し得たと思ふ。その興味ある性格が紙面に躍如として、描かれてゐないならば、それは辜博士に對して甚だ相濟まぬわけである。

柯 劭 忞

印刷屋泣かせではあらが、もう一人柯劭忞博士を紹介するとしやう。劭といふ字、忞の字共に日本では稀にも見ない漢字である。誠にお氣毒ではあるが、こういふ漢字を刻つて頂かねばならぬ。業々活字を拵えてまで、柯劭忞博士を紹介せねばならぬといふは、彼が日本から博士の學位を贈られたる最初の支那人、否唯一の支那人であるからでもあるが、記者は猶その外に、重要な理由を有する。

記者に錢といふ支那人の友がある。彼は競馬場の設立に奔走して見たり、電燈装置用品の公司を創辦したり、雑多の事業に手を出して見たのであるが、事々に失敗して何時も貧乏してゐた。貧乏せるが故に人々は彼を遇するに、極めて冷酷であつた。けれども何人も足一度彼の書齋に入る時に、思はず襟を正して心から敬意を表せざるを得ない。彼の庫裡には所謂萬卷の書物が推積されてゐる。そうして彼が競馬場設立に挫折せる朝も、電燈會社が執達吏に襲はれた夕も、彼は

讀書を忘れないのである。錢君は自分は「支那歷朝の滅亡史」を究めて居ると稱してゐた。自分の事業の失敗せる遠因、近因を攻究する暇がなくなつても、歷朝の滅亡史を編まうといふのであるから、滑稽ではあるが、兎も角も錢君は十年一日の如くやつて居る。歷朝の滅亡史を研究するといつた所で、滅亡に關することだけを研究するわけに行かぬ。興廢はいつも關連して居る。一朝の滅亡は一朝の興隆に原く。されば興亡共に攻究せねばならぬそうである。歴史だけを繙いたつて真相に觸れぬ。詩文、文藝までも讀む必要がある。故に滅亡史を攻究し始めたのであるが、今では經書史書何でもかんでも研究するに至つたと稱してゐる。かくて錢君の研究は半生を投じて足らず、一生の仕事となつたそうである。

錢君の如き人間は今猶、支那に少くないのである。さらには言はぬが、珍らしく何も無い、支那人の書物を集積する趣味位、普遍的なものはないのである。西洋人が郵便切手の古手を集める趣味がある如く、支那人に書物を集める趣味がある。一萬卷位の書物はそうさがし廻はらなくつても、そんぢよそこらに轉がつて居る。この集書慾と研究趣味が、時々非常な學者を出だす。錢君の如き人々が幾百幾千居つて、過々壽命も長續きし出版の費用も手に入る時に、新元史が編

纂せられるのである。

それで柯劭忞博士を、活字を刻つてまで紹介する所以は、この人が支那に在る代表的な或る型であるからである。恂ふいふ型もあると謂ふところが示して見たかつたのである。

二

柯劭忞、字は鳳孫、山東膠縣の人、前清の進士にして、湖北提學使學部署右參議、典禮院學士となり民國三年五月、參政院參政、兼約法會議々員を命ぜられた。彼が民國の約法會議々員を命ぜられても、辮髪を切り落さない。辮髪を切り惜む位であるから、約法會議には顔出さない。顔出さんでも頭出して、辮髪振を振廻はしたら嘸ぞ面白ろいのであるが、約法會議等は振向きもせないので、一意専心元代歴史の研究を取懸つた。

一意専心研究に取懸つたと謂ふと、目凹ぼみ肉を削る程に勉強するやうであるが、支那人の勉強は日本人の如くあせつたものではない。依然として持久的に孜々として勉強する。勉強した丈けで何等發表するまでに至らず、世に問ふに至らずして逝く人も少くない。柯劭忞博士の如きは世に出でたる、認められたる、謂はゞ幸運なる人であるといつてよい。

博士は今年既に古稀であるにも拘らず、意氣壯者を凌いで、午後三時までは客に接せず讀書三昧である。新元史が大總統令を以て、廿四史の裡に入れられたる後も、それにて研究を中止せしめずして、今は領域史の研究に着手して居る。今關博士の談に依れば彼は決して元史研究の専門家でなく、新元史は彼の學問の一高峰に過ぎないそうである。新元史には結論ばかりあつて、資料の考證、出所が少しも書いてない。一見獨斷の連続であるかの如くに見ゆるが、博士の手許には元史考とも稱すべきものが、嚴然として存在して居る、而もその元史考を出版しやうとも考へない。歐米の學者ならば雑多の資料、文献を引照し、考證し、拉列して然る後に結論を書き、取捨を明にしてかゝる。然るに柯劭忞は「俺を信用しろ」といふ態度で書いて居る。研究のメソッドも支那式、發表の形式も支那式、實に支那の典型的學究である。

讀者は想到して見るがよい。辮髪の老學者が來る日も來る日も、變りなく漁書し、讀書し行く生活を。全く支那らしいではないか。

三

柯劭忞の如きタイプの學者と、梁啓超の如き學者と二種の支那人がある。梁啓超の如きは普通

の學究ではない。學説を建つれば必らず、それを手腕に働かせ、國政を料理しやうと考へる。書齋より街頭に飛出すところに生命の躍動を感じる。康有爲、章炳麟皆そうである。古いところでは孔夫子始めその傾向を有する。殆んど傳統的典型であるといつてよ。

この梁啓超の型とはまた丸で別なる學者型が、柯劭忞に依つて最もよく代表されて居る。相當なところで官界を切上げて、漁書と學院に隱遁する。若干やつて見ねば思ひ切れない。最初から學究生活に這入るには、餘に俗慾があり過ぎる。そこで前半生は官界を游泳して見る。藻掻いて見る。而も後半生に入つて自らの使命の有する所に氣付き、これを仕上げねば死ぬと自覺し、これを以て後世に遺す自己の足跡となさう。これを成遂ぐる爲めに自分は生れて來たのである。等と自覺するに至つて、漸く大著述に取懸る。これもまた支那學者の一つの型である。日本の徳富蘇峰の如きはその支那型に學べるものである。日本にもこの型に類する漢學者が少くない。これ等の人々は最初から學究に入らない。屹度等かの衝動、失意、變化に依つて漸く天命の那邊にあるかを自覺する様である。

今や柯劭忞は日支文化事業の名譽ある位置に据ゑられむと噂されて居る。彼とても原々政治家であるから、必らず大に手腕するであらうではないか。

康有爲

一

日本で流行る大抵のことは、支那にも流行り出すに決まつてゐる。わけて思想の推移はあるものは二三年、あるものは二三箇月遅れて、日本からこの國に傳はつて來るやうだ。勞働運動の如きは支那の様な勞働者の多い工業の少ない國ではまだく／＼起るまいと思つてゐたが、案外にも二三年だけ遅れてはじまつた。要求と必要のあるなしに拘はらず、日本の風潮が支那に吹き流れる。高等師範昇格運動の如きすら、支那に感染して遂に、「師大」といふことになつて仕舞うた。日本ではまだ成功しない裡に、支那の方では奏功して了ふ。それは日本ではさういふ運動が起つても、日本は己に出來上つた國丈けに、功を奏すまでに一奮闘を要する。舊い殻を破る丈けの間がかゝる。支那の方はまだ出來上つて居らぬ丈けに、新しいこと、よいこととなると、造作なく採用變更して了ふ。日本よりも遅れて運動が開始されたものでも、日本よりお先へ實施實行されて仕舞うのである。師範大學もその一つだ。

先年「過激思想取締法案」といふものが、編出されて日本では可なり問題になつた。ところがそれを直譯したやうな「過激思想法案」なるものが、昨秋支那議會に持出された。蔡元培、胡適達はわが身危なしとあつて、躍氣になつて反對運動を試みたのであるが、何のことはない、支那では去冬遂に通過して仕舞つた。

で、支那には思想取締の法律があるわけだ。危険な思想を抱いて居ると、引ばられる譯なのである。かく言へば讀者諸君は何んといふ不自由な國だらうと思召すでせうが、それでゐて支那は全く自由なのである。胡適はいつた。

——支那の自由は何處から來た。

壓迫するだけの力ある政府がないから、自由なのではあるまいか、自由でなくつて放置されてるのである——

何でもいふ。自由なのが何よりのことである。自由であればそれでいふ。支那は本當に自由である。日本の人達が想像も着かぬ程に。假令胡適さんのいふやうに、力ある政治があつたなら、果して思想を取締ることができようか。書物を發賣禁止することができようか。老壯の書を、墨

翟の學を、それから雜多の書物を、支那から燒奪ふことが出来るであらうか。秦の始皇と雖も孔家の墻に立入つてまで、書を檢出することはできなかつた。支那には古い頃から無政府思想もあつた、共產思想もあつた、政府に餘程の力があらうとも、支那に在つて思想を取締ることは容易な業ではあるまい。

またさうする必要もないのである。支那人はもう過激思想の免疫になつてゐる。外から來る過激思想を防いでも、内に古來の危険思想があるのだもの、今更ら思想取締でもあるまい。

兎も角も支那は自由だ。北大教授陶孟和が *China is the Paradise in the World* といふた。さうかも知れぬ。物價は安い、煙草は旨い、雨は降らず、思想は自由本當にさうだ、之れで南京蟲が居なかつたらなあ……と思はざるを得ぬ。片上伸教授が「東洋唯一の自由大學、北京大學に於て、講演することを得たるは自分の名譽とするところ」と述べたるは、お世辭でも何でも無い。

さてかういふ自由の國のことであるから、思想過激の人物も實に多いのである。國は古い、そして廣いのであるから、一々過激思想を研め、ひとりびとり紹介しようものなら、全く果があるまい。でなる可く頭角をあらはした、さうして一癖ある人物を鎗玉に上げることにする。勿論現

代の人物のみに制限したい。社會主義者としての孔子、無政府主義者としての老子、などといつて書出した日には切は無いから、「使徒達が皆持物を一つにせり」いふ一句から基督を共產主義者にするやうな傳で、孔子も老子も過激派に出世せしむるやうなことは、性來好かんのであるから、昔のことは書かぬことにする。

現代支那に生ける過激思想家を、三種に類別することを便宜とする。大同主義、社會主義、無政府主義、この三つの主義者がそれだ。先づ大同思想から、ぼつ／＼紹介しやう。

二

先づ康有爲の大同論から述べるのが順序である。康有爲、字は廣夏、長素と號す、廣東南海の人である。自ら伯尼と稱してゐる。孔丘を仲尼といから、自ら孔子の兄たるの心算であるのか、門弟梁啓超の言を以てせば『理想高く、熱誠燃ゆる、膽氣備はれる實に一世に比を見ぬ人物』である相な。

康有爲は今文學の集成者であつて、經書の造詣至つて深く、頗る獨創的思索に富んで居る。その最初の著は新學僞經考である。この書に——秦の焚書は六經に及ばなかつた、漢十四博士の傳

ふる所悉く孔丘の時に用ゐたるものである。古文なるものは皆劉歆の僞作であつて、王莽を輔けて漢を篡はむ爲には、春秋の微言大義を湮滅せしむる必要があつた。僞作の迹を彌縫せむ爲めに、劉歆は校中秘書でありし時、一切の古書を塵亂せしめた——と述べて居る。

第二の著者は『孔子改制考』である、裡に——春秋は孔丘の改制創作の書であつて、一種の社會革命を意味する。『通三統』とあるは夏商周三代、時代々々に依つて革まり得べきを言ひ『張三世』とあるは擾亂の世、升平の世、太平の世と進展し行くといふのである。孔丘は常に古に託して教へたのである。孔丘は上百世を掩ひて下百世を掩ふ。故に永遠より永遠に亘るまで孔丘を教主として崇拜することが能きる——と書いて居る。

康有爲の著は甚だ多い、春秋童氏傳註、禮運篇註、孟子微、論語新註、その他數十種の多きに上つて居る、其裡『大同書』は最も痛快なる著述である。康有爲の大同書出でて、始めて、今文運動も行くべき所に辿り着いたものゝ如くである、清朝雜多の考證學者が、經書を研究の對照とした、その果てがつまり康有爲の如き經書を己が欲する儘に、破つたり結つたり、建てたり壊したりすることになるのである。『大同書』は銀四十仙を投ずれば購ひ得る、見たところ小つぽけな

薄べらな、安ッぽい本だが内容は頗る振つてゐる。

大同書には『有國家の苦』『有帝王の苦』などとなかく考へた苦痛が紹介してある、先づ康有爲は春秋『三世』の義を以て、禮運を説き升平の世を小康、太平の世を大同と稱した、大同書の卷末には『大同始基之據亂世』『大同濟行之升平世』『大同成就之太平世』の三世を表に書いて、具體的に説明してある、その表だけ覗いても一寸興味ある詳細を知らむと欲する程のものは、四十仙出して此本を讀むべし。

康有爲は右の痛快なる議論を、捻り出す爲めにテキストを禮運篇に採つてゐる。禮運篇の『大道の行はる天下を公物とし、賢と能とを選び、親睦をはかる爲に、人は親を親とせず、子を子とせず、凡て平等にして老は歸する所あらしめ、壯は用ゐる所あらしめ、幼にして長する所あらしめ、鰥寡孤獨癡疾皆養ふ所あらしむ、男に分有り、女に歸あり、貨は其地に乘じらるるを惡むも必ずしも諸を已に藏せず力はそれ身に出でざるを惡むも必ずしも已れの爲めにせず、是故に謀は閉ぢて興らず、盜竊亂賊は作さず、戸を外して閉ぢず、これを大同と謂ふ』とある。康有爲は之を楯に孔丘が民治主義、國際主義、國際聯合主義、兒童公育主義、老病保險主義、共產主義、勞

働主義を提唱したるものと爲してゐる。

康有爲は非當な學者であるだけに、立論を中々上手にやつてゐる。或は新しがりの基督教徒の如きは之を孔教新神學と稱して嗤ふであらうが、何あに基督教徒の中にだつて、使徒行傳の『使徒は是持物を同じうせり』とか持物を隠したるサツピラが罰せられた、あの一句、兩節から耶穌を社會主義であるかの如く、祭り上げると同然であることを思ふべきである。

『大同書』を購うて息も吐かずに一氣に讀んで了うた後に、之は實に面白い恠ういふ議論を組立てる學者は怎んな人か知らあ——と思つて康有爲の生涯を索ぐつて見ると、全くのことがつかりせざるを得ぬ、自分ばかりがつかりしてゐても始まらぬから、讀書にもがつかりして貰ふべく、今更乍ら彼の傳記を書いて見る。

彼は少壯の頃廣東に私學『萬木草堂』といふ塾を設け人才を養つて居つた。門に入るものに梁啓超、陳千秋、徐勤、陳煥章などあつて、一時天下の視聽を惹いてゐた。一八九八年光緒帝と密に謀つて、大改革を企て、袁世凱に裏切られて、ひどい目に會ひ日本に亡命し多年茅海の畔に閑居してゐた。民國成立して袁總統に敬意を表せられ孔教の復活に奔走した。

民主の新時代に孔教を何う生かし行くべきか、民主は孔教に悖るといふので、民主を排すべきか、それとも孔教は民主に合はぬと稱して、孔教を廢すべきか、何とかして孔教を建直し、民主時代に相應しいものと出来ぬであらうか。河豚は食ひたし命は惜しし。民主は歓迎、孔教も棄て難しといふチレマンに陥つた。何といつても聖教の國である。これ位の煩悶はあつて然るべきだ。

この煩悶に丁度よい逃道を與へたものは、康有爲の大同孔教であつた。大同論ならば無論『民主』に悖る所が、社會主義でも來い、共產制度でも好し、全く何でも來いである、そこで『孔教會』といふのを拵へて、本山を北京西城に築き支那國教にまで仕立てむと欲したのである。孔教會の牛耳は門弟陳煥章が握り『尊孔案』は國憲法起草委員に提出され、憲法を以て孔教を擁護しようといふと計畫した。

サアウエリントン・クウ博士事願維鈞がヴェルサイユの國際會議の折だつたか、小さいパンフレットを配つて國際主義は孔教の精神だつたなどと宣傳したのも大同孔教をいつたのにほかならまい。また北京孔子廟に『道合同』といふ小さくない額が上つてゐる。黎元洪が書いたのである。民主國の大總統が書くのであるから、大同孔教を主張せねば跋が合はぬとも思つたのであらう。

う。兎も角孔教革命の名譽は康有爲に與へて然るべきであらう。大同孔教の出現は、民國初年に於ける『支那思想界の新象』であつたことも確かだ。尤も今日では稍々舊象ではあるが。

康有爲の孔教改革はあれで好かつた。思想を革新すると同時に、孔教宣傳方法も一變すれば一層好かつた。然るに康有爲は尊孔案を提出して、孔教を民主國中の官教たらしめむと欲した。憲法に定めて尊孔を國民に強ひようと企てた。孔教を御用教たらしめむと望むだ。漢の武帝以來孔教は帝王に使用せられて、國民に忠義を強請する『工具』となつてゐた。革命して民主國となるや、今度は孔教を燒直して、國民に共和を鼓吹する『工具』となさむとするのである。隨分蟲の好いことでありはする。もう御用教の時代でもあるまいに大同孔教ともあらうものが、尊孔案を提出して、世のもの嗤ひになつたのである。おまけに陳獨秀に喰つて懸られて、反つて反孔運動を捲き起した。今日から見れば、康有爲が籤をついて蛇を出し、反孔思想を支那中に漲らしたやうな形になつてゐる。

民國六年七月張勳復辟を企つるや、康有爲は幼帝の爲めに、勅諭を認め『朕三度天を仰いで哭けり』などとやつた。さなくとも康有爲の大同孔教に、疑懼の念を抱ける折柄、このことあつて

以來、孔教會なるものも頓と振はなくなつた。過激思想家康有爲は、保守思想家康有爲で、最左翼と最大右、何が何だか解らぬ、時折支那に二人の康有爲があるのでないか知らんと思はせる程だ。『小康の世』に體を住ませて、『大同の世』を考想する學者なのである。——これ丈け述べれば多分讀者諸君もがっかりせられるであらう。

が、さう無暗にくさす程のことではない、『大同』は彼の理想であつて、『まだ大同の世は到來して居らぬ、今は小康の世である。現支那は小康の世だ、虚君平和の時代である』と信じて居るのださうであるから、必ずしも嘯ふべきではあるまい。嘯はないが、『理想に奮進する意氣はないか』と言へば、無論彼とても一言の抗議あり得まい。

梁 啓 超

梁啓超を知らぬものはあるまい。誰れでも知つとるものを、今更ら紹介する馬鹿があるものか、と言切つて仕舞へば無論それまでである。が、人は往々にして知つてゐる人物をよく知らぬことがある。

況んや近頃對支文化事業と共に噂は彼の身邊に徘徊して居る。この際彼を研究することは、必ずしも無駄骨ではあるまい。

「批評と紹介とは違ふ。紹介は只その要點と好い處を摘出せばよいのであるが、批評は單にそれだけでは足らぬ……」これは梁啓超が胡適の中國哲學史綱批評の緒言である。然らば本文は梁啓超の思想及人物の紹介か、それも批評か。無論前者であつて後者に非らざることを豫め斷つて置く。

一、彼の小傳

梁啓超は卓如とも任公とも稱する。任公の方がよりよく知られてゐる。廣東の新會の人であるひと頃地名を以て人を呼ぶことがはやつた。段合肥だの康南海だのと謂つたものである。その流儀で彼のことを梁新爲と稱する。尤も今でも好んで地名を用ゐる人もあることはあるが數年來、若いチャイニースの仲間では號だの地名だので人名を呼ぶことをまぎらほしいこととなして努めて避けて居るやうである彼も大抵の場合梁啓超と本名を書いてゐる。

彼の郷里は廣東、南海の江口なる、「熊子」といふ小島である。彼の祖先は明末この島に移り住んだと謂はれて居る。彼の祖交は維清字鏡泉祖母は黎氏、父は寶瑛字蓮澗、母は趙氏である。祖父は郡成員を爲してゐて、父は郷里で教員をしてゐた。

梁啓超は明治癸酉正月二十六日に生れた。彼の祖父が彼が四五歳の時に己に、四書五經を讀ませ六歳の時中國略史五經を卒業した。八歳で文を作り九歳に千言を綴つた。十二歳で學院の試験に應じて博士に補せられた父から漢書一姚古文辭纂を課せられて喜んで之を讀んだ十三歳で段王の訓詁學を好み。十五歳の年前總督阮元の立てた所の省會學海堂を卒業し訓詁學の外天地に學なしと思つた。十七歳郷生に擧げられ十八歳李尙書に従つて北京に入り、李公の妹を配せられ約婚

した。歸途上海で西洋の書物を澤山見たが無力購ひ得なかつた。其年の秋、康有爲の門弟となり陳通甫と共に西學の梗概陸王心學を學んだ。十九歳の時康有爲は廣東省城長興里に萬木草堂を設けて學を講じた。「大同學」、「公理學」を授けられた。草堂に居ること三年、京師に入つて李氏と結婚した。

二十二歳北京に在つて名士と往來時局を憤慨した。越えて翌年康有爲は時局を憂へて公車上書を奉つた。三月上海の新聞社に聘せられ七月時務報を出して出版を禁ぜられた。後湖南に聘せられ、時務學堂を建て教育に従事し大に革命思想を鼓吹した。二十六歳の春康有爲等と共に所謂戊戌の政變を策したが。袁世凱の裏切の爲に暴露して康有爲は英人に仗つて危険を逃れ梁啓超は日本の軍艦大島に乗つて日本に亡命した。九月横濱で清議報を出し、同地に大同學校を建設した。京濱の間に蟄居して所謂亡命客の生活に在つた。その間新民叢報、政論、國風報に依つて盛に意見を發表した。それ等を輯めたものが飲氷室文集類編である。

後北京に歸つて袁世凱に投じて總統府顧問となり、進歩黨を組織し、天津に庸言といふ雜誌を出した。民國二年熊希齡内閣の司法總長になり、續いて幣制局總裁となつた。同年十二月に辭職

した。

日獨戦争の後に排日論を猛烈に書いた。四年袁世凱が帝制を唱するや大に反對して天津に逃げ、蔡鍔と共に第三革命を西南に主唱した。

段祺瑞を聲援して歐洲戦争に參戦せしめ、張勳の復辟に反對して、財務總長、鹽務督辦を兼ねたこともある。民國三年中國參政となり、四年一月少卿中卿銜、なか／＼羽振をきかせたものである。

西原借款その他で、或種親日派の三四政治家が大層、儲けた時に彼は猛然として、民國八年排日運動の煽動隠謀者となつたと謂はれてゐる。多分それは謠言であると思ふが、彼は歐米漫遊に出懸けた。

歸つてこの數年間は、南海、南京、清華、北京の諸大學に講演し廻つてゐる。無論彼の専門は支那學である。一方講演に飛廻ると共に、他方せつせと著述を發表して居る。梁任公近著第一輯は既に、上中下の三卷に上梓せられてゐる。

二、著書（其一）

飲氷室文集類編は彼が三十歳前の論文を集めたものである。上下兩卷一千七百頁からの大冊である。三十歳前といふと一寸注意引くやうであるが、支那では珍しいことではない、現に「胡適文存」四卷、梁漱溟「三十年前文集」、共に三十歳前の論文集である。

飲氷室文集は東京で上梓せられたもので、梁啓超は其叙文を東海道汽車中で作つてゐる。いふまでもなく日本亡命中の出版である。欺かぬもので亡命者らしい思想、支那人としてはめずらしい感情が盛られて居る。知らぬものが讀んだら、日本人の手に成つたものと爲すかも知れん書中各所に「論支那獨立之實力……」等と、支那々と世界的な國名を用ひて居る。嘗に辭句文章が變つてゐるのみならず、思想言論共に、支那人のものとして頗る珍らしい。

上卷は「變法通議」から始つてゐる。約百頁に亘る大論文であるこの論文を數言を以て約すれば「世界の趨勢に鑑みて、舊制を廢して、新法を用ひよ。新法を用ひるには先づ人才を養成せねばならぬ、人才を養成するには科學の制を廢して、學校を建設すべきである、師範の養成、小學、女學校の建設の要を詳しく述べてゐる。『また滿漢の差別を打破する爲にも法を變すべきである。』彼は變法の後保守の大臣を安置するの法を附加してゐる改制の氣運を朝廷に捲起す爲めに

も、また思附きとしても悪くはない。「要するに法は天下の公器也、變は天下の公理也、大地既に通ず、萬國蒸蒸、日は上に趨き、大勢迫る」と稱して、自尊事大の支那守舊者に訴へて眞理を求めむことを促して居る。「法を變へるの本は人才を育つるにあり、人才の興るは學校を開くにあり、學校の立は科擧を變ずるに在り」と述べてゐる。改制變法の支那大改造を提唱するに當り、「改造は教育より」と斷じたわけである。ジョンデユウイ、ベルトラントラツセルの見る所と全然同じである。而かも二十數年前に於て、「支那改造を教育より」すべきを、この變法通議に於て、愛國の熱誠溢るゝ美文を以て、縷々數千言を用ひて述べ盡してゐる。

只、論文變法通議は今より見て、おかしい程に世の論難攻駁を氣にしてゐる。當時既に末運に在つたと雖未だ清朝の天下であるまた自尊事大思想の支那に在つて、歐化を説くのであるから、彼が世難に關心せる、また無理もないことである。道理で「難者或曰」と一つひとつ辯明して居る。

次に飲氷室文集に「新民說」といふ、これまた、大なる文章である。一百三十頁に亘つてゐる。新民說の内容を簡単に紹介するならば、支那今日の「當務の急は内治と外交である。」内治を考へて

「今朝野憂國の士は往々歎息想望して賢君良相を安くに得むや」といふが、「曠世の名將と雖惰兵を以てしては黑蠻にも敵し得ない。」「各自新しくならむことを四萬萬の國民に望む」「外交に關しては十六世紀以來歐洲の發達せるは皆 Nationalism——彼は横文字で言つてゐる。——民族主義に依る。同種族同言語同宗教同習俗の人々が同胞相務めて獨立自治の組織をなした。然るに十九世紀に至つて進んで National Imperialism 民族帝國主義を取り、國民の實力を外に溢れしむるの政策を取り、弱は失ひ強は侵すに至つた。これは昔のアレキサンダー大帝又は成吉思汗。ナポレオンの雄圖、遠略大地蹂躪とはたちが違ふ。一人の雄心に由りしものに非らずして、民族の力が漲つたものである。故に吾民族全體の能力を以て之を抵制せねばならぬ。されば民族主義の一策を先づ中國に行ひ國力を速に充實せねばならぬ。

然らば新民とは如何なるものかと言ふに、保守を廢して進取の主義を採り道德、思想、學術風俗を世界に立ち得るものと爲すのである。公德を重んじ自由を貴び自治、獨立の精神を抱かねばならぬ。偏狹なる國家思想を棄て、民權自治の國家を建設し、國民は權利思想を強め、而も義務觀念を忘却せず、尙武の精神を作興し、勞資兩者の利益を平等ならしめねばならぬ。

其の他新民たるものは、早婚その他の悪習慣を脱し、迷信を打破し、社會風俗を改良せねばならぬ。無論新民説は今日より言へば新しくはない。けれども當時としては必らず思想界の驚異であり、且つ急先鋒であつたに相違ない。

「不自由毋寧死斯語也」といつてゐる。政治の自由、宗教の自由、民族の自由、生計の自由、勿論外來思想その儘の生々しいものではあるが、それにしても痛快である。全くのこと飲氷室文集が民國八年の春頃印刷されて居つたら、五四運動は「新民運動」と呼ばれたかも知れぬ。

新民説と變法通議は飲氷室文集上巻の最も代表的な文章であるらしいが、外にも「中國積弱由於防弊」論、愛國論、少年中國說論近世國民競争之大勢及中國之前途等數十の論文が集められてゐる。飲氷室文集下巻には「中國學術思想變遷之大勢」が凡そ一百頁に亘つて論ぜられて居る。「我中華は戰國の時に南北の兩文明が初めて相接觸して古代の學術思想が全盛に達した。隋唐に及んで印度に相接觸して中世學術の大光明を放つた。今則ち全球比隣、東西文明が接觸結婚すべき時代に際會した。我等同胞は燈を張り酒を置いて車を門に迎へ、三揖して親迎の大典を行ふべきである。西方の美人は必ず我家の馨兒に配し能ふ」といふて居る。この支那思想變遷史の目的

は歐化吸收の提唱に外ならない。その他百十餘の論文が地理、歴史、文學、政治、各種の問題に亘つて論ぜられて居る。卷末に彼の小説、脚本等、が集められてゐる。「新中國未來記」といふ小説がある。政治小説と銘打つてあるが、八分妄想一分警世餘すところは出駄羅目である。第一豫備時代、第二分治時代、第三統一時代、第四殖産時代、第五外競時代、第六雄飛時代の六時代に來るべき一世紀の支那を豫言してゐる第二分治時代には支那南方各省は自治を稱するが、國會開會と共に止むとある。第三統一時代には第一次大統領として羅在田君が當選することになつてゐる。それから殖産興業内治宜ろしきを得て、第五の外競時代に中俄戦争があつて亞細亞各國が同盟する事になる。第六雄飛時代に支那はホンガリイに世界平和大會を開いて今日に及ぶと書いてある薩張當つて居らぬ。しかしこの小説を読んで感ずることは、彼の内憂外患の當時に在つて、毫も支那の前途を悲觀して居らぬことである。一體飲氷室上下兩卷を通じて漲つて居る思想は(一)愛國的熱誠(二)新文明吸收(三)支那不亡の三方面である。

「今有巨厦、更歷千歲、互慢毀壞、榱棟崗折、非不楞然大也。雨風碎集、則傾圮必矣。而室中之人、猶然酣嬉鼾臥、漠然無所聞見、或則觀其危險、惟知痛哭束手待斃、不思極救……」今にも潰

れむとする大きな家の中に眠れる祖國の國民を想ふて、彼はちれつたくつて溜らぬ様である。「西人之論中國者輒曰彼其人無愛國之性質故其勢散渙。」「哀客正告全國之人曰我支那人非愛國之性質也」歐人曰支那人無愛國之性質我四萬々同胞國民其重念此言哉雪此言哉」その他彼の文章到處に愛國心が動いて居る。曾て間島問題が日支兩國に喧しかつた頃、宋教仁は東京帝國圖書館よりあらゆる文獻を漁つて、間島が支那の領地にして、朝鮮に屬せざる證據を蒐集し歸つた。時に日本の或る者はその寫しを千金に買はむと求めた、が宋教仁は莞爾として諾せなかつた。更に一萬圓を出してもよいと申込んだ彼が猶も首を左右に振つて肯んぜなかつた。遂に十萬を以てしても邦人某をして購ひ得ざらしめたと傳はつて居る。そうして宋教仁は自分の仇敵なりし清朝政府に送附して、遂に最後の勝利を外交に贏ち得せしめたと支那革命外史は物語つてゐる。知らず梁啓超が飲氷室文集中に盛れる愛國的熱誠を、行爲に實行したことがあるかなきかを。

三、今文運動

今文——時文、古文——漢文ごつちやに考へられ易いから今日もまたもう一度、説明して置くとせう。「秦の始皇は焚書を執行して六經を燒いて仕舞た。漢の興ると共に儒者は漸く學を教授す

るを得たが、色々學派が出來た。易に施讐孟喜梁丘賀の三家同じく田何に出ず書には歐陽生大夏侯勝、小夏侯建の三家同じく伏勝に出ず魯詩には齊、魯、韓の三家、魯詩は申公、齊詩は轅固韓詩は韓嬰に出ず。春秋は公羊傳、嚴彭祖、顏安樂の兩家ありて同じく胡毋生董仲舒に出ず。禮は儀禮、大戴德小戴聖、慶普の三家同じく高堂生に出ず。これら十四家は皆漢の武帝の時學官に立てられて博士となつた。これらの寫本は何れも秦漢に通用したる篆書を以て書かれあつた。この篆書を今文と謂ふのである。然るに西漢の末に到つて所謂古文經傳が出來た。易では費氏、東萊の費直の傳ふる所と稱する。書では孔氏孔子の裔孔安國が孔宅の壁の中から得たものであると謂ふ。詩では毛氏、河間獻王博士毛公の傳ふる所、春秋は左氏傳、張蒼が曾て教授したものと傳ふる。禮にな逸禮三十九篇、魯共王が孔宅を壞して得たといふ。周官は河間獻王の得たところと傳はる。此等の經傳は皆科斗古文字で書かれてあつたから古文と通例いはれてゐる。劉歆は夙にこの古文を信用して一派の學を稱したが兩漢の經學者は多くは之を信じなかつた。東漢の末に至つて服虔、鄭玄が古文を尊重した爲に古文の獨舞臺となつた、今文學の大家何休は左氏膏肓穀梁發疾公羊墨守を著し、古文の大家鄭玄は其膏肓起發疾發墨守を著して之を反駁した。鄭玄は該博

なる學を以て偏く群經を注し其後晋の王肅は之を敷衍したるが爲に今文學は遂に衰へた。その後古兩文の争もなかつたのであるが、清代に入つて、閻若璩が偽古尙書を批評しそれが王肅の偽作であることが證せられてより、再び今古兩文の争が復興し始めた。

今文學の中心は公羊學にある二千年の間春秋公羊得が顧みられなかつたのであるが、孔廣森は始めて公羊通義を著し莊存與は春秋正辭を著し、其後輩劉逢諤は春秋公羊經傳何氏釋例を著した龔自珍は今文を好んで今文學の開拓をなした。この後今文を好む學者漸く多きを加ふに至つたが、四川に廖平なるものがあつて、學を王闈運に承け四益館叢書十數種を著した。南海の人康有爲は廖に暗示を受けて、新學僞經考を著し、古文を以て劉歆の僞作であると稱し、秦の焚書は六經に及ばなかつたもので漢十四博士の傳ふる所は皆孔門の完本であるとなした。康有爲は孔子政制考、大同書を著して、孔教改革を宣言した。梁啓超の飲氷室文集には支那宗教改革といふ題目の下に紹介せられて居る。孔丘の教を二派に分てば

孔教 大同教派 有子——子游
子張——田子方——莊子

小康教派 曾子……子思……子思門弟……孟子
仲弓——荀子

小康派の荀子の學が二千年間行はれた。「最に由つて之を視る二千年政治は既に皆荀子に出でた而して所謂學術は漢學宋學兩大派に外ならず、其實皆荀子に出で。然れば二千年來荀學世界を爲し能ふも孔子世界と之を爲し能はざりき抑も小康の教は詩書禮樂にあり而して大同の教は易春秋にあり、詩書禮樂は孔子纂述の書にして實は舊教に因るもの孔子の意に非る也」と書いてゐる。

今文學にサゼツションを與へたものが井研の廖平ならば、構想したるが南海の康有爲である而して宣傳者は實に新會の梁啓超であらねばならぬ。康有爲は論語註を著して論語を曾子の學となして、小康の孔教を傳ふるものとなせるが、梁啓超は孔丘の後は孟軻、荀卿の兩派に依つて代表せられ、孟子は曾子より荀、子は仲弓より教を受け、彼は大同孔教を、これは小康孔教を傳へたと爲してゐる。

また康有爲は禮運註を著して「大道の行はるや天下を公物と視、賢者を選び……云々」を牽強附會して大同説を立てたれども、梁啓超は孟子を用ひて大同教を唱道してゐる。彼は今古兩文何

れも、二千年間荀子の肘下に盤旋するものであつた。孟學は衰へて荀學のみ榮え、「獨夫」「民賊」を誅責す。とかつ善く戰ふものは上刑に服す」とか「田を授け産を制す」とかいふ大同の意を含むものは、覇者帝王等に喜ばれず、御用學者のよく唱道する所でなかつた。梁啓超は孟子を擲出して、大同民本孔教を宣傳して止まなかつた。彼はまた墨翟を好み兼愛、非攻の説を奉じた。

湖南の時務學堂に於ては公羊孟子を教へ李炳寰、蔡鏗の高才を出し、日本に亡命して後も保教會を組織して、大同孔教を主張宣傳するを止めなかつた。かくて今文運動は、文字の價值から出發して既に訓詁學に入り、訓詁學を通り越して、孔教改革となり、大同運動とまで進んだ而も梁啓超はその最も熱心なるエバンゼリストであつた。新孔教の役割を定めるならば指詰め廖平がルナン康有爲がルーテル梁啓超がウエスレー、陳煥章が牧師格である。

その後康有爲は孔教を國教たらしめむと運動し復辟を主唱したが、梁啓超は國教運動にも復辟運動にも敢て参加せず、康梁の間に稍々距離を生ずるに至つた。「思想の奴隸性を煽る恐れあるを以て、憲法を以て孔丘崇拜を制定するを不可となして居る」また復辟運動に参加する所か、排滿革命に奔走して、屢々康有爲に指責せられてゐる。獨り其老師のみならず世評多く彼の變説政論

を難じたものである。

四、著 書(其二)

彼の著書は彼が失意の時に産れる。足が政治に奔走する時は手が研究に奔走する。されば足の失意な時は手が得意の時である。飲氷室文集は亡命の産物である。

段下に參して財政總長となりしを最近の最後として、彼は政園から遠ざかつてゐる。この數年は再起の機會を凝視し乍らぐんぐん研究する。研究の尻から發表する、持合せて蘊蓄をさらけ出して書いて居る。實に驚く可き學問と筆力である。某國の學者などは馬鹿にして居るかも知れぬが、中々太刀打出來そりもないそうなる。先秦政治思想史一卷、清代學術概論一卷、墨子學案梁任公學術講演集、梁任公近著第一輯上中下三卷、中國文化史綱、明清之交中國思想界及其代表人物を書いて書いて書きまくるぞと謂ふ意氣込である。

先秦政治思想史といふ書物がある。サブタイトルを中國哲學人生觀及其政治哲學といふ。之は北京法政專學授門南京東南大學に於て講演したものである。飲氷室文學に見ゆる支那思想變遷大勢が變遷して出た物に過ぎないが、二十年を経たる丈けに全然異なつてゐる。構想といひ表現組

織といひまるで別物の観がある。徐志摩が英文に、劉文島及其夫人劉世劭女士が佛文に繙譯してゐる。しかく外國人に讀せたい所があるのである。書中到る處に支那にもかゝる思想があるぞ」と囁いてゐる。

「ヘブル人、印度人の宗教觀念は支那にはない。ギリシヤ、ゲルマン人の瞑想的形而上學は支那にはあるが昌んならず、近代歐洲の純客觀的科學は支那では微々として言ふに足らぬ。然らば支那の人類文化史上占め能ふ位置は何れにあるか、實に支那の學術は人類現世生活の理法を研究するを以て中心と爲すのである。吾國は人生哲學、政治哲學を以てせば世界何處に到つても引けは取らない世界文化博覽會の出品はこれを待つのみである」

「春秋戰國は學術勃興したのであるがそれは歸する所人生哲學政治思想である。其政治思想の特色は三つある、曰く世界主義、曰く民本主義、曰く社會主義である。この三種の主義の内容は現代歐米人の提唱するものと、孰れが優り孰れが劣れるか。それは自ら別問題である。しかし此三種の主義が我國人單獨の發明であることは自分の高言して憚らぬ所である。」

「歐洲十四五世紀以來國家主義萌芽發展して、遂に今次の世界大戰を來たし。我國史上未だ此

くの如き慘酷の鬭争を見ず、又歐洲の自由と干渉と對峙して勞資の抗争今日に至つて最も甚だし。中國は國家を組織せず漢唐以降社會政策精神を用ゐるしが、故に全國比較的平等である。」

「最近二十年來我國人汲々歐洲政治制度を移植して一制度の效せざるに又他の制度を望む、立憲、強和、聯邦、ヴォルセヴィク……凡て中國人の曾て行ひし所を一々取りて試験せむと爲してゐる。何ぞ知らむ古來我國に偉大なる政治哲學ありしを」と言つたやうな調子である、曾て飲氷室で歐化を説き、燈を張り酒を置いて花嫁を門に迎へむと稱した梁啓超とは一寸風具合が違つてゐる。「歐洲人は相争嫉を説き、我等は仁愛を説く、孔子の教は大同主義であつて、人治主義である」老子は自然生活に復合すべきを説いたものであるが、老子の自然主義は(一)楊朱の順世的個人主義(二)陳仲の進世的個人主義(三)許行の無政府主義(四)慎到の物治主義となつた」これ等の主義を夫々豊富なる章句を引照して説明してゐる「墨子は非攻、犧牲、兼愛を説いてゐる。恰も基督の精神と一致し居る。廢兵を改めず、飢ゆるも天下を忘れずなどいふは無抵抗主義である」

「法家は機械主義で法治、——物治主義である」

「そこで春秋は統一を説いてゐる。春秋微言大義には「三世」を分つて進化の軌道を説いてゐる。

「據亂世」第二「升平世」第三「大平世」の順序で進歩する。」また「春秋末に於て宋都に平和會議を開いてゐる。これが海牙の平和會議に相等する。そうして非攻寢兵を約束して居る。華頓會議の軍備縮少である。」

解つた何のことない。梁啓超の先秦政治思想史は「見よ歐米の者共、中國には世界主義もありしぞ、社會主義もありしぞ、また海牙の萬國平和會議もありし。華盛頓會議の軍備休日運動もありしぞ」と言はむばかりに構想せられた書物であるのだ二十年前には外國文明との接觸を有意義であると證明せむ爲めに、先秦政治思想大勢を書いたそれが飲氷室文集の中に残つてゐる。今度は支那にも偉大なる思想がある事を内外人に知らせる爲に先秦政治思想史が書かれたつまり前に燈を張り酒を置いて迎へた花嫁をよい加減歡迎したる後に、ふと思出して土藏の中から古い骨董を一つびとつ取出して見せびらかした形である同時に以前は頑固なる守舊者に歐米文化を美婦に例へて接觸を誘導した。今度は新らしがり家の斷髮女に、傳統の支那固有文化を氣着かしめむと欲してゐる先秦政治思想史一卷を繕いて猶よく梁啓超の二十年前の彼にあらざるを知り得る。「成る程支那にも偉大なる思想があつた。けれども今日の支那はどうだ。今日の支那を齋らせし

ものはその謂ふ所の偉大なる思想の中毒ではないか」と陳獨秀は言つてゐる。

されば支那現思想界にあつては曾ては進取急進の思想家たりし梁啓超は保護的思想家の一派を率ゐて東方文化の優越を固持せむと奮發して居る。

五、彼の歐米觀

梁任公近著第一輯上卷は「歐遊中之一般觀察及一般感想」である。彼は曰ふ。「歐洲近世文明には三個の來源がある。第一は封建制度第二は希臘哲學、第三は耶蘇教である。封建制度は佛國革命來完全に崩壊せられ、古來の道德習慣は大半不適當となり、歐洲人の内的生活は漸次動搖し始めた。社會組織は變更され人間生活は一變するに至つたこの百年來科學の發達の結果産業組織は根本的に新しく起つて都會生活と村落生活は截然として相距るに至つた。無數の人間が利害の外には何等關係なく、多數のものは恒産なく工場生活をなし、社會の形勢は甚だ複雑になつて、殆んど應接に暇あらず、神經疲勞刺戟過多晝夜忙殺、休養の餘裕なく物價は日々に高く、生活競争日に烈しく生活難は日々に加はり、科學發達の惡果は到處に發見せられるのである。

科學の發達は宗教に致命傷を與へた。人類は下等動物より進化したものであると斷言する科學

は、上帝の創造、萬物の靈であると稱する宗教を破壊して居るまた一方哲學に就て謂へばカント、ヘゲル時代は、思想界は儼然として一種の權威であつたけれども自然科学の發達以來唯心哲學は四分五裂して、カントの實證哲學、ダルウインの種源論が出版せられて以來哲學は根本的に動搖して、哲學家は全然科學の旗下に投降するに至つた。かくて科學萬能は歐米人の夢となるに至つた。遮莫、科學萬能文明の結果は歐洲大戰となり、所謂科學文明の破産となり最近思潮變遷の大關鍵をなすに至つた。然らばこの百年來の科學萬能、物質過重文明を救済する爲めに、再び希臘哲學、希伯來宗教を再起せしむべきか。それは恰も死骨を起して立たしむるが如きに似て居る。思ふにこの歐洲物質文明を救済するものは中國文明であらねばならぬ。

第一中國には夙に世界大同の思想がある。今回の國際聯盟いふものは、つまりは世界主義と國家主義の發軔に外ならない。世界主義的國家それは我が中國に於て古來發達し來つたものである。第二に中國は亡びない。決して悲感することはない。財産の困難亦憂ふに足らない、閭族の專横腐敗また決して悲しむに足らぬ。歐洲民族も皆過去又は現在に於て、同等以上の經過をなしてゐる、中國には階級鬭争、産業發達の惡社會がない。それは實に中國の世界文明に教ふるべき

所ではないか。我等には孔子の「四海之内皆兄弟」「不患寡而患不均」の思想もある。井田制度もあつた。墨子の「兼愛」「寢兵」もある。今日西洋學者は「你們家裏有些寶具、卻藏起來不分點給我們、眞是對不起人啊」

と異口同音にいつて居るではないか。そこで我等中國人は一方益々西洋文明に擴充すると共にまた一方我國文明を以て、西洋文明を補助しそして一種の新文明を生み出さねばならぬ。この使命責任は悉く懸つて、我等の雙肩の上に加はつてゐる。

支那には孔老墨の三大聖人が居る。孔子の「盡性贊化」「日強不息」、老子の「各歸其根」墨子の「上同於天」悉く歸着する所「求理想與實用一致」の共同點に外ならぬ。これ等聖人の思想より新意義を見出して現代文明の破産を救済すべきではないか。

今日西學に沈醉するもの往々にして、中國固有の文化を一錢の價值なき如くといふが、西學とは何んだ。悉く中國の固有する物ではないか。彼等は幾千年來の中國を土蠻部落となして得意になつてゐる實に笑ふべきではないか曾て孔子を讀まず李太白を知らずして、怎うして彼等の好處が解るであらう。我等は愛する青年達に告ぐる。我等は本國の文化の誠意を愛護し、西洋人の學問

方法を研究し、兩文化を綜合して新文化系を形造らうではないか。そうすれば西洋文明の物質過重科學萬能の破産救済の上に貢献する所多大であると信ずる。」

六、彼の中國觀

凡そ支那を論ずるものに二種ある。恐ろしく悲觀するものと無暗に樂觀するものとある。恐らく兩端共に真相に徹したる支那觀ではあるまい。梁啓超はどつちかと謂ふと、支那を樂觀して居る。「中國不亡」これは信念である。

「我們萬不可有絲毫悲觀。說中國要亡了。講到什麼財政困難。人家不知比我加幾千百倍。我們過這小小順遂的日子就垂頭喪氣。歐洲人只好相率跳大西洋了若因閩軍專橫。政治腐敗。就說有辦法。請讀讀十九世紀上半期歐洲歷史。看是怎樣情形。英法兩國現在不是公認做民主政治的模範嗎？從前閩族的專橫腐敗還不是和我一樣？爲甚麼就能有今日呢？遠的不必說。現在資本階級的專橫又何如」

彼人歐洲の歴史を讀む中に、財政の困難、閩族專橫共に憂ふに足らずと爲すに至つた「また民國政界の混濁は固より乍ら、これを以て中國を悲觀する必要も認められない。前清の政界はどう

であつたか。國民は醉生夢死にして壓制を甘受してゐたのである。今日でも依然壓制を脱離してゐないけれども、國民は自覺して、彼等惡政治界罪惡を暴露する事が能きる。昨今の罪惡は同一であつても、揭破すると揭破せぬとは大に異なる。國民の自覺心の意現は一種の進歩をなしてゐる。古人の言に病を知るは即ち藥とある。従前は我が全身の病たりしに全く之を知らなかつた。今は知つて居る。この「知」といふ字から自然に治病の方法が出て來るのである。我等は現全自己の罪惡を知り、自己の住める社會の萬惡を知つてゐる。中國の一條の活路はこゝから出て來らねばならぬ。我等は「沒法子」の三字を中國辭典から塗去して、垂頭喪氣の支那悲觀說を打彼せねばならぬ。」

斯くいふ彼もまた支那國民性の弱點を見逃しては居らぬ。

「我們中國人最大の缺點。在沒有組織能力。在沒有法治精神。拿一個一個的中國人和一個一個的歐美人分開比較。無論當學生當兵。辦商業。做工藝。我們的成績絲毫不讓他們。但是他們合起十個人。力量便加十倍。能做成十倍。能成十倍大規模的事業合起千百萬個人力量便加千百萬倍。能做成千百萬倍大規模的事業。中國人不然。多合了一個人不惟力量不能加增。因衝突掣肘的結果。」

彼此能力相消。此前倒反滅了。合的人越發多。力量便減到零度。」

「我等中國人の最大短所は組織能力の缺乏せるに在る。法治精神が無い。一騎打で行くと學生としても、兵士としても、商人としても、工藝をさせても、我等の成績能力は歐米人に比較し少しも劣るところない。然るに彼等歐米人は十人協すれば十倍の力量を加え、十倍の大規模の事が出来る。千百萬人が結束せば千百萬倍の大規模の事業ができる。中國人は然らず一人を増しても能力は増加せない。衝突撃射して結果、能力を相消毫して反つて反滅する。協力するもの愈々多ければ益々力量は減じて零度に到るの常である。店舗を開けば悉く金を儲けるにも拘らず株式會社を始めると大部分缺損して倒れて仕舞ふ、勇敢なる兵士が軍隊を作れば皆敗北して善良なる國民も共和立憲を形造つて國家を滅茶苦茶にして仕舞ふ。」

中國人には法治精神が足りない、故に共同生同が能きない。我等は中國人をして、歐米人と競争せしむる爲めに、先づ法治精神を鼓吹し、協力共同の國民性を涵養せしめねばならぬ。」

梁啓超のこの見識は甚だあたつてゐる。どうも支那人は衝突抗駁實に喧しい國民である。一致が出来ぬ。近い話が繪畫展覽會が開催せられれば、支那人畫家仲間で新舊相争ふて畫争ふにす

る。えらそうにすると語呂が似て居る。對支文化事業をやると謂へば、片や梁啓超范源濂、片や若き學者達相分れて、なか／＼意見があるそうな。つまり對峙分化事業になつてゐる。

彼は支那の現状、前途を毫頭悲觀せない。然らば現代の支那を如何にして救済せむと欲するか。

「現在我們第一個災星、是南北軍閥惡很很的在那裏包攬把持、你有甚麼法子打破他？不打破他能彀有着手處嗎」

法子麼？有的、但要靠諸君。什麼法子呢、

自然是國民運動！」

これは彼が演説に於て青年民衆の前に自問自答したる一句である。國民的運動は彼の支那救済の斷案である。梁任公學術講演集第三輯に「市民群衆運動の意義及價值」といふ一文がある。

「五四運動は學生を以て主體となしたが、今後國民運動は市民色彩を濃厚ならしめねばならぬ。つまり彼は學生の獨專せる支那民衆運動を國民運動となさむと欲してゐる。けれども如何せむ學生以外の國民の多くは文盲無學無自覺にして梁啓超の注文通りには、容易に國民運動は起りそうもなす。

「何故に國民運動を提唱するかといふに、それはデモクラシーの根本精神がこゝに在るからである、凡そ民主主義の國家政治は民國意識の上に建設せられねばならぬ。十九世紀歐米の改革は悉くこの運動の賜物であつた。」

政治軌道足要把政治設建在國民意識之上、想引地上軌道、除了市民群衆運動外沒有活路」

市民羣衆運動の外に、路がないと論結して居る。排日運動に案外成功を見たるを以て、中國改造の爲にもう一度國民運動を捲起さむと欲するであらうが、若き支那青年達はまだ梁啓超の言葉に振ひ立つ程に、充分反動的左傾しては居らないらしい。

七、彼の日本觀

飲氷室全集に書いてある。

「日本の或る青年が任公に問ふて曰つた。

——支那人は歐人を蛇蝎の如く視る有識の者と雖もまた免れずと聞くがどういふ譯か。任公はいつた。

——歐人を蛇蝎視するは昔のことである。今は之に反して、歐人を神明の如くに之を崇め之に媚

を獻げて居る。之に憐みを乞ふて居る。有識の士と稱する者は最も甚だしい。……」

書かれて二十餘年後の今日と雖、趣き多い話ではないか。何とならばこの言あつて二十餘年後、歐人を崇敬せるもの今に至つて最も甚しいからである。一體人の事ではない。日本人でも歐米人と見ると一段も二段も下風に立つて、遠慮して相對するの心理がある。この種の態度が彼達を恐ろしくスポイルして知らず／＼傲慢なる優越性を抱かしめるに至つた。

閑話を休憩して梁啓超の日本觀を述べねばならぬ。若しも歐米のある青年が任公に問ふて曰ふたならば、任公は怎う答へるであらう。——支那人は日本人を輕蔑すると聞く。有識の者と雖もまた免れずと聞くがどういふ譯か。

任公は答へるであらう。

——日本を輕蔑するは昔のことである、今は之に加えて、日本を蛇蝎の如くに之を嫌ひ、之を排斥して居る。之を攻撃せむとして居る。有識の者と稱する者は最も甚だしい

本文の記者は斯うした言葉が書かれてはないかと彼の著書を幾度か繰返へして見たが、遂に不幸之を見出し得なかつた。けれども成程文字通には書かれてはゐないが、著書の到る處にその氣

合が載つて居る。

「今天下之可憂者莫中國若、天下之可愛者莫中國、吾愈益憂之則愈益愛之。愈益愛之則愈憂之。既欲哭之又欲歌之吾哭矣。進歎踊者吾歌矣誰歎和者。」

彼は愛國思想家である。憂國思想家である。されば彼は日本排斥民衆運動にも同意し参加し聲援することを怠らなかつた。二十一箇條の後彼は最も屢々論じて、日本の對支外交を難じた「我自對德宣戰後中德條約廢止日本山東繼承德國權利之說、當然沒有了根據」彼は支那の對獨宣戰歐洲大戰參加の後は、日本の山東に對する權利は自然消滅したものであると論じ、盛に利權回收熱を煽ふた。彼は自ら巴里の平和會議に出張して飛躍活動するところであつた。

吾人は梁啓超の對日思想感情を三期に分つことが能きる。第一期は飲氷室全集を出版した頃で、二十年前に於ては洪憲密謀の爲に横濱丸の火夫に化けて上海から廣西に行つたこともあり小村參贊官等某々に頼つて日本に亡命した事もある。どつちかといふと當時は日本に親しみを感じてゐたのである。寧ろ彼の愛國憂國の感情は歐人に向つて動いて居つた。然るに二十一箇條の後は掌を翻へして排日に變じ、我が對支外交を論難したのである、あれ丈の筆鋒筆勢を以てやるの

であるから、忽にして排日議論は天下を動かしために相違ない。而して今や彼の對日思想感情は第三期に入らむとしてゐる。

「今日より我等は中日關係を斷然改めて相助け相携へ東方文化の興進に努力せねばならぬ」と去月服部博士歡迎席上に於て宣言して居る。萬更これは場當りのお世辭でも無いらしい。昨今の彼の行動よりすれば、必らず然かあるべきである。何故なれば斯くも彼親日的傾向を帯び來つたか。その心理的原因是は必らずしも付度せられぬものではない。

排日思想を抱いて山東利權回收の輿論を、ベルサイユ平和會議の附近にばらまく爲に渡歐したる彼は、端なくも有色民族の自覺を切實に抱くに至つた。國際聯盟の代員を眺めても、白色ばかりで殆んど寂寥に堪えなかつた。隣國日本の罪を訴へて砌に憐みを乞ふて見たが、大中國は西班牙程にも重きを爲さない彼の國際聯盟評論を讀むと、その心理の推移がよく解る。

彼は元來が思想家であるだけに、之を思想、文化の上から考へて歐洲大戰の跡に立つて突如彼は東方固有の文化を思出したのである。曾ては燈を張り酒を備へて新婦を迎へるが如く、西洋文化を輸入した彼、科學文明の謳歌者たりし彼も、今更乍ら懷疑を抱かざるを得なかつた。所柄べ

ルグソンの老師 Bouteau を訪問して、東方文化の價值を聽問した。Bouteau は「自分は翻譯に依つて支那哲學者の書物を読みました。實に偉大なる哲理である。自分はもう老いたれば、今よりお國の文字を研究することも六ヶ敷しい。お國の人達の努力を望む」とか何とか言つたのである。これより梁啓超は東方文化の價值を考へて、甚だ屢々東方文化の言葉を口するに至つた。歸朝後清華學校、南開大學といつたやうな、兎もすれば支那文化を忘れむと奔る若き青年達を相手に、支那聖賢の學を講じて居る。北京に人文研究所、圖書館の設立の一大妙案を懐にして、一日北京交民巷に駕を進めたのである。この日より所謂「我等は斷然排日感情を棄て、相提携する」の必要を感じたのであらう。誠に結構なる思着きである。

誰か彼の愛國思想と愛國行動を難じ得やう。吾人は無論愛國心の功過伴ふものであることを知つてゐる。けれどもいやしくも日本人たるものが、他國人の愛國心を彼はいふべきでない如何にそれが日本を慢罵するものであるにしても、その慢罵が先方の愛國行動である限り、吾人は地を變へて、共鳴するとも惡人呼はりは爲し得ない、然るに世人の多くは支那の愛國者が癪に障つて支那の賣國者を讚助するのである。吾人の最も賤むものは日本を最負して支那を賣る支那人であ

る。されば我等が梁啓超が愛國の行動を爲したればとて、排日運動に参加したればとて、彼を斥け彼を拒む必要は毫頭ないと信ずる。彼はよく思想が變るから、安心出來ぬといふならば、それは自から別問題である。けれども日本國民は彼の親日的傾向を、アツプレシエイトするに躊躇するには及ぶまい。大に提携協力するがよいと思ふ。

八、彼の著書 其三

彼は非常な精力家である。民國九年に歸國して以來、南開、清華、北大、南京其他に講演せる傍ら、盛に著書を出版して居る。「清代學術概論」約五萬言、「墨子學案」約六萬言、「墨經校譯」約四萬言、「中國歴史研究法」約十萬言、「大乘起信論考證」約三萬言、講演集三卷十餘萬言、「中國韻文哀頭所表示約情感」約五萬言、「國文教學法」約三萬言、「孔子學案」約四萬言、「國學小史稿」及「中國佛教史稿」約四萬言、其他新聞雜誌寄稿三十萬言合計百萬言餘の著述を爲したとある。この言葉は民國十一年十月十日に書かれた文中にあるのであるから、無論其後も續々上梓して居る。「戴東原」、「中國文化史綱」、「梁任公近著」三卷、「明清代表思想家」等、驚く可き筆力である。近頃彼の學術は西洋學問の研究法を用ゐて、支那學を攻究整理するに在る。

さて以上は梁啓超の思想を攻究したるものであるが、讀者は何人も彼が變説改論の目まぐるしき程に迅速なる思想家であることに心着くであらう。しかしそれに關して彼は清代學術概論の中に釋明して居る。

啓超は大層無定見であつて、外物に徇ふてその所守を奪はれる。啓超の智識欲心は極めて熾んで其嗜むところの範圍もまた繁雜で、一業を治むる毎にそれに沈溺し、没頭し精力を集中して盡く其他を抛つて顧みない。若干の時日を経て他の業に移ればその前に治めたものを抛つてその精力を集中する故に相當の所得がある。時移れば舊を棄つ故に入るところ深からぬ嫌がある。また中間政治運動の爲に牽かれて其精力を消耗し、その學業を荒めた、識者は啓超は其政治運動を止め、一二點專心に勉強したならば、將來思想界に貢獻するところがあらう。」

「啓超の學は淺且蕪である」

「啓超は一貫の精神に缺けて居る。」

「啓超の思想の變るを難するものがあるけれども啓超の變るを恥ぢないのは其特長である。」

これ等の言葉は何れも梁啓超自らの言ふところである。彼はよく自らを知れるものである。古

人の言に知愚者不愚也とある彼もまた愚者では無い。何れにもせよ彼の學術が或に蕪にして博きは第自身の仰せの通りである。然りと雖推移多き現支那に在りて、彼の如く幾度もエボツクを造らうと欲する思想家に、終始一貫を求むることは、求むる者の方が無理である。我三宅雪嶺の如きでも思想界に永生きして居られる所以は、思想に進境があるからである。されば一面に於て梁啓超は現支那思想界を作つたとも、また現支那は此の如き思想家を生んだとも稱し得やう。我等は支那思想界のバロメーターとして彼を重寶に思ふ例へば蠶の様子に四度でも五度でも變化し行く人であるから、本人も面白からうが見てる方でも飽きが來なくつて感興が湧いて誠に結構である。